

津 留 遺 跡

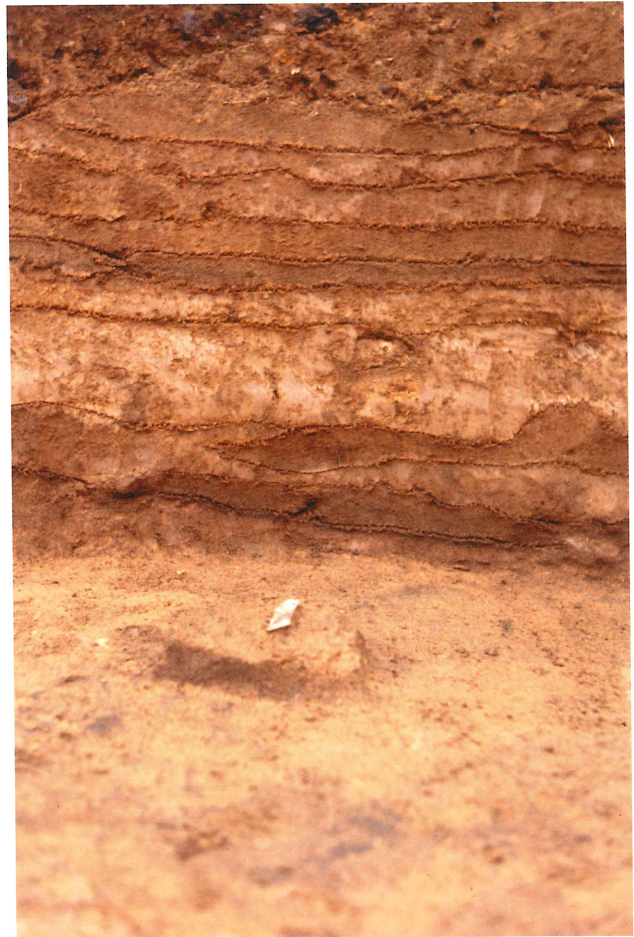
—国道326号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2013

大分県教育庁埋蔵文化財センター



3B区西壁層序



6C区層序



上層調査風景



V層遺物出土状況



6C区東壁層序



津留遺跡遠景（大野川に架かる橋の左）



調査風景



調査風景



遺物出土状況



調査風景



6C区北壁層序



8C区下層（最下層に河床の岩盤が出た状態）



4A区南壁の層



1区集石出土状況



4区Ⅲ層遺物出土状況



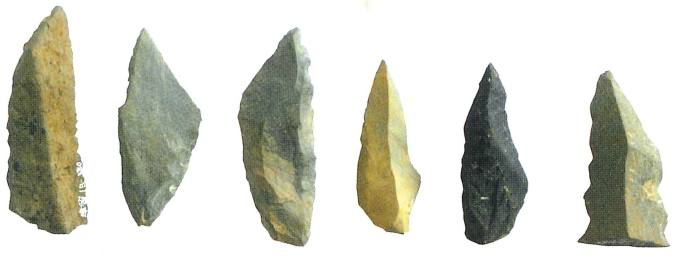
8B区Ⅲ層集石出土状況



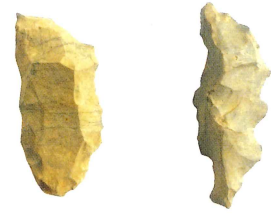
8B区Ⅳ層遺物出土



Ⅳ層遺物出土状況



1·2区Ⅲ層



6区Ⅱ·Ⅲ層



3区Ⅲ層



4·5区Ⅲ層

4·6区Ⅳ層



7区Ⅱ·Ⅲ層





2区IV層

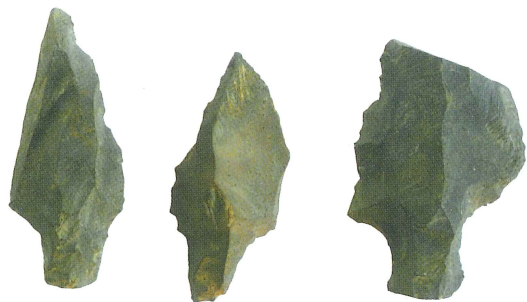


8・9区IV層

8区III層



7区IV層



6区V層



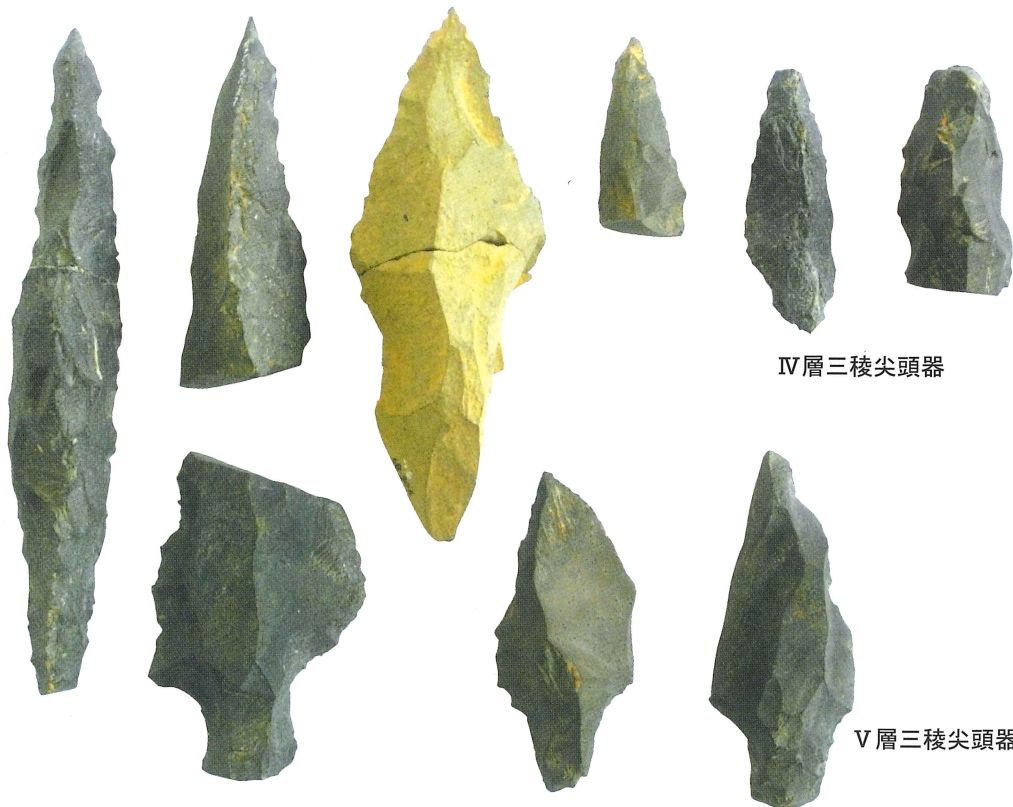
II・III層ナイフ・剥片尖頭器



III層三稜尖頭器



IV層ナイフ・剥片尖頭器



IV層三稜尖頭器

V層三稜尖頭器

序 文

本書は、大分県教育委員会が県土木建築部三重土木事務所の依頼を受けて、昭和56年度に実施した国道326号改良工事に伴う津留遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する豊後大野市犬飼町は、豊後水道沿岸の地域と大分県の南部、南西部との境界に位置しており、昔から交通の要となる地域です。

調査を行った津留遺跡は、大分県南西部から別府湾に注ぐ大野川を望む場所に位置しています。大野川上流の祝母・傾山系には硬く緻密な石質の流紋岩が分布しており、流紋岩は旧石器時代の県内では主な石器材料として利用されました。津留遺跡は石材の採取に適した場所にあり、調査では県内では例がないほど多量の遺物が出土しました。

この度、県土木建築部の協力を得て、発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究資料として広く活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多大な御理解と御協力をいただきました関係各位に対し衷心より感謝申し上げます。

平成25年3月29日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 山 口 博 文

例 言

1. 本書は大分県豊後大野市犬飼町大字田原所在の津留遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国道326号線の新設に伴い、大分県土木部三重土木事務所の委託を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は昭和56年7月15日から昭和56年12月11日にかけて実施し、高橋信武が担当した。
4. 現地での遺構・遺物の実測・写真撮影は別府大学考古学研究室の協力を得た。
5. 整理作業に伴う遺物実測は民間業者に委託して実施した（平成22年度株イビソク・平成23年度九州文化財総合研究所）。
6. 出土遺物・図面・写真等は大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
7. 本書で用いる方位は磁北（昭和60年）である。
8. 本書の執筆は高橋信武が担当した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査団の構成	1
第2章 調査地周辺の歴史的環境	2
第1節 調査地周辺の歴史的環境	2
第3章 遺跡の概要	6
第1節 遺跡の概要	6
第4章 発掘調査の内容	7
第1節 層序	7
第2節 各調査区の調査結果	16
第5章 まとめ	375

図 版 目 次

第1図	津留遺跡の位置と周辺遺跡	3
第2図	調査区地形図	4
第2-2図	津留遺跡調査区と旧地形	5
第3図	集石位置図	6
第4図	B区西壁層序実測図	8
第5図	B区東壁図	9
第6図	C区西壁層序実測図	10
第7図	5A~C区北壁層序実測図	11
第8図	6~8区北壁層序実測図	12
第9図	2~4区北壁層序実測図	13
第10図	縄文時代・近世の遺物	14
第10-1図	表土直下の遺構	15
第11図	1B区出土石器分布図	16
第12図	1B区出土礫分布図	17
第13図	1A区IV層の礫群	18
第14図	1B・2B区IV層出土石器	19
第15図	1B区他III・IV層出土接合資料	20
第16図	1B区III層出土接合資料	21
第17-1図	1B区III・IV層石器接合図	22
第17-2図	1B区III・IV層接合資料	23
第18図	1B区III・IV層石器接合図	24
第20図	1B区III・IV層出土接合資料	26
第21図	1B区IV層出土接合資料	27
第22図	1B・2A・2B区IV層出土石器接合図	28
第23図	1B区他IV層出土接合資料	29
第24図	1B区他IV層出土接合資料	30
第25図	1B区他IV層出土石器接合図	31
第26図	1B区他出土接合資料	32
第27-1図	1B区他III・IV層出土接合資料	33
第27-2図	第25図の石器分布図	34
第28図	1A区IV層出土石器	35
第30図	2B・C区III・IV層石器接合図	36
第31図	2B区IV層出土接合資料	37
第32図	2B区III・IV層出土接合資料	38
第33図	1B区III・IV層出土石器	39
第34図	1B区III・IV層出土石器接合図	40
第35図	1B区III・IV層出土石器	41
第36図	1B区出土接合資料	42
第37図	1B・3C区IV層出土石器	43
第38図	1B区IV層出土接合資料	44

第39図	1 B区IV層出土接合資料	45
第40図	1 B区III・IV層出土接合資料	46
第41図	1 B区III・IV層出土接合資料	47
第42図	1 B区IV層出土接合資料	48
第43図	1 B区IV層出土石器接合図	49
第44図	1 B区出土石器接合図	50
第45図	1 B区IV層出土接合資料	51
第46図	1 B区IV層出土石器	52
第47図	2 区出土石器分布図	54
第48図	2 区出土礫分布図	55
第49図	2 A区III層礫群	56
第50図	2 A区IV層出土石器接合図	57
第51図	2 A区III・IV層出土石器	58
第52図	2 B区III・IV層出土接合資料	59
第53図	2 B区III・IV層出土接合資料	60
第54図	2 B区III・IV層出土石器接合図	61
第55図	2 A区他III・IV層出土接合資料	62
第56図	2 A区III・IV層出土石器接合図	63
第57図	2 B区III・IV層出土接合資料他	64
第59図	2 B区III・IV層出土石器接合図	65
第60図	2 B区他III・IV層出土接合資料	66
第61図	2 B区他III・IV層出土石器接合図	67
第62図	2 B区III・IV層出土接合資料	68
第63図	2 B区IV層出土接合資料	69
第64図	1 B・2 B区III・IV層出土石器接合図	70
第65図	2 B区IV層出土接合資料	71
第66図	2 B区III・IV層出土石器	72
第67-1図	2 B・3 B区III・IV層出土石器接合図	73
第67-2図	2 B・3 B区III・IV層出土接合資料	74
第67-3図	2 B区III・IV層出土接合資料	75
第68図	2 B区IV層出土石器	76
第69図	2 B区IV層出土石器	77
第70図	2 B区III・IV層出土石器	78
第72図	3 B・C区出土石器分布図	80
第73図	2 B・3 C区III・IV層出土石器	81
第74図	3 B区III・IV層出土接合資料	82
第75図	3 B区III・IV層出土石器接合図	83
第76図	3 B区III・IV層出土接合資料	84
第77図	3 B区III・IV層出土接合資料	85
第78-1図	1～3 区III・IV層出土接合資料	86

第78-2図	1～3B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器接合図	87
第79図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器	88
第80図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器	89
第81図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	90
第82図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器接合図	91
第83図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器接合図	92
第84図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	93
第85図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	94
第86図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	95
第87図	3B・C区Ⅲ層の接合資料	96
第88図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	97
第89図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	98
第90図	2B・3B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器接合図	99
第91図	2B・3B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	100
第92図	3C区Ⅲ層出土石器接合図	101
第93図	3C区出土石器	102
第96図	3区礫分布図	103
第98図	2B区Ⅳ層出土石器接合図	104
第99図	2B区Ⅳ層出土石器	105
第100-1図	2B・3B区Ⅲ層出土石器接合図	106
第100-2図	2B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	107
第104図	3区石器出土状況	108
第104-2図	3区石器出土状況	109
第105図	3B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器	110
第106図	3C区出土石器	111
第107図	4区出土石器分布図	112
第108図	4区出土礫分布図	113
第109図	4A・5A区Ⅱ・Ⅲ層炭化物分布図	114
第110図	4A・B区出土石器	115
第111図	4B区出土石器接合図	116
第112図	4B区出土接合資料	117
第113図	4B区出土接合資料	118
第114図	4B区他出土接合資料・石器	119
第115図	4B区出土接合資料	120
第116図	4B区出土接合資料	121
第117図	4B区出土石器接合図	122
第118図	4B区出土接合資料	123
第119図	4B区出土接合資料	124
第120図	4B区出土石器接合図	125
第121図	4B区出土接合資料	126

第122図	4 B区出土接合資料	127
第123図	4 B区出土接合資料	128
第124図	4 B区出土接合資料	129
第125図	4 B区Ⅲ層出土叩き石	130
第126図	4 B区Ⅴ層出土接合資料	131
第127図	4 B区Ⅴ層出土石器接合図	132
第128図	4 B区Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ層出土石器	133
第129図	5 区出土石器分布図	134
第130図	5 区出土礫分布図	135
第131図	5 B区Ⅲ層下部の炭化物分布状態	136
第132図	5 C区出土石器	137
第133図	5 C区出土石器	138
第134図	5 B区出土接合資料	139
第135図	5 C区出土接合資料	140
第136図	5 B・5 C区出土石器接合図	141
第137図	6 区出土石器分布図	142
第138図	6 区出土礫分布図	143
第138-2図	6 C区東壁図	144
第139図	6 B区Ⅲ層炭化物分布図	145
第140図	6 B区Ⅳ層上面の炭化物分布状態	146
第141図	6 B区Ⅴ層の礫群	147
第141-2図	6 C区Ⅶ層の状態	148
第142図	6 B区Ⅲ層出土接合資料	149
第143図	6 B区他Ⅲ層出土石器接合図	150
第144図	6 B区Ⅳ層出土石器	151
第145図	6 B区Ⅳ層出土接合資料	152
第146図	6 B区Ⅳ層出土接合資料	153
第147図	6 B区Ⅳ層出土石器接合図	154
第148図	6 B区Ⅳ層出土接合資料	155
第149図	6 B区Ⅳ層出土接合資料	156
第150図	6 B区Ⅳ層出土接合資料	157
第151図	6 B区Ⅳ層出土接合資料	158
第152図	6 B区Ⅳ層出土石器接合図	159
第153図	6 B区Ⅳ層出土石器	160
第154図	6 A・CB区他Ⅲ層出土接合資料	161
第155図	6 A・CB区他Ⅲ層出土接合資料	162
第157図	6 C区Ⅳ層出土石器	163
第158図	6 C・7 C区Ⅳ層出土接合資料他	164
第159図	6 C・7 C区Ⅳ層出土接合資料他	165
第159-2図	6 C区他Ⅳ層出土石器接合図	166

第159-3図	6B・C区IV層出土石器	167
第160図	7区出土石器分布図	168
第161図	7区出土礫分布図	169
第163図	黄緑色石材分布図	170
第164図	角閃安山岩の分布状態(Ⅲ層)	171
第165図	7B・C、8B区Ⅲ・IV層出土石器	172
第166図	7A～C区Ⅲ層出土石器接合図	173
第167図	7B・C区Ⅲ層出土接合資料他	174
第168図	7B区Ⅲ・IV層出土石器接合図	175
第169図	7B・C区出土接合資料	176
第170図	7B・C区Ⅲ層出土石器接合図	177
第171図	7C区Ⅲ層出土接合資料	178
第172図	7B区出土石器接合図	179
第173図	7B・C区Ⅲ層出土接合資料	180
第174図	7B・C区Ⅲ層出土接合資料	181
第175図	7B・C区Ⅲ層出土接合資料	182
第176図	7B・C区Ⅲ層出土接合資料	183
第177図	7B・7C区IV層出土接合資料	184
第178図	7B区IV層出土接合資料	185
第179図	7B区IV層出土接合資料	186
第180図	7B・7C区IV層出土接合資料	187
第181図	7B区Ⅶb層出土接合資料	188
第182図	7B区Ⅵ・Ⅶb層出土石器接合図	189
第183図	7B区IV層出土石器	190
第184図	7B区IV層出土石器	191
第185図	7C区Ⅲ層出土石器	192
第186図	7C区他Ⅲ層出土接合資料	193
第187図	7C区Ⅲ層出土接合資料	194
第188図	8区出土石器分布図	195
第190図	8区出土礫分布図	196
第191図	8B・9B区Ⅲ層の礫群	197
第192-1図	8B区IV層の礫群	198
第192-2図	8B区Ⅲ層の礫群1	199
第193図	8B区Ⅲ層の礫群2	200
第195図	8A・B区Ⅲ・IV層出土石器	201
第196図	8B・9B区Ⅲ・IV層出土接合資料	202
第197-1図	8B・9B区Ⅲ・IV層出土石器接合図	203
第197-2図	8B・9B区Ⅲ・IV層出土石器接合図	204
第198図	8B区Ⅲ・IV層出土接合資料	205
第199図	8B区Ⅲ・IV層出土接合資料	206

第200図	8B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料	207
第201図	8B区Ⅲ層 出土接合資料	208
第204図	8B・9B区Ⅲ層出土石器接合図	209
第205図	9B区出土石器分布図	211
第206図	9B区出土礫分布図	212
第207図	9B区Ⅳ層出土石器	213
第208図	9B区Ⅶ層出土接合資料	214
第210-2図	7～9区出土石器	215
第210-3図	9B区Ⅶ層の石器	216
第211図	叩き石集成 1	217
第212図	叩き石集成 2	218
第213図	叩き石集成 3	219
第214図	叩き石集成 4	220

遺物一覧目次

1A区出土遺物	222	5C区出土遺物	295
1B区出土遺物	222	6A区出土遺物	298
2A区出土遺物	233	6B区出土遺物	299
2B区出土遺物	240	6C区出土遺物	310
2C区出土遺物	255	7A区出土遺物	321
3B区出土遺物	256	7B区出土遺物	321
3C区出土遺物	270	7C区出土遺物	339
4A区出土遺物	273	8A区出土遺物	353
4B区出土遺物	276	8B区出土遺物	354
4C区出土遺物	285	8C区出土遺物	370
5A区出土遺物	292	9B区出土遺物	370
5B区出土遺物	292		

写真図版目次

巻頭カラー写真図版 1
巻頭カラー写真図版 2
巻頭カラー写真図版 3
巻頭カラー写真図版 4

巻頭カラー写真図版 5
巻頭カラー写真図版 6
巻頭カラー写真図版 7
巻頭カラー写真図版 8

モノクロ写真図版 1 383
モノクロ写真図版 2 384
モノクロ写真図版 3 385
モノクロ写真図版 4 386
モノクロ写真図版 5 387
モノクロ写真図版 6 388
モノクロ写真図版 7 389
モノクロ写真図版 8 390
モノクロ写真図版 9 391
モノクロ写真図版10 392
モノクロ写真図版11 393
モノクロ写真図版12 394
モノクロ写真図版13 395

モノクロ写真図版14 396
モノクロ写真図版15 397
モノクロ写真図版16 398
モノクロ写真図版17 399
モノクロ写真図版18 400
モノクロ写真図版19 401
モノクロ写真図版20 402
モノクロ写真図版21 403
モノクロ写真図版22 404
モノクロ写真図版23 405
モノクロ写真図版24 406
モノクロ写真図版25 407
モノクロ写真図版26 408

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

昭和55年度から工事が行われていた国道326号線改良工事に伴う高松橋は、大分県大野郡犬飼町（当時）において大野川本流をまたぐ大規模な架橋であり、その取付け工事によって大野川左岸で段丘上が掘削されることとなった。その際、工事中の土採り断面から別府大学学生であった綿貫俊一氏により旧石器が発見され、大分県文化課に連絡があった。それを受け文化課職員が現地に行き現状を観察したところ、火山灰層に旧石器包含層が存在し、土採りが進行すれば工事によって包含層が消滅することが明らかとなったため、所定の手続きをとり県土木建築部と協議し発掘調査を実施した。

昭和56年7月15日から開始した発掘調査は、大分県教育委員会が主体となり夏休み中の別府大学考古学研究室の協力を得て実施した。当初、表面に現れた遺物の出土状態から旧石器包含層は火山灰層の上部だけに存在すると考え、調査期間を一カ月としていたが、発掘調査が進むにつれ下層にも旧石器包含層が存在することが明らかになった。数層にわたる文化層と予想以上の多量の遺物のために予定の期日を迎える時点でも未調査部を相当残す状態であった。このため、土木建築部に工事の延期を依頼して承諾を得、工事部分の完全掘削を図るため昭和56年9月10日から調査を再開した。夏休み期間が終了したため学生の応援がなくなったが当初から参加していた地元住民と共に発掘調査を進め、12月11日に調査を終了した。

津留遺跡は当初の予想以上に旧石器時代の遺物が多数出土し、厚い包含層であった。

第2節 調査団の構成

調査時の調査体制は下記のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会文化課
調査委員	橋 昌信（別府大学文学部助教授） 後藤 宗俊（県教育庁文化課文化財専門員）
調査員	清水 宗昭（同 文化課主任） 高橋 信武（同 主事）
調査補助員	綿貫 俊一（別府大学文学部学生） 野田 英治（同 上） 栗焼 憲児（同 上） 土居 和幸（同 上） 中村 仁（同 上） 須田 良平（東北大学考古学教室研究生） 橋本 孝生（駒沢大学OB） 小畑 弘己（熊本大学文学部学生）

調査期間中、地元から19人の方に発掘参加していただいた。また、県三重土木事務所及び株式会社川辺組よりご協力いただいた。

第2章 調査地周辺の歴史的環境

第1節 調査地周辺の歴史的環境

津留遺跡は大分県豊後大野市犬飼町大字田原に所在する。遺跡の所在する犬飼町はその後の市町村合併により、現在は豊後大野市犬飼町となっている。犬飼町は大分県南西部から別府湾に注ぐ大野川の中流の最下流域に位置する。

大野川流域は約9万年前に阿蘇カルデラができた際に発生した阿蘇IV火砕流に覆われたことがあり、現在もその影響が色濃く地形に反映している。遺跡周辺では標高100m前後の台地が古い山並み（大野川層群）の麓を埋めているのが見られるが、その崖面に露出しているのは阿蘇IV火砕流が固まった凝灰岩である。泡状の火砕流が阿蘇山から急速に低地部を埋めながら流下し、当時は流れていた古い大野川流域を埋めながら臼杵湾や大分平野に到達したのである。

凝灰岩層の下には臼杵から大野町付近にかけて分布する白亜紀の大野川層群が分布する。しかし、厚い大野川層群の高い部分では山地としていた所で凝灰岩台地の上に頭を見せている。この層は砂岩・礫岩・頁岩の堆積が繰り返され、層厚は20,000mとされる。大野川に浸食され、犬飼町周辺がもっとも観察しやすい状態にある。津留遺跡の発掘調査では調査区の最下層で岩盤を確認しているが、これが大野川層群である。その上位には凝灰岩は存在しなかったため、大野川の河流のために浸食され流失してしまったらしい。

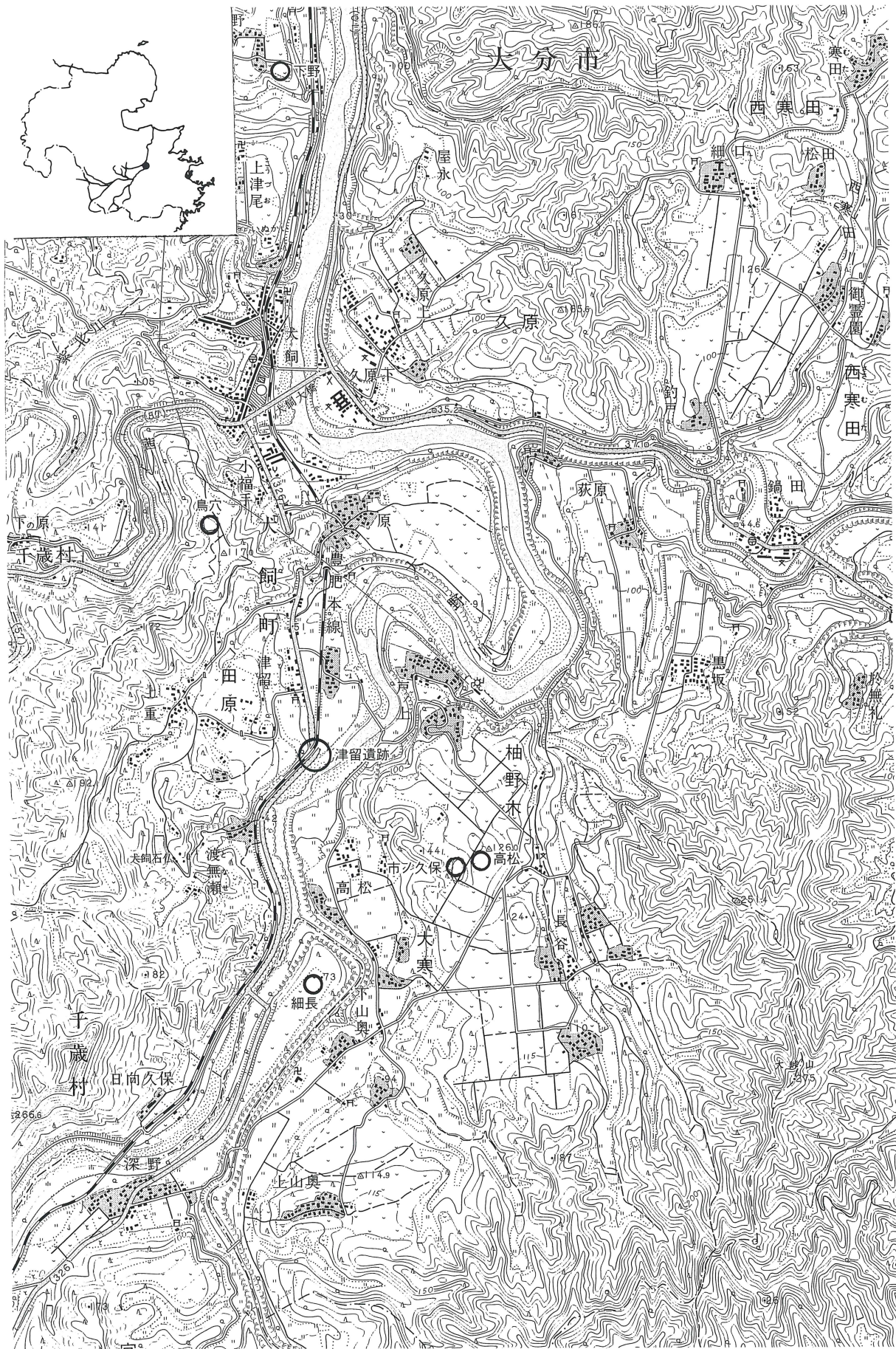
○旧石器時代

大野川の上流、大分と宮崎の県境付近に連なる祖母・傾山系には流紋岩が堆積しており、大野川の支流である奥岳川やその合流点下流の大野川には流紋岩が転礫として存在する。この流紋岩は硬く緻密な石質で、割ると鋭い縁辺をもつ石片が生じるため旧石器時代には大野川流域で石器の素材として大いに利用されている。祖母・傾山系の宮崎県側では五ヶ瀬川が大野川のように流紋岩を転礫として下流に流しており、宮崎県北部に流紋岩を利用した旧石器が広く分布している。

津留遺跡の上流約9.5kmにある豊後大野市岩戸遺跡は大野川本流と奥岳川に挟まれた台地上に立地し、流紋岩を用いた旧石器が多数出土している。複数の文化層が確認されており、津留遺跡と同様ではないが、津留遺跡のように石材獲得に利便の地に立地した遺跡である。岩戸遺跡で区別された文化層は大野川流域を越え西日本の旧石器を考える基準となっている。第6層上部文化層のナイフ形石器は、縦長剥片の打面を基部とし、その基部と先端部に調整剥離を施す特徴がある。第6層下部出土の石器群はナイフ形石器・三稜尖頭器・削器からなり、大部分が国府型ナイフ形石器に類似する。

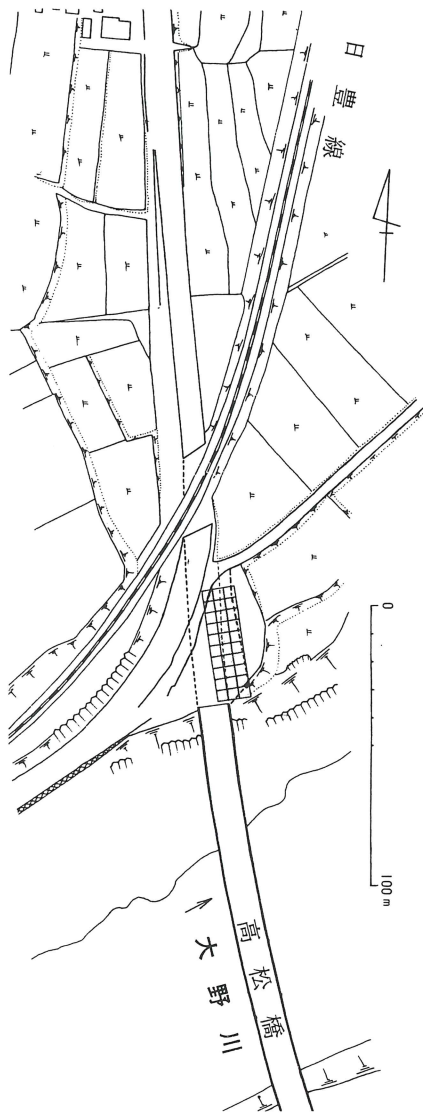
この他、津留遺跡の南西約8kmにある豊後大野市三重町の百枝遺跡も大野川流域にある旧石器時代の大遺跡である。

津留遺跡周辺の旧石器時代遺跡としては高松遺跡・市ノ久保遺跡・細長遺跡がある。高松遺跡は大野川対岸の標高125m前後の台地上にあり、弥生時代から古墳時代の集落跡であるが旧石器も出土したと報告されている。市ノ久保遺跡は高松遺跡の南側に隣接し、約6,500点の旧石器時代遺物が出土している。ここでは津留遺跡に存在しなかったアカホヤ火山灰層（約7,300年前）・AT火山灰層（約25,000年前）やその下位に黒色帯も存在した。市ノ久保遺跡の旧石器はアカホヤ火山灰層よりも下のソフトロームと呼ばれる軟質の火山灰層に含まれていた。細石刃核約120点・細石刃1,000点以上に加え、削器・局部磨製石斧・石皿・台石・叩き石類等が出土しており、津留遺跡よりも新しい。細長遺跡では旧石器が採集されている。



第1図 津留遺跡の位置と周辺遺跡

津留遺跡の位置と周辺遺跡 (地点を示すのみで遺跡の範囲ではない) 国土地理院 1/25000 犬飼



第2図 調査区位置図

○縄文時代

縄文時代になると早期・後期・晩期の時期が他に比べて存在が目立つ。津留遺跡の北北西約1kmの台地上には縄文時代早期の鳥穴遺跡がある。早期の遺跡は台地上だけでなく、地図の外であるが野津川沿いの低地にも分布する（臼杵市野津の落合遺跡）。

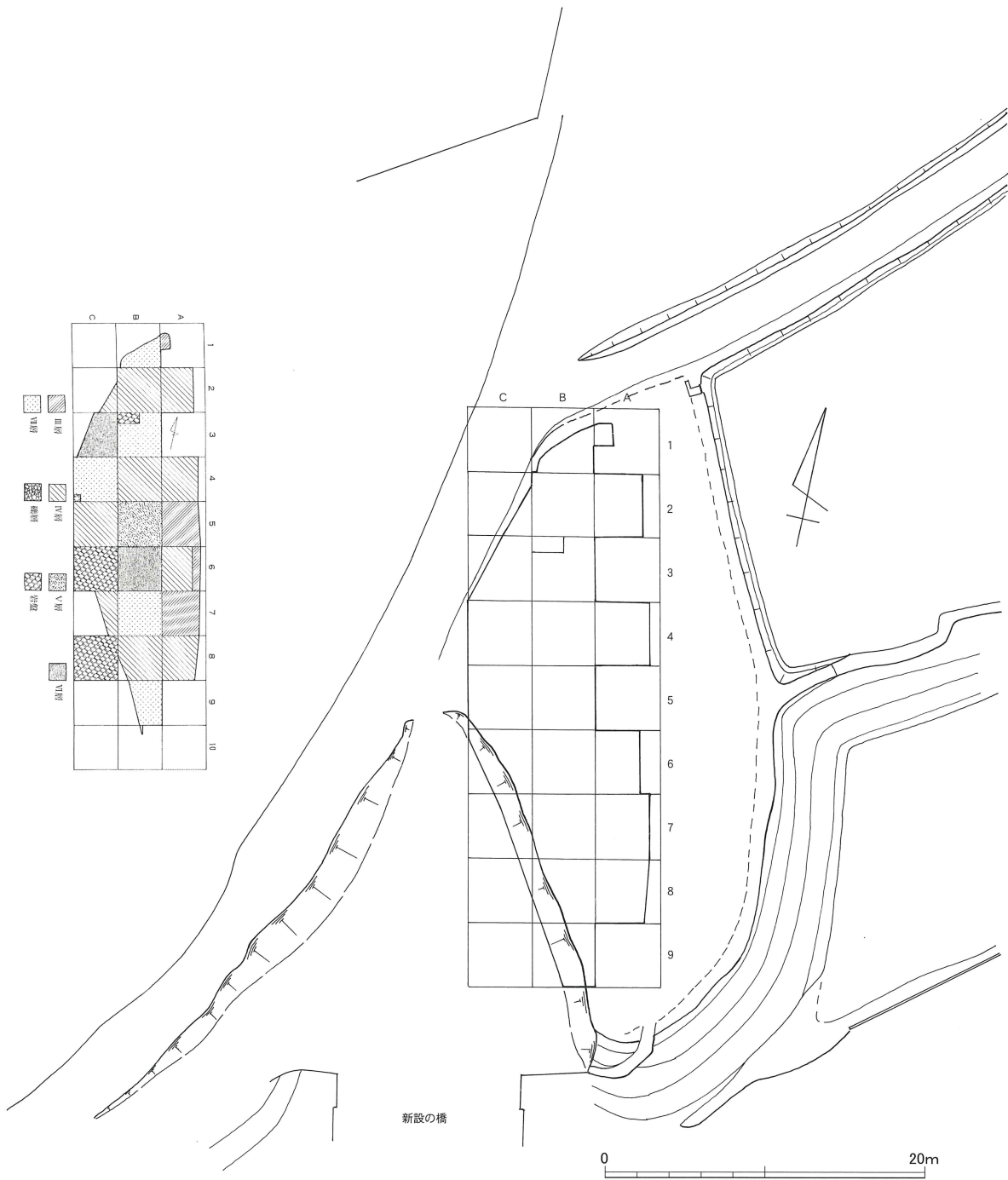
津留遺跡の北約3,000mにある下野遺跡は、縄文時代晩期の円形竪穴住居跡1基が発見された大野川を眼下に望む台地上の遺跡である。下野遺跡では農耕に関する扁平石器が比較的多数出土し、他に漁撈具らしい石錘も多い。後期の三万田式土器もみられる。地図の範囲外であるが野津川流域の内河野遺跡では後期の三万田式期の竪穴住居群が調査されている。

○弥生時代・古墳時代

津留遺跡の北東約1kmにある大野川が大きく屈曲した内側の台地には舞田原遺跡がある。竪穴住居跡が弥生時代中・後期9基、古墳時代前期27基調査されており、大野川中流域を代表する大集落のひとつであった。舞田原遺跡の北東側で大野川は東から来る野津川と合流するが、野津川流域の台地にも調査された遺跡が多い。

《関係文献》

- 清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄1986「岩戸遺跡 大分県大野郡清川村所在旧石器時代第3次発掘調査報告書」清川村教育委員会
- 橋 昌信・清水宗昭・高橋信武1982「津留遺跡発掘調査概報 国道326号改良工事に伴う発掘調査」大分県教育委員会
- 清水宗昭・栗田勝弘・城戸 誠1985「舞田原」犬飼町教育委員会
- 栗田勝弘1988「市ノ久保遺跡 大分県犬飼地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ」
- 坂本嘉弘・小柳和宏他1988「高松遺跡 大分県大野郡犬飼町大寒地区所在遺跡の調査報告書」犬飼町教育委員会
- 中野宏一他1997「一般国道10号線犬飼バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書下野遺跡・上津尾遺跡」犬飼町教育委員会



第 2-2 図 津留遺跡調査区と旧地形

第3章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

遺跡の東を北流する大野川の川床岩盤の標高は現在約26.5mである。

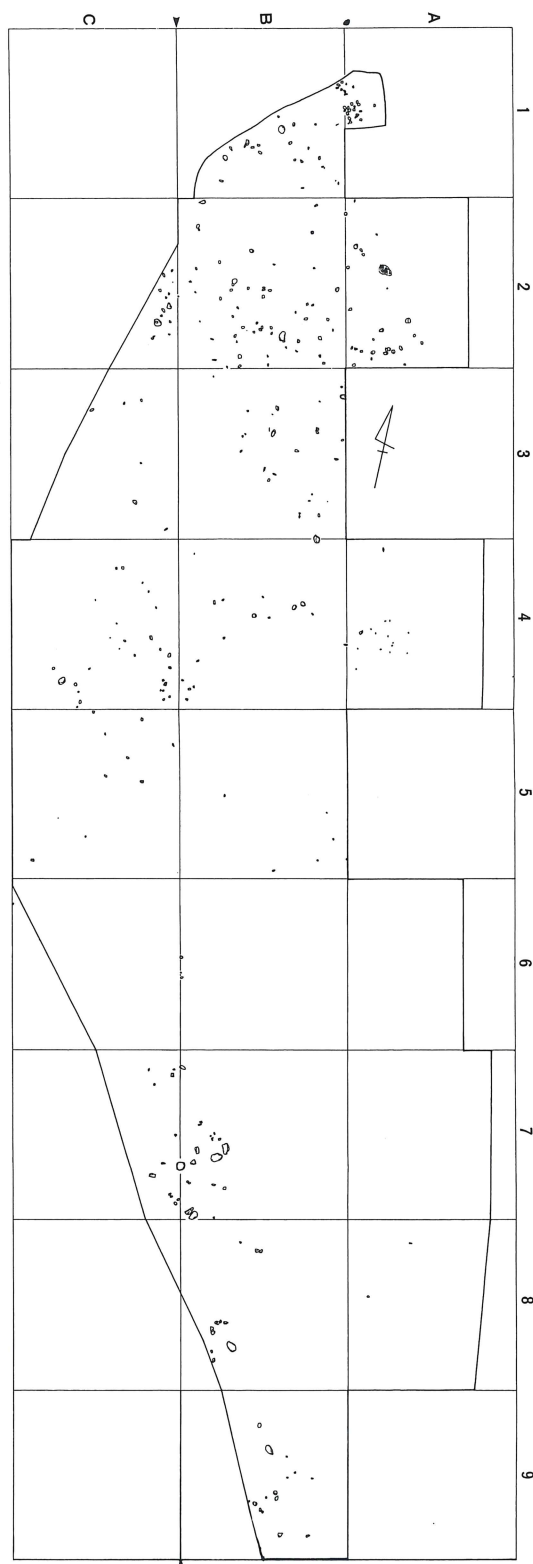
調査前の調査場所の標高は45.2m後であった。工事に伴う旧地形の掘削が行われた状態だが、遺跡発見時にはまだ未掘削の場所が残っていた。掘削予定地を調査対象とし、調査区を4m方眼に区分けし、北から南に向かって1～9区、さらに東から西に向かってA～C区とする呼称をつけた。地形図（第2-2図）では調査区は南側に突き出た舌状の地形だったことが分かる。

調査の結果、8C区では標高43.1mの高さで岩盤が現れた。岩盤は白亜紀層の大野川層群と呼ばれる礫岩・砂岩・頁岩からなるもので、層厚は最大20,000mとされる。大野川流域は約9万年前に阿蘇IV火砕流に覆われたことがあり、当時も川がこの位置に存在した筈であるが、調査区には阿蘇IV火砕流は存在しなかった。阿蘇IV火砕流は大野川の水流が浸食して流し去ったと思われる。

6C区では岩盤の標高は約42.8m～42.4mである。川に近い8C区の岩盤の方が川から遠い6C区よりも低い点からすると当時の河床は凹凸があり、均等な面ではなかったことが分かる。川に向かって均等に岩盤が傾斜するという事はなかった。標高43.5m位から下には薄い厚さの砂層や粘土層・礫層が重なって堆積しており、その上位に火山灰層が堆積していた。したがって、水流により形成された下位の堆積層のできた時代には直接、当時の大野川の流れがこの高さを流れていたのである。

調査では地表に近い黒色土層から縄文時代早期・中期の遺物が少数出土し、下位からは旧石器時代の遺物が多数出土した。

遺跡発見当初はそれほど多数の遺物が存在するとは思わず、掘り下げていったが、いつまで経っても遺物が出てくるので一部を深掘りし、火山灰層だけは調査してしまおうと試みた。調査開始時の包含層上部の形よりも調査終了時の地形は拡大している。



第3図 集石位置図

第4章 発掘調査の内容

第1節 層序

第4図はB区とC区の境界の断面図である。1区から9区までを連続的に図化した形になっている。実際の作図に際しては、裏側トレースした図面をつなぎ合わせた部分がある。第5図は同様に4m東側を図化したもので、AB区の境界を図示した。第6図は4C区・5C区・6C区・8C区の西壁である。調査開始時点の包含層の範囲は第3図のようであるが、掘り下げが進行すると下層の範囲は拡大したので図では下層しかない部分がある。第7・8・9図は以上の第3～6図と直交する面の層序である。これも裏トレースして繋いだ部分がある。

調査区全域をとおして共通の層序は後述のⅠ層からⅦ層までである。部分的な相違はあるがまとめた。Ⅳ層は場所により細分した。Ⅵ層からは水流の影響で堆積した層序であり、場所ごとに共通の状態ではなかった。共通層序以外はその場所ごとの特徴を説明する。

Ⅰ層：攪乱層。調査以前の段階でローム層より上位に本来あるべき土層は土地改良によって削られており、自然な堆積層序は不明であった。わずかに5・6区では黒褐色土層が残り、縄文時代早期の遺物が出土した。

Ⅱ層：黄褐色土層（土色帳では10YR5/8黄褐）。いわゆるソフトロームである。サラサラし軟質。

Ⅲ層：褐色土層（10YR4/4褐）。いわゆるハードロームである。やや粘性があり硬質。場所によっては下部に白っぽい土層が分離された。

Ⅳ層：黄褐色土層（10YR5/6黄褐）。Ⅲ層よりもやわらかく粘質。パミスを多量混入する。パミスは0～10cm前後の灰色・白黄色・茶色・黒色の柔らかい塊である。橙色のスコリアも少量混じっていた。7B区西壁ではパミスの少ない下部を区別した。

Ⅴ層：にぶい黄色の層で少量のパミスを含む（2.5YR6/4にぶい黄）。やや砂質。欠落する調査区もある。

Ⅵ層：青灰色で微細な砂よりなる砂層（2.5YR5/43黄褐）。層の上下面是波打ち、水流の影響で堆積した層である。

Ⅶ層：Ⅵ層とは不整合（10YR5/8黄褐）。粘質のある土混じりの砂層である。

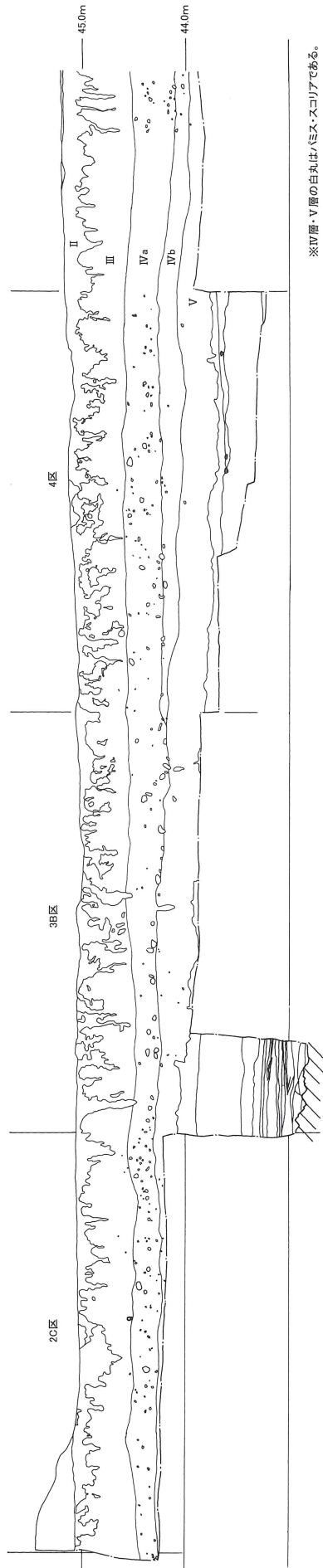
以下は調査区の壁面ごとの特徴的層序を説明する。裏トレースではなく、実際の面の説明を行う。

その他の層・調査区ごとの相違

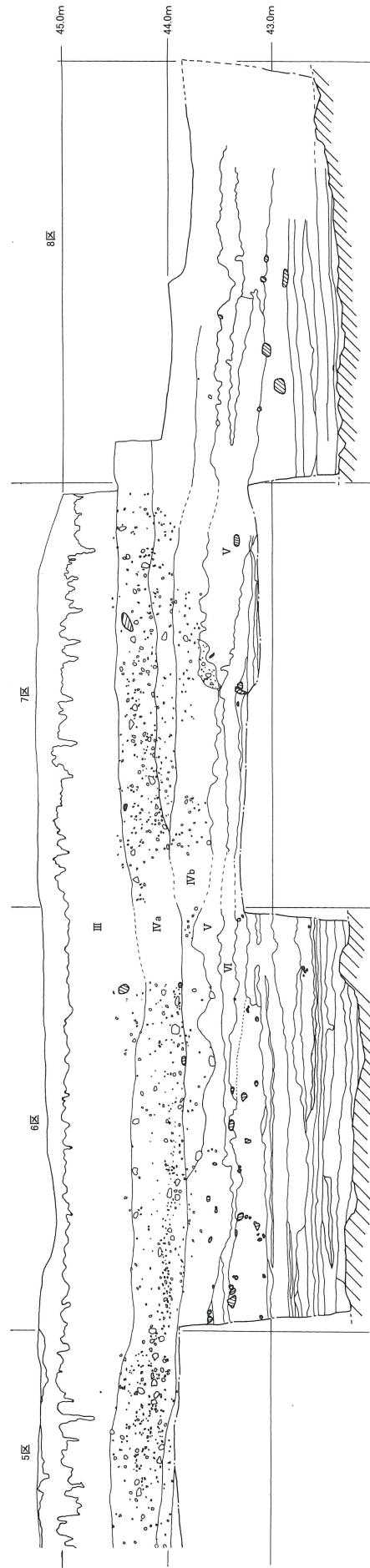
4C区北壁ではパミスの分布は厚さ20cm程度の範囲に収まる状態で、Ⅴ層の下位には白褐色の粘土層が上面を波打たせて分布していた。Ⅶa層とした。4C区西壁は一部岩盤まで掘り下げた。Ⅱ層・Ⅲ層を合わせた厚さは約40cmあり、Ⅳ層（10YR5/6）は約30cmあり、ここまでは水平に堆積している。Ⅴ層（2.5YR7/4）は下面が波打つ。Ⅵ層はなく、Ⅶ層（7.5YR5/6）が厚さ30cmほどあり、中間には厚さ10cm弱の砂質土層がレンズ状に入る。下位は以下の順に堆積する。厚さ20cm前後の粘土層（7.5YR4/4）→厚さ20cmほどで砂が8割の層（10YR5/6）→以下は厚さ10cm以下の薄い層が65cm位の厚さの中に重なる。粘土層（7.5YR5/6）→粘土層（同）→砂層（7.5YR5/6）→粘土層（同）→砂質層（10YR4/6）→粘土層（7.5YR5/6）→砂層（10YR4/6）→砂層（10YR5/6）→砂層（10YR6/6）→上面が黒砂の砂質層（7.5YR4/6）→茶色粘土層（5YR3/4）→粘土層（10YR5/6）→砂質層（7.5YR5/6）→砂層（7.5YR4/6）→砂層（10YR4/6）→岩盤。岩盤の標高は42.9mである。

6B区南壁の西部ではⅢ層の下にパミスの少ない層が厚さ最大35cmほど途中から現れていた。

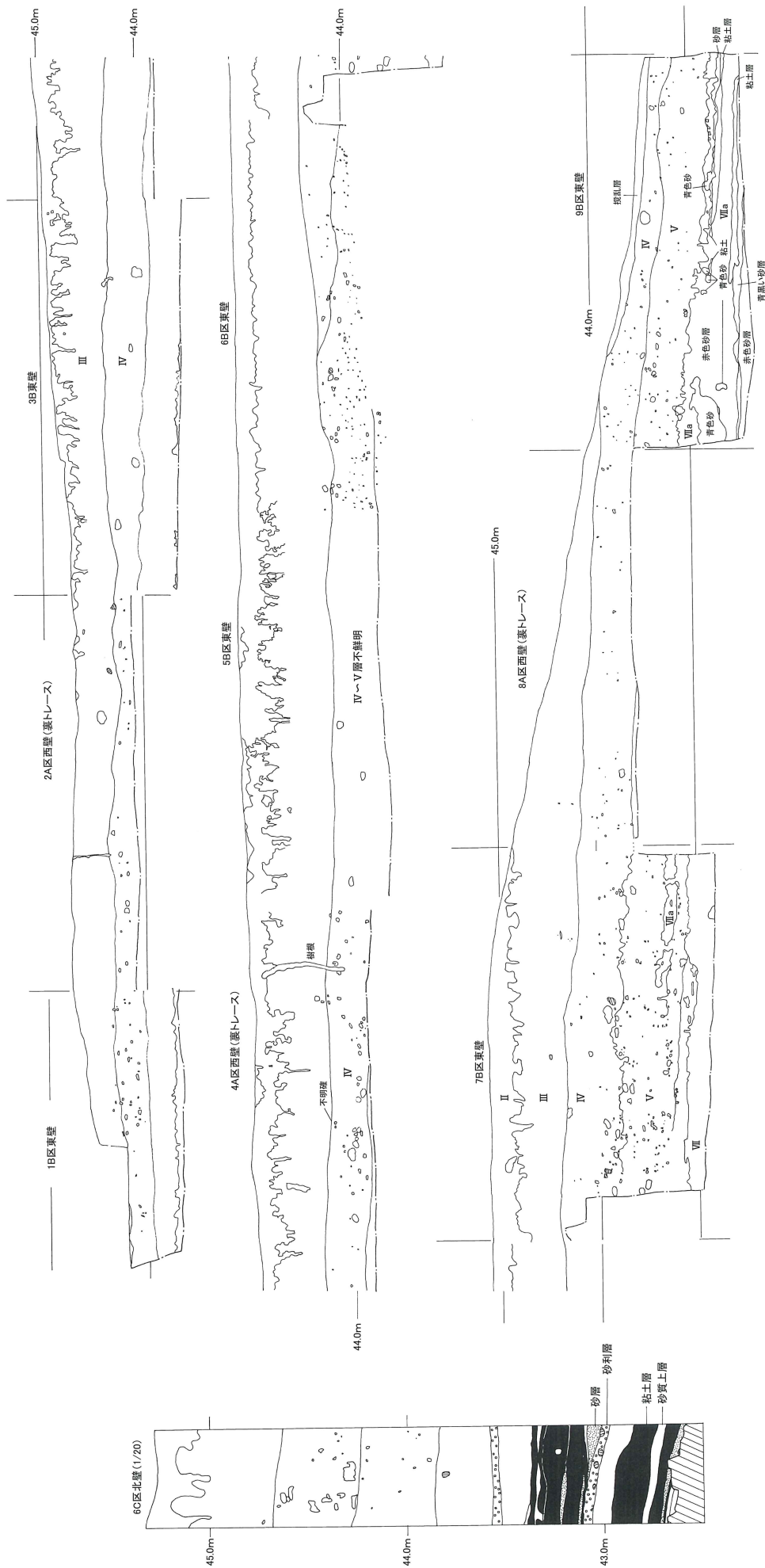
6C区西壁では北端にⅣ層が幅1m弱あり、下位には細かい水成堆積が重複していた。東壁については第138-2図のところで説明する。南壁は東半分はⅢ層が削られずに残るが、45°の角度で西側が削られ、標高43.4m付近からは残っていた。6C区南壁では全ての層が東に向かい傾斜していた。最下層の岩盤は西側が高く標高42.68mで、中央部分は42.2mであった。岩盤の傾斜が上位の堆積に影響を与えている。岩盤の上には粘土層・砂利層・砂層・黒砂層・砂利混じり砂層が繰り返し堆積し低田。6C区北壁では岩盤の標高は西側で41.93



※IV層・V層の白丸はバミズ・スコリアである。



第4図 B区西壁層序実測図



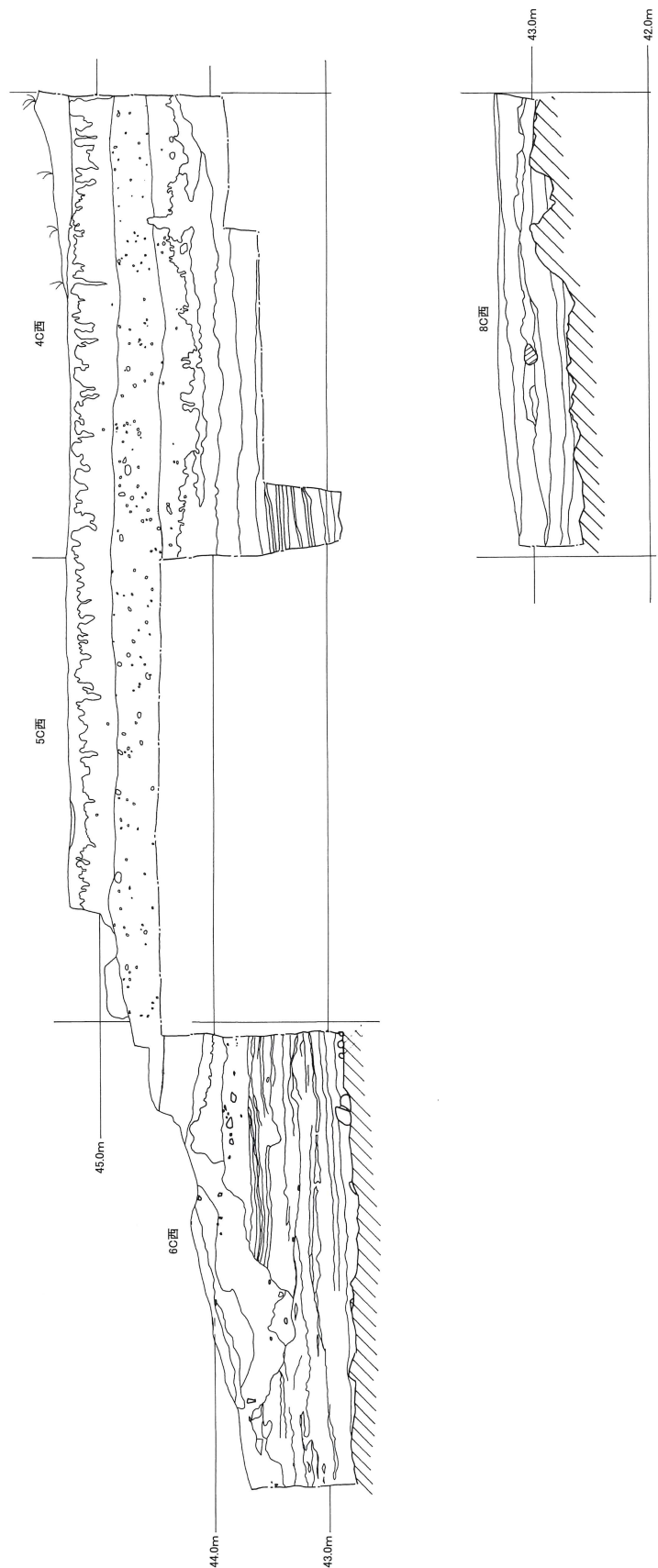
第5図 B区東壁図

m、東側で42.2mであり東側に傾斜していた。上位には厚さ1m程度に30枚くらいに分層できるほど薄い水成層が東下がり堆積していた。

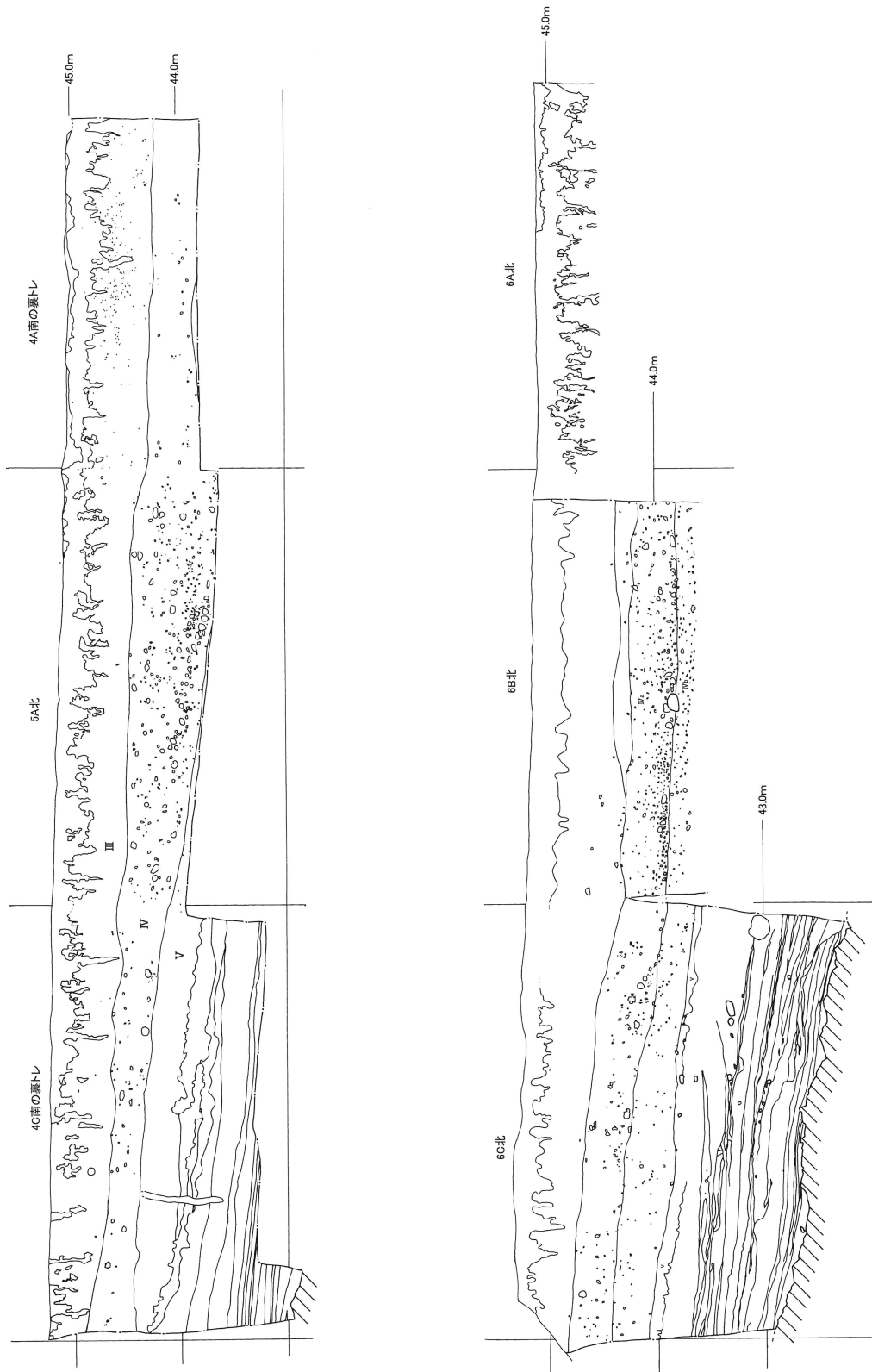
7B区西壁はIV層上部で特に黄色のパミスが多かった。下部は少ないので二分した。V層とVI層の間に幅50cm弱・厚さ15cm程度の礫の多い部分があった。VI層は青色の砂層。VIIb層とした厚さ15cm程度の砂層があり、南側に傾斜堆積していた。南端では薄く2cm前後になる。その下は東部では砂利層がありこれは西壁の南端床面に再び現れる。南部では砂利層の上に厚さ3cmほどの砂層→厚さ5cmの粘土層の順に薄い河川堆積層があった。7B区東壁ではVII層上面は水平状態であり、ほぼ標高43.0mの高さにあった。

8C区東壁では岩盤まで図示した。岩盤は南部で標高42.6m、北部で42.35mである。その上に砂利層→砂層→□→粘土層→部分的に砂層→砂利層→粘土層→砂利層→□→□→VI層と続く。VI層の上面は標高43.5m強である。

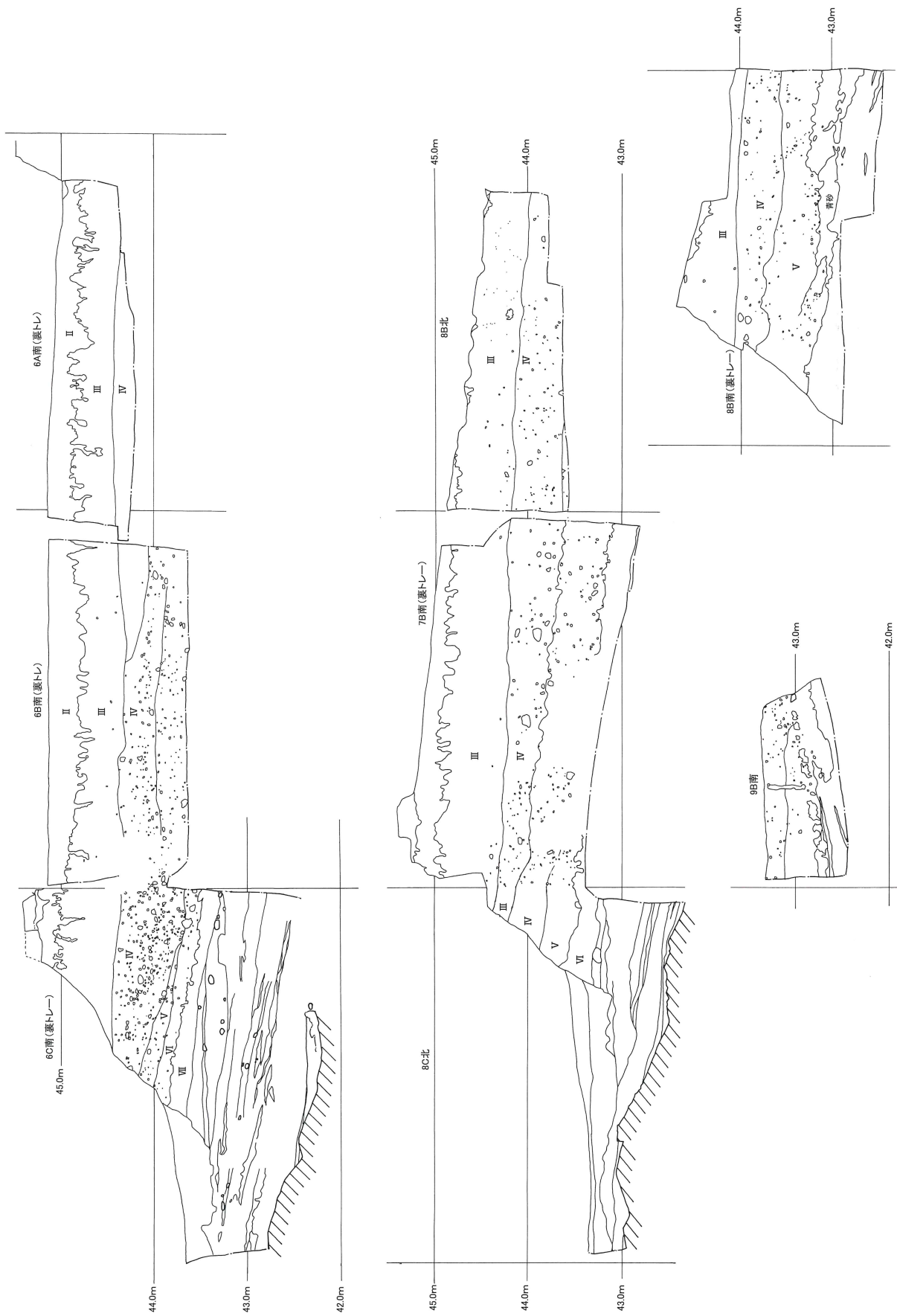
8C区は包含層上部は削られて存在せず、下部に自然堆積層が残っていた。8C区西壁では最下部に岩盤が現れ、その標高は北部で43.03m、南端では42.35mと北が高い状態だった。その上には砂利層→砂層→砂利層→□→□→攪乱層の順に堆積していた。8C区北壁は東部の幅1m程度はⅢ層から残っていたが、それよりも西では深く攪乱されていた。VI層は青い砂が少量混入する土層で、その下は順に赤褐色の砂層→赤い粘土層→茶色の砂層→厚さ20cmほどの砂利層→上の砂利層の下面に接し東側に傾斜する3枚の層(上から褐色砂層→青色粘土層→褐色砂層)→西から東まで分布する厚さが最大25cmの粘土層→粘土層(上面が赤く、東端では砂層を挟む)→砂利層→岩盤となる。岩盤は西側が高く標高は43.04m、東端では42.32mである。



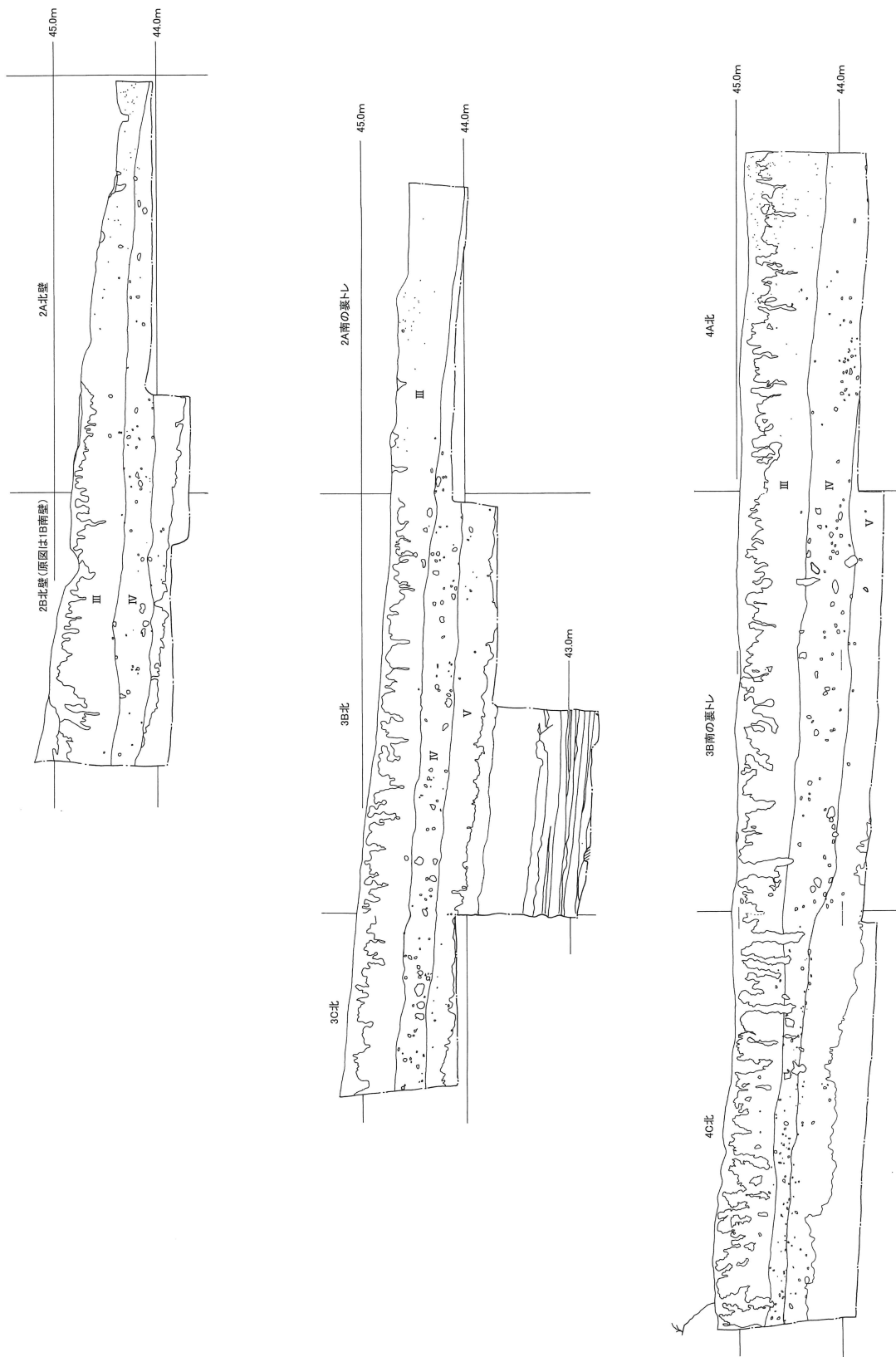
第6図 C区西壁層序実測図



第7図 5A~C区北壁層序実測図



第8図 6~8区北壁層序実測図

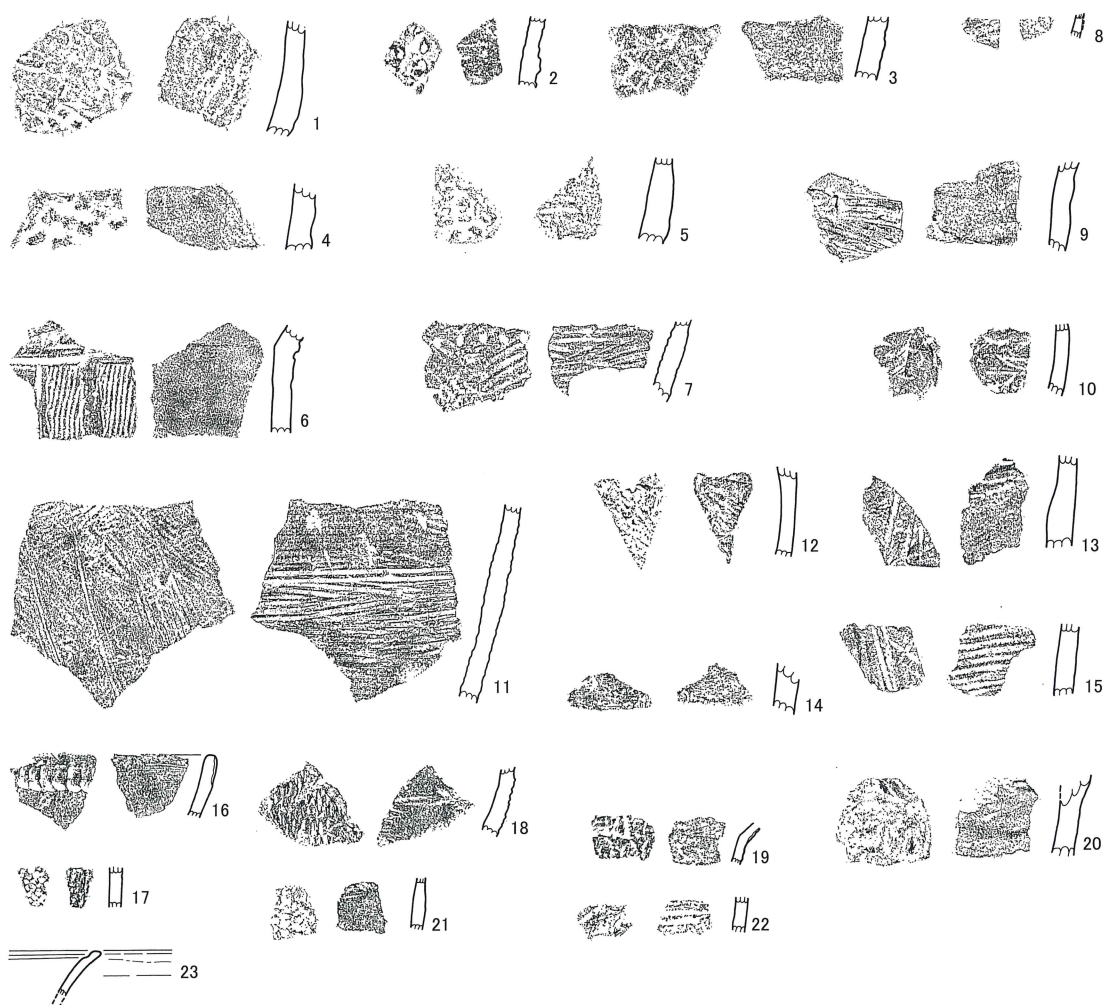


第9図 2~4区北壁層序実測図

9B区北壁では中央部にVI層の青砂層があるが、東側ではVIIa層とした赤い砂層が覆い被さっていた。VIIa層は東部ではVI層を包むように下位に繋がり、下位ではレンズ状に青砂層・砂利層が東側に傾斜するように挟まっていた。東壁の北部でのVIIa層の赤色砂層上面は標高43.1m強にあり、南側では42.75mまで下がっていた。東壁南部の層序はVIIa層に部分的にVI層を含み、下位には上から下に薄い途切れがちの砂層→厚さ7cm程度のレンズ状に粘土層→厚さ15cm前後のVIIa層→厚さ7cmほどの粘土層→同程度の青黒い砂層→赤い砂層の順に現れた。床面は標高42.33mである。

縄文時代の遺物

表土層である黒色土層から縄文時代の遺物が出土した（第10図1～20）。まず、早期の土器には楕円押型文土器（1～5）があり、粒の大きな楕円文で揃っている。塞の神式土器（6）は撚糸文を縦方向に転がした後に沈線で横と縦に区画している。8～15は二枚貝条痕地文の土器である。7は羽状に条痕を入れ、茎状のもので刺突している。11は斜行するように条痕で描きわけており、轟1式あるいは2式であろう。次に中期の土器がある。16は口縁部外面にC字形の爪形文を押し引いており、口縁部は湾曲気味である。18は長めの縄文をもち、外面右は凹線上の沈線文。19は頸部の屈曲部で外面に縄文をもち、12・19は胎土に石英を混入している。船元式土器である。



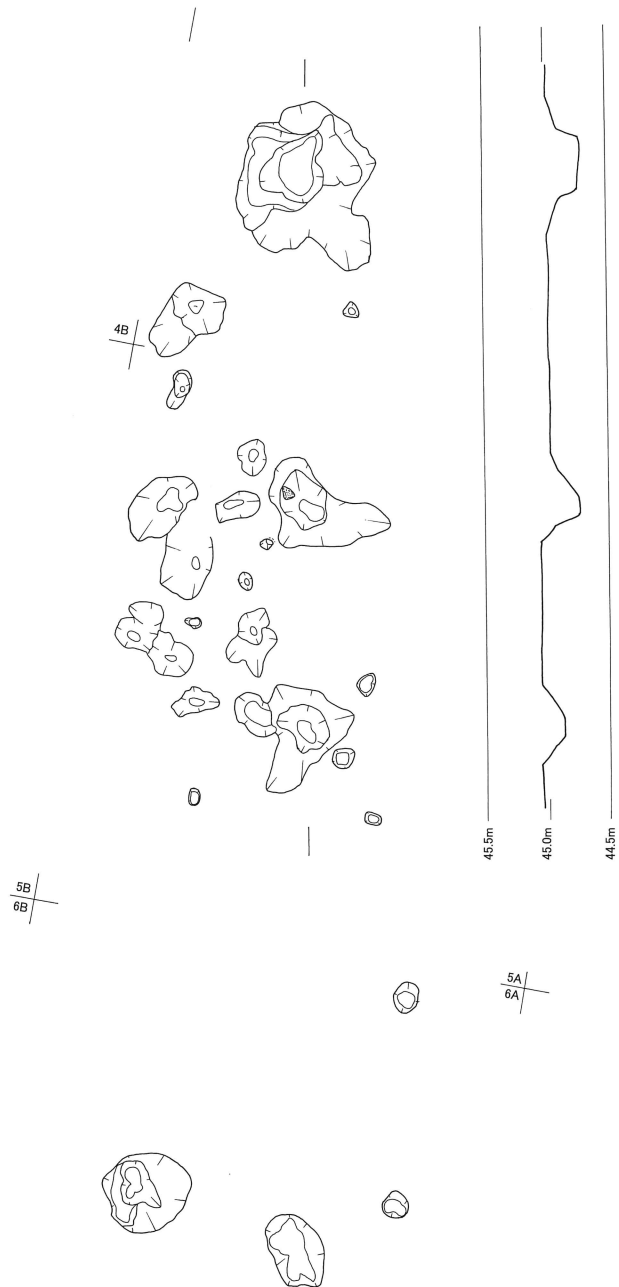
第10図 縄文時代・近世の遺物 (S=1/3)

近世の遺物

表土層から近世初頭の唐津系溝縁皿が出土した（第10図23）。にぶい赤褐色を呈する。

4区から6区において表土直下から黒色土の詰まった穴を検出した。旧石器時代の遺物包含層である地面が黄色い火山灰層であるため、調査の初めの段階で上層から掘り込まれた遺構、あるいは樹木の根の痕跡を検出したのである。それぞれ掘り上げて実測図を作成したので、図面を掲げておきたい。

内部からは土器が出土していないので、これらの穴が縄文時代に属すとは断定できない。形態的には樹木の根の痕跡とすべきだろう。



第 10-1 図 表土直下の遺構

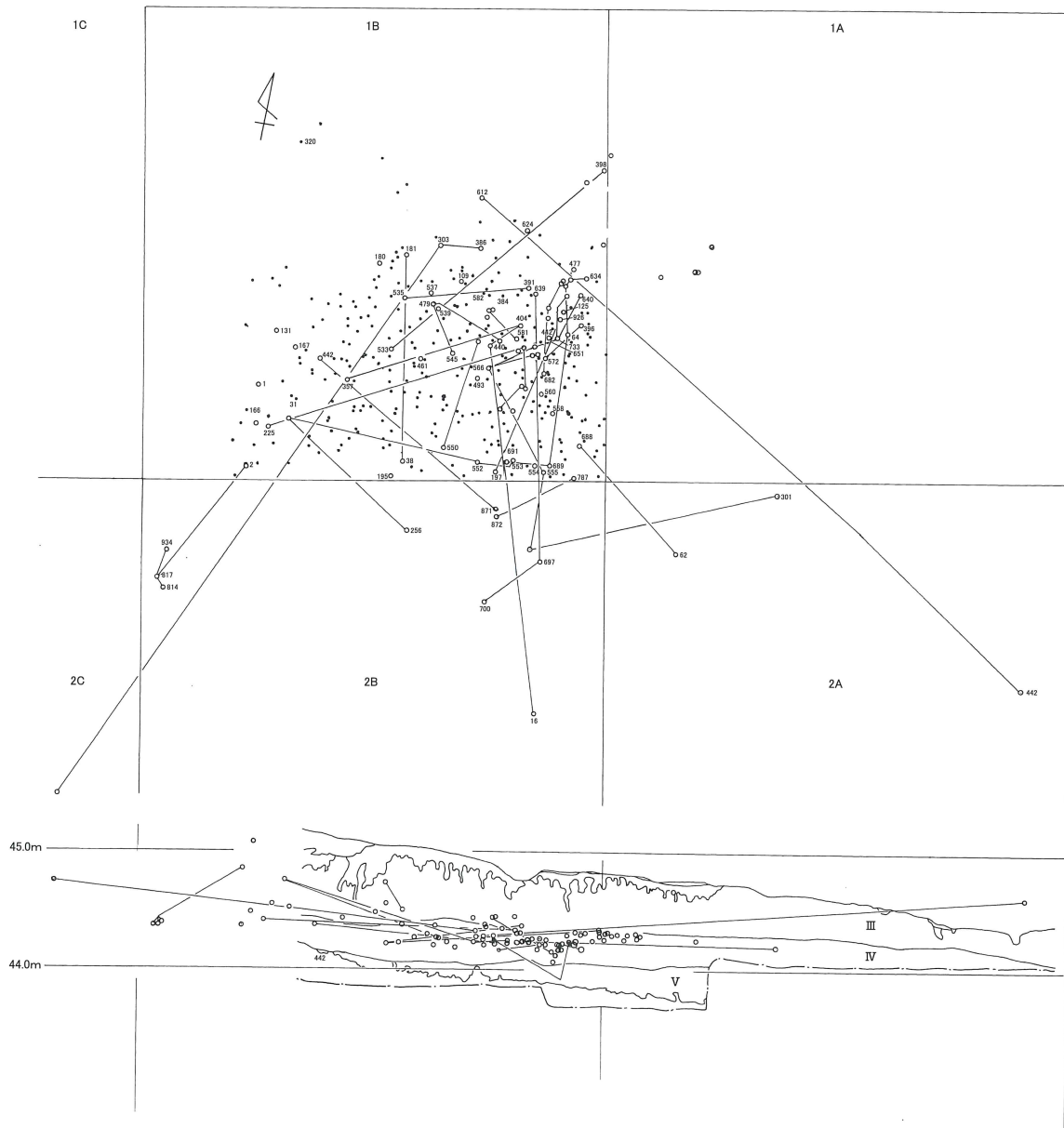
第2節 各調査区の調査結果

1区の調査

1区は調査区の形が三角形の2B区と、その北東部を礫群の広がり追い拡張した2A区がある。2B区はⅢ・Ⅳ層に遺物が含まれるので二つの層を完全に掘り上げ、Ⅴ層も掘り下げた。1A区ではⅣ層の大部分まで掘り、Ⅴ層はB区に近い部分だけの調査であった。

石器の分布状態

1区の遺物出土状態は区の南東部に集中する傾向が認められる。第11図は出土石器を落とした分布図である。小さい点はⅡ層・Ⅲ層から出土したもので、白丸はⅣ層から出土したものである。また、接合した石器同士を直線で結んで示した。ただし、本文の執筆中にいくつかの接合関係を図示していないことに気づいたので、それらを入れると後述する2B区の石器群とはこの図以上に関係が強いことが分る。2区に北側の層序に投影すると、Ⅲ層とⅣ層の境界付近、あるいはⅣ層上部に分布が集中することが見て取れる。標高は44.3m付近である。分布の大まかな範囲は南西から北東方向に約3m、直交する方向に2m弱である。この範囲を越えた接合関係もみられる。この一群を1区石器群と呼ぶことにする。附録折込図に調査区全域の接合関係図を掲げた。



第11図 1B区出土石器分布図

礫の分布状態

礫の分布状態はほぼ石器と重なる。一部には集石として認識した礫集中箇所があり、その中心的な標高も44.3m前後である。

このように1区では顕著な遺物集中箇所が一箇所みられ、後で説明する2区の集中部の外縁部を構成しているといえる。

1号集石群

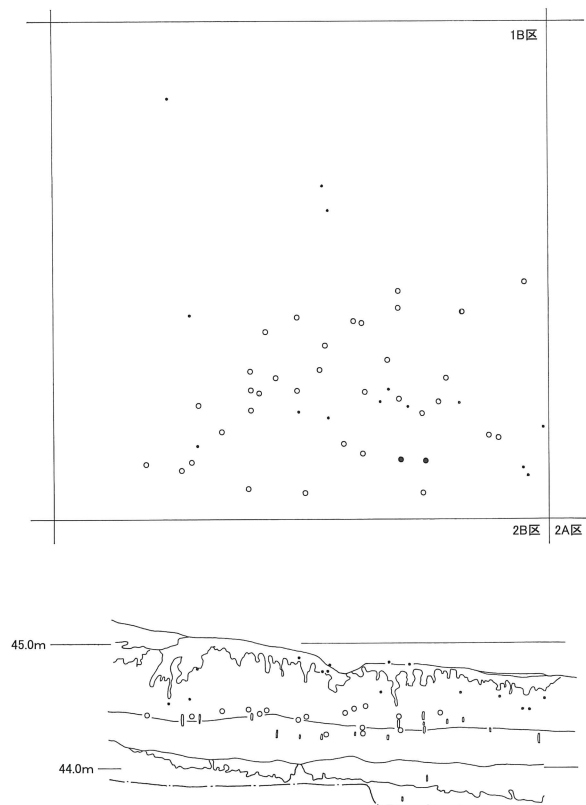
1号集石（当初は1号集石Aと称した）は1A区西部にあり、8個の礫と一個の石核（第28図1）・一個の剥片（1号集石2）からなる（第13図）。平面規模は0.4m×0.5mで、すぐ南側に0.3m離れて2号集石が存在する。両者の標高は44.3mくらいあり著しい差は認められず、同時期に存在したと思われる。

集石の中に石核1点が混じっていた（第28図に石核の実測図）。これは長さ10.5cm、幅10.3cm、厚さ6.6cmで重量は898.7gである。片面に自然礫面を残し、側面観は一端はやや細く、端は厚い。厚い面を打面として自然面の残らぬ3面に剥片剥離を行っている。また、反対側からも両面を剥離している。図の平行線部分は節理面を表す。

2号集石

1号集石の南側に0.2m離れて出土した。18個の礫からなるまとまりである。平面的な範囲は0.5m×0.5mである。標高44.25m～44.35mほどに分布した。

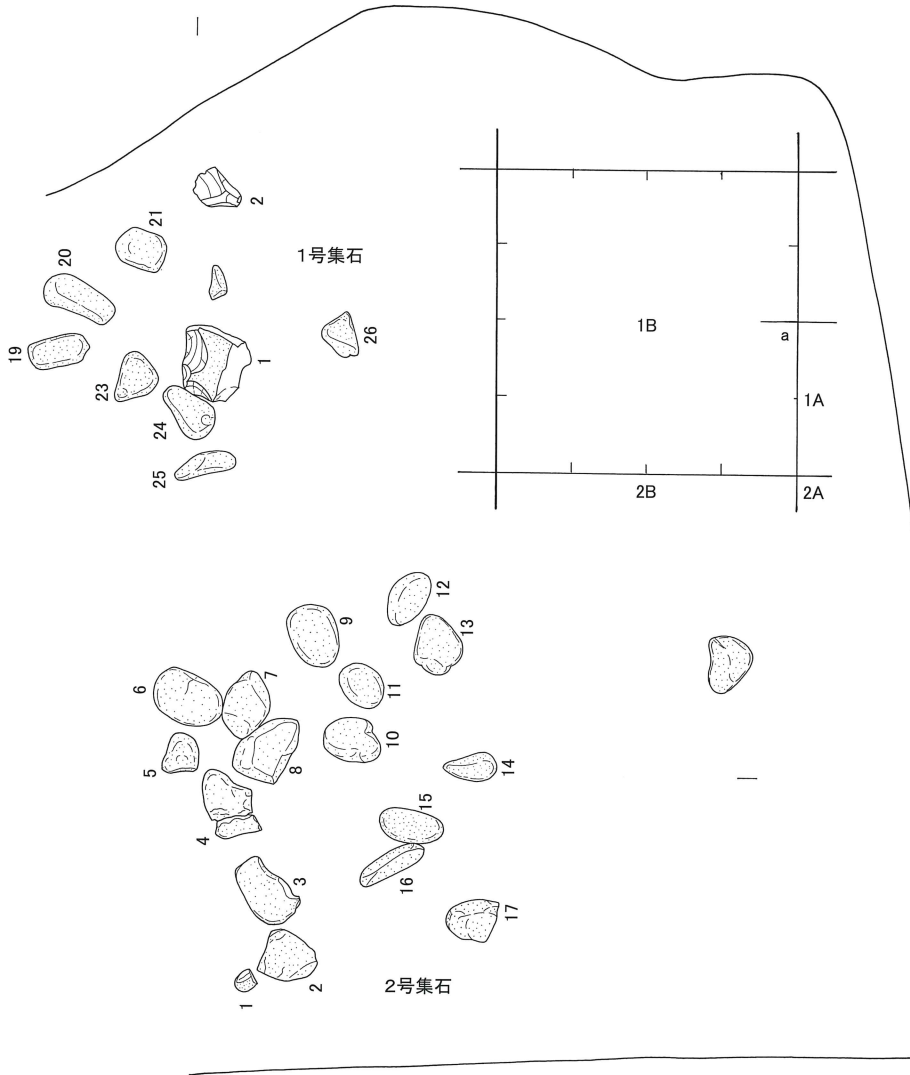
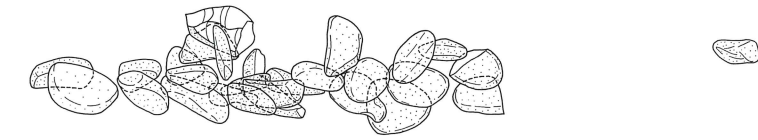
集石の出土状態は安定しており土中で上下に拡散するということはなかったもので、ある時点での生活面を示していると思われる。ただし、掘り込まれていた場合も考えねばならない。1区石器群は多数の例外はあるが標高44.3m前後に集中するので、集石と同じ面にあったといえる。永年の間に樹木の根や虫、凍結などが繰り返され、遺物は上下に移動する。



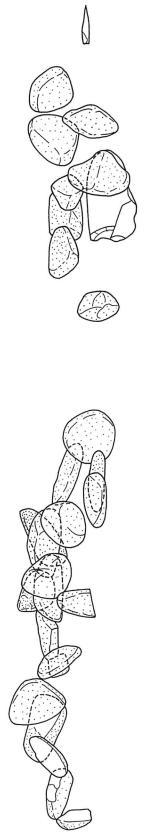
第12図 1B区出土礫分布図

44.0m

44.4m



44.4m



第 13 図 1A区IV層の礫群

1区出土石器

遺物の集中には包含層中でも上下に幅が生じるため、遺物全体としてどの層に対応して包含されているのか捉えるべきである。調査現場で個々の遺物の所属層を記録すべく努めたが多忙であったため一貫していない。以下断らない場合も例えばⅢ層としていても明確なものでないこともある、と理解されたい。

第14図は接合する剥片である。

ふたつとも打面を共有しており2を先に剥離し、次に1を剥離している(第17図3)。1は長さ11.3cm・幅4.4cm・厚さ2.2cm・重さ81.4g。2は長さ7.4cm・幅3.9cm・厚さ1.6cm・重さ41.6g。

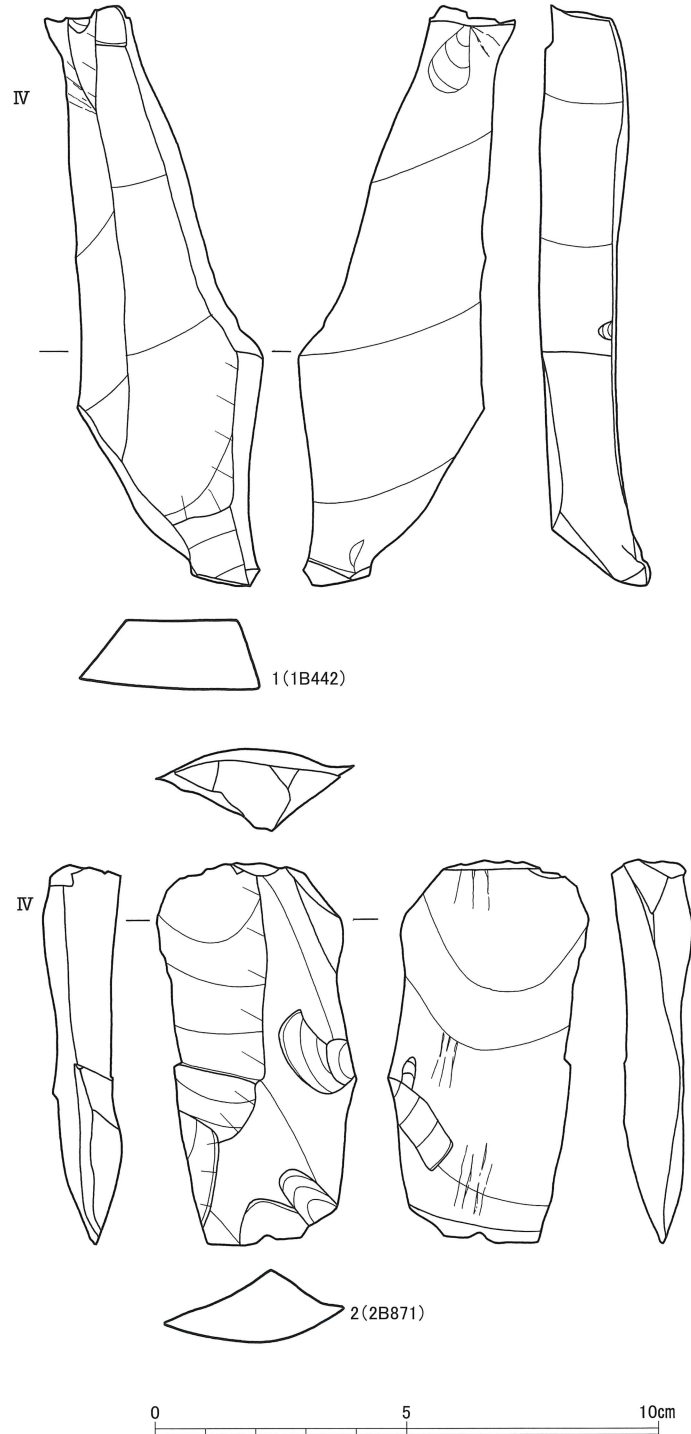
第15図は1から3はⅢ層出土の接合(第17図5)する剥片で、4・5はⅣ層出土である。前者の剥離順序は3→口→2→1である。3の打撃後、打面を再生して次の剥離作業に移っている。1は主要剥離面の右辺に使用による刃こぼれが散在する。長さ7.4cm・幅3.7cm・厚さ2.0cm・重さ60.1g。2は長さ4.7cm・幅2.6cm・厚さ1.4cm・重さ24.1g。3は長さ6.6cm・幅3.5cm・厚さ1.4cm・重さ41.0g。4・5は個別個体である。

第15図4・5については第43図で説明する。

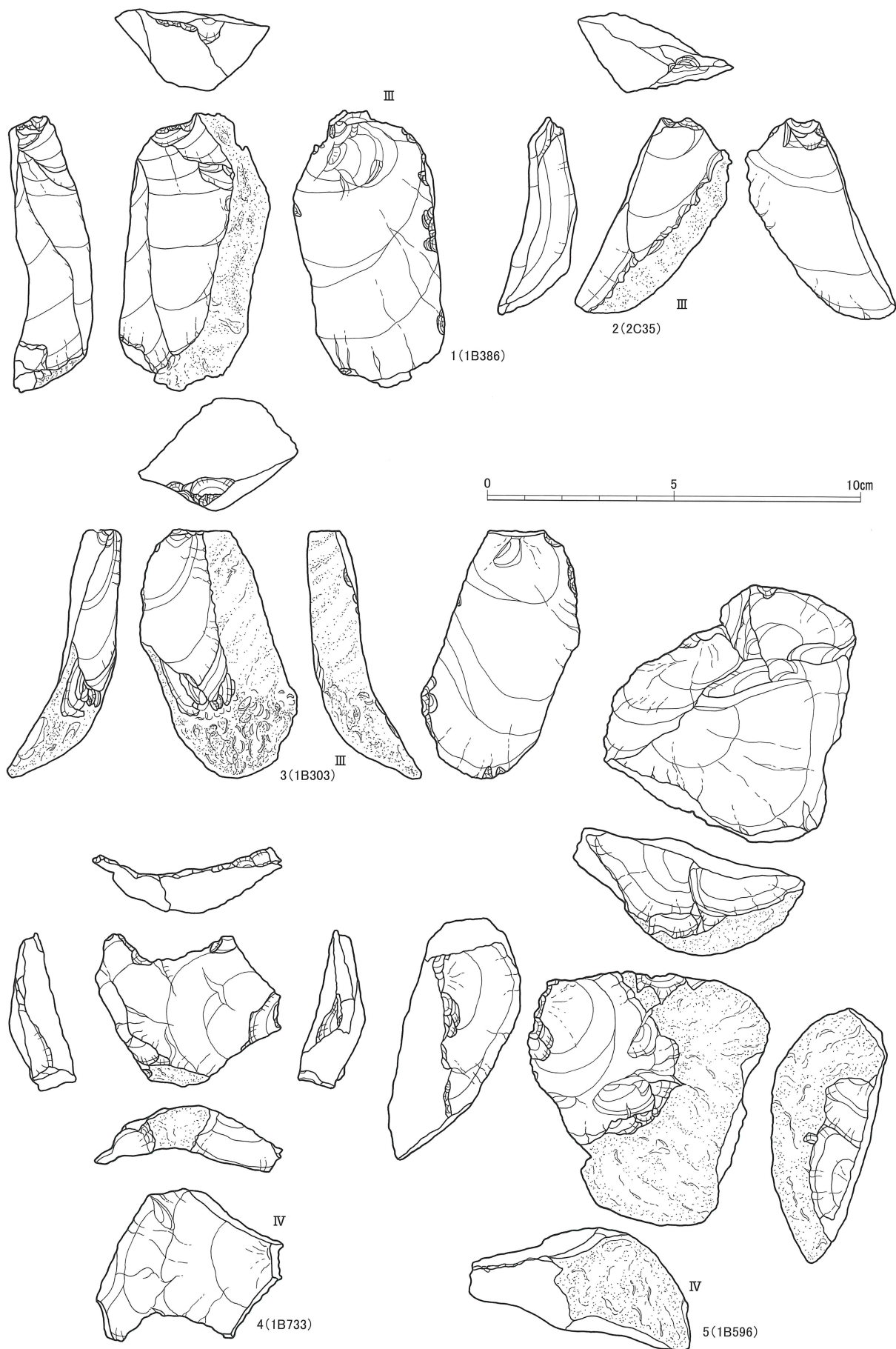
第16図3・4は接合する(第17-1図2)。ふたつの剥片は打撃面を共有する。3は長さ6.7cm・幅4.6cm・厚さ1.5cm・重さ33.0g。4は長さ4.4cm・幅3.4cm・厚さ0.8cm・重さ13.0g。

第17-2図は1~3がⅣ層、4がⅢ層出土で、1・3は円礫面を残す剥片である。

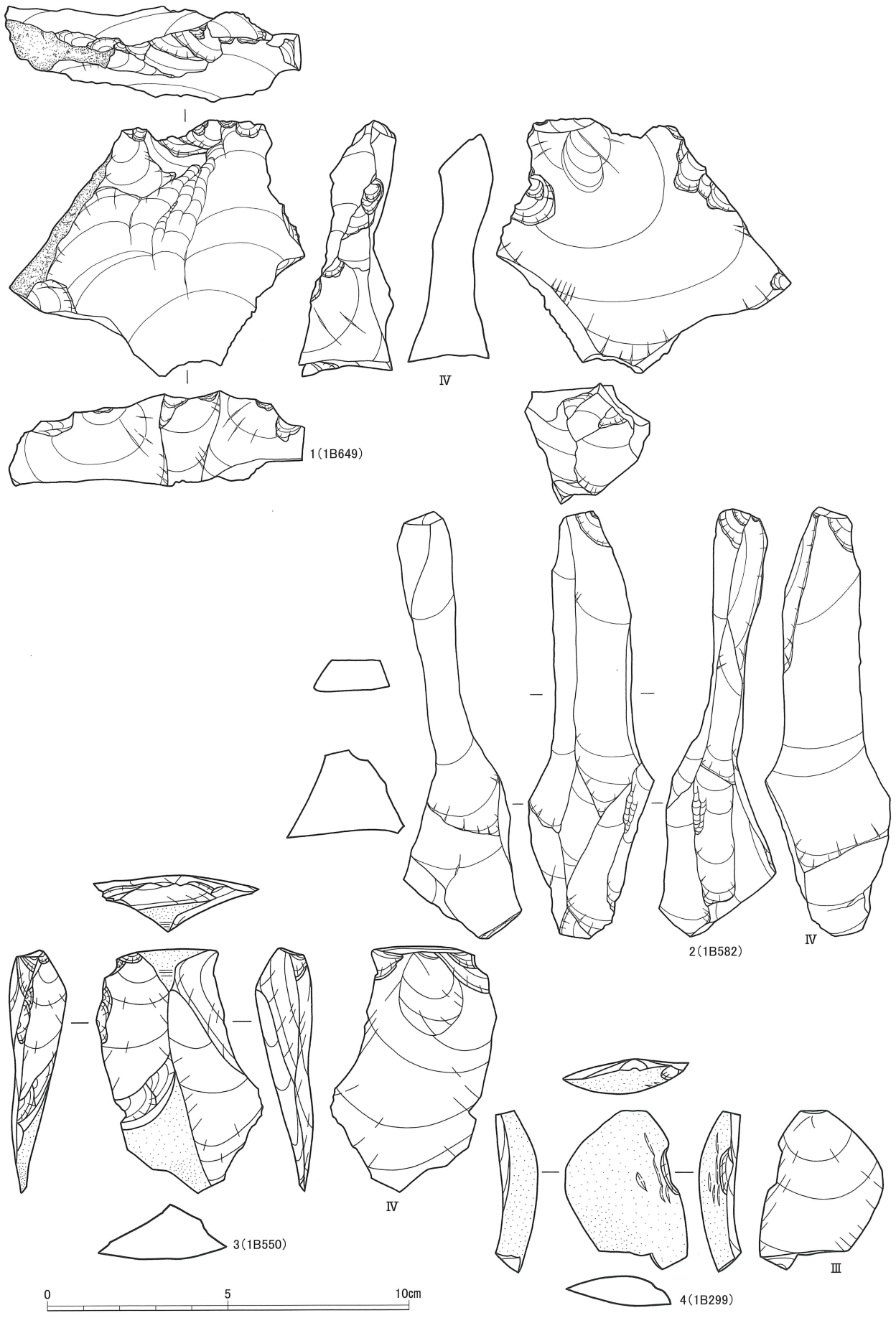
1・2は第17-1図4のように接合する。1(1B38)は長さ5.0cm・幅5.8cm・厚さ2.4cm・重さ46.9gである。2(1B181)は長さ4.9cm・幅5.4cm・厚さ2.1cm・重さ50.6g。この接合例は1B区の中央と南端中央に分布した。



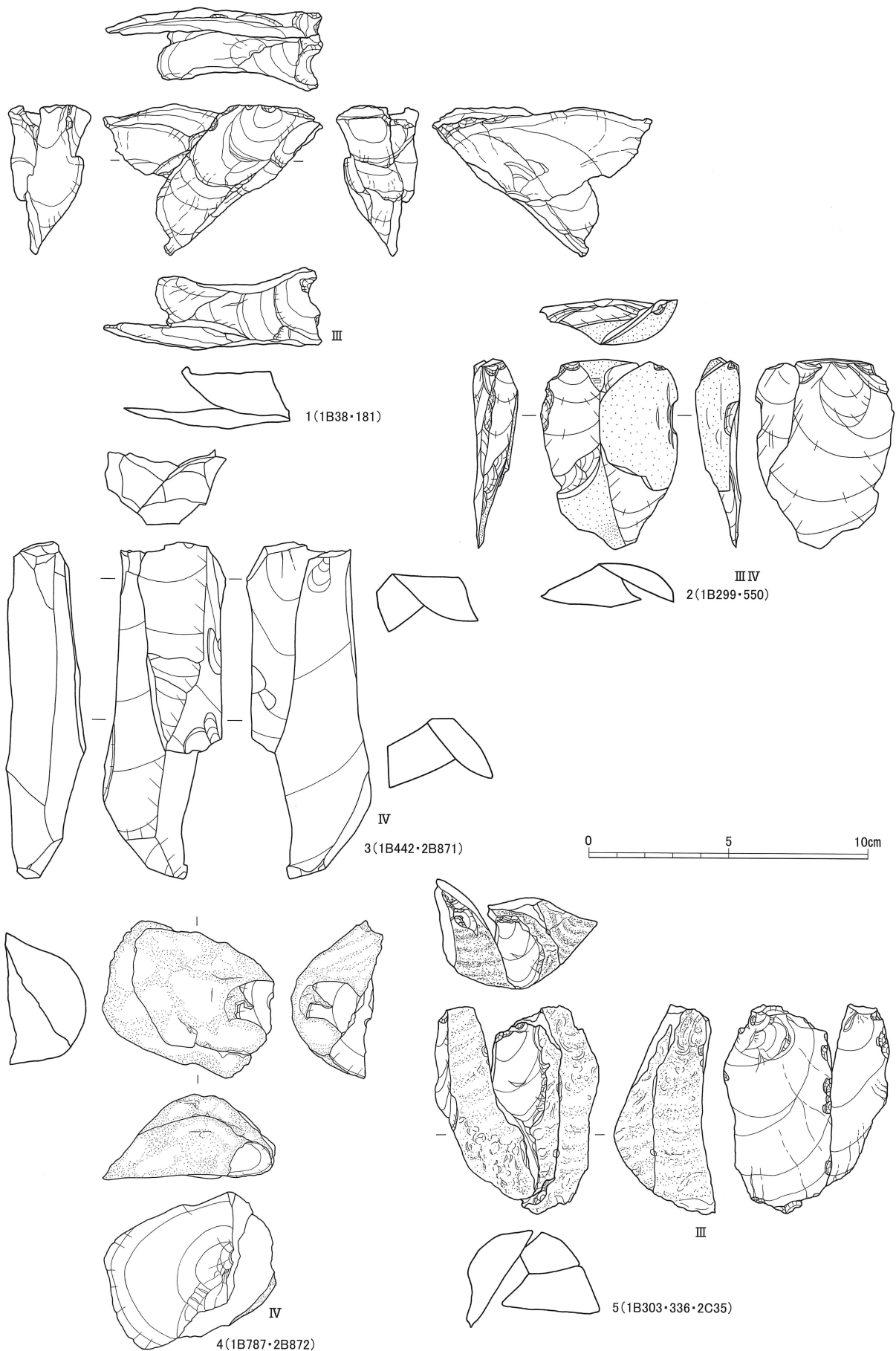
第14図 1B・2B区Ⅳ層出土石器



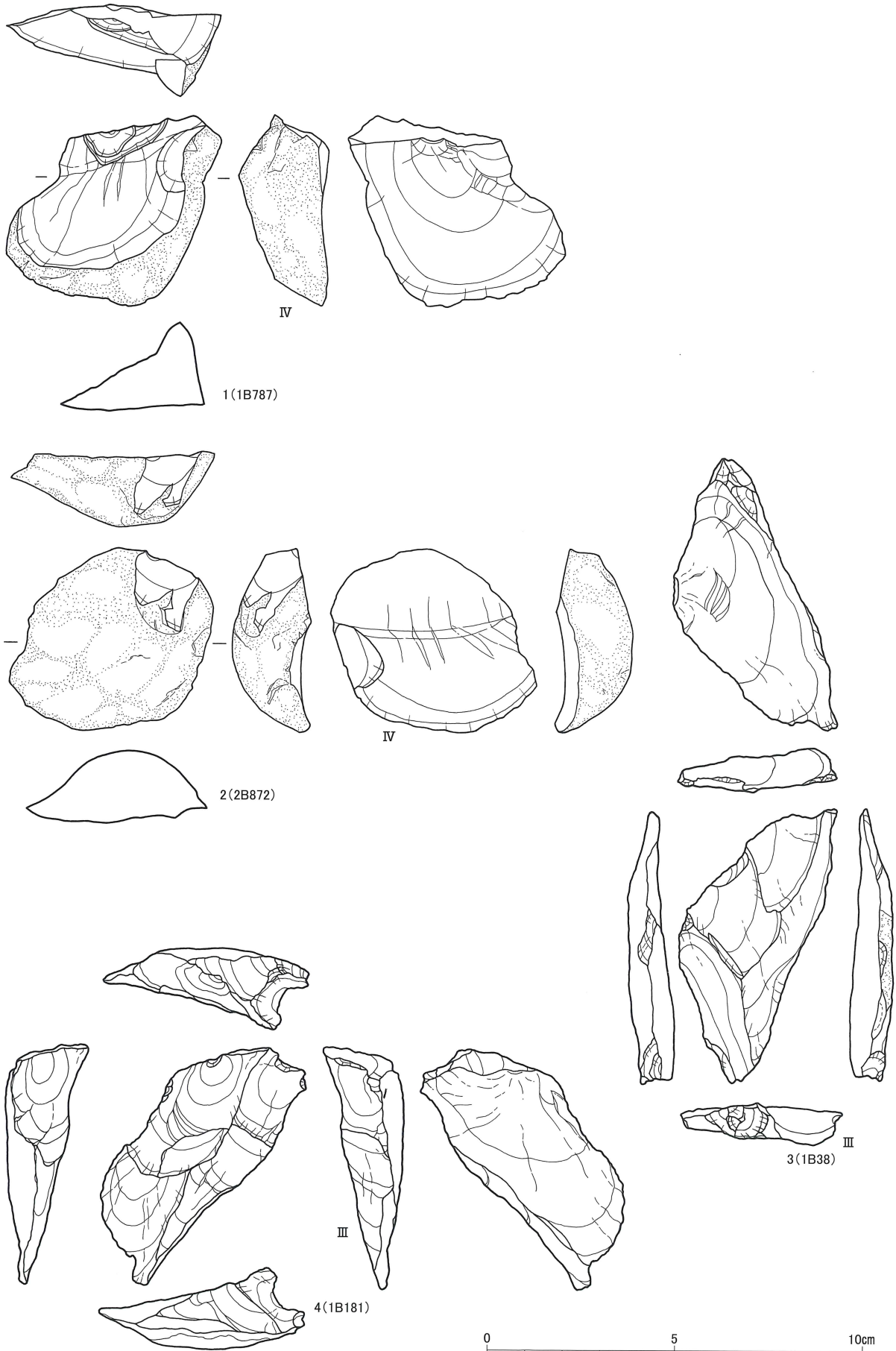
第 15 图 1B区他III·IV層出土接合資料



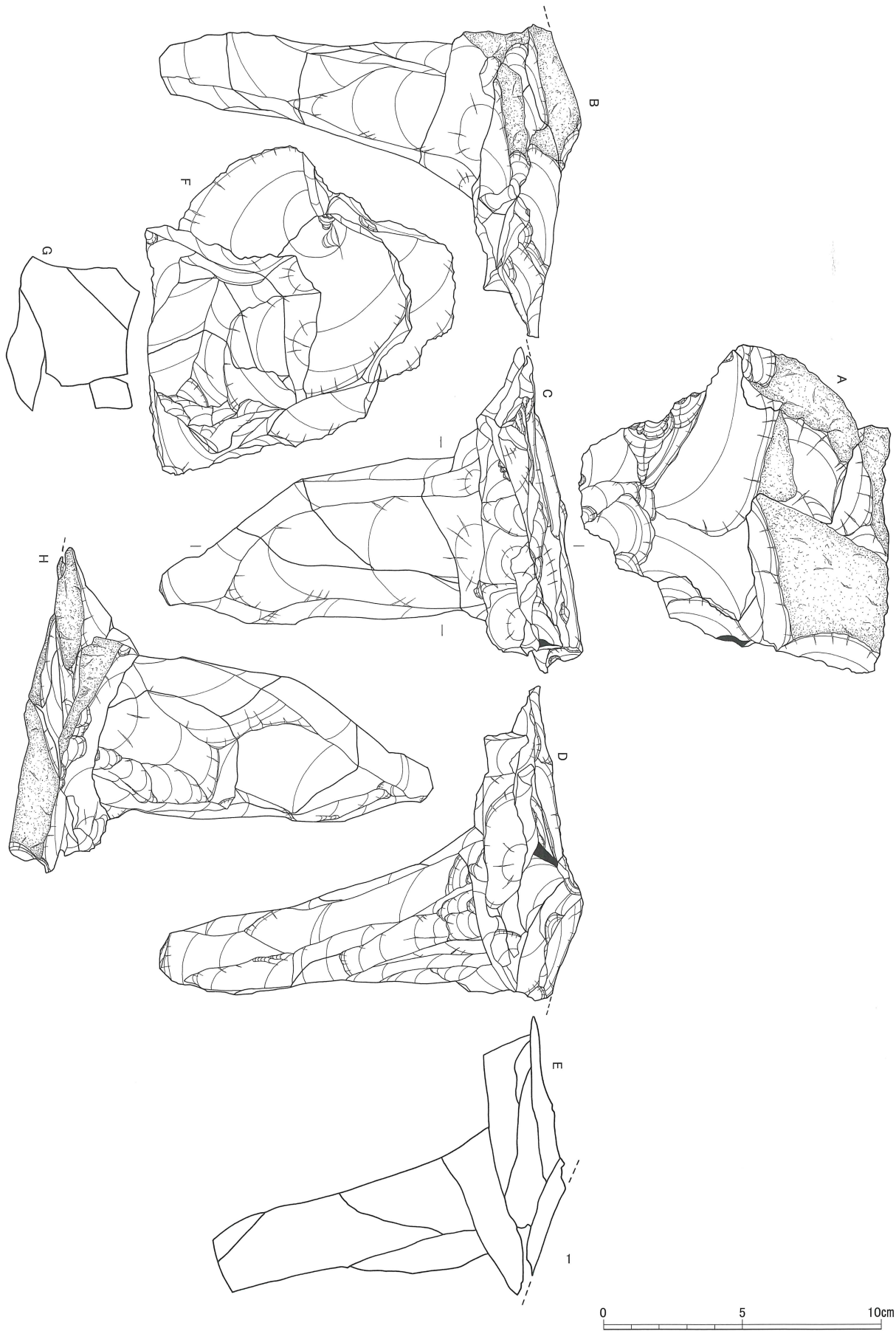
第 16 图 1B区Ⅲ層出土接合資料



第 17-1 图 1B区Ⅲ·Ⅳ层石器接合图



第 17-2 图 1B区Ⅲ·Ⅳ層接合資料



第 18 图 1B区Ⅲ·Ⅳ層石器接合图

3・4は接合する（第17-1図1）。

第17-1図1の接合剥片の打撃は異なる方向からなされており、どちらも斜め方向に延びた剥片が生産されている。4は縦6.4cm・横5.5cm・厚さ1.1cm・重さ35.2g。

遺物実測図を作成していないが、2B区の剥片で1A区・3B区・3C区・4B区の遺物と接合するものがある。その番号は1A7・2B932・3B406・3B551・3B553・3C100・4B267・4B541・4B542・4B549である。Ⅲ層・Ⅳ層から出土しており、層の境界付近に本来の生活面が想定できる。

第18図は第20図と第21図の各剥片が接合した状態である。これらは1B区のⅢ層とⅣ層から出土した資料であるB691・1B716（1B396・1B572・1B581・1B582・1B583・1B636・1B649・1B687・1）。

第18図を見て分かるようにこの接合資料は二つの部分からなる。自然面を残し平板な形状の部分と、その平板部分が剥離されてなくなった後に取り残された筒状の部分である。素材はかなりの大きさだったとみられる。

全体は平板な石核部分とそれを除去した後の剥離面を打面として剥離を繰り返した部分とに分かれる。平板部分の剥片は自然面をもつ第21図3→1B649→1B396→1B636→第21図2の順に剥離されている。ここまでで一端横方向の剥離は終わり（途中縦方向の剥離を繰り返すのだが、それらの剥片は残っていない。）1B649の上から縦方向の剥離を三回は行っている。その後、打面再生として横方向に1B649を薄く剥離し、新たにできた面を打面に第20図2・4、最後に1B583を剥離する。

接合状態の各図にAからHの番号を付け説明する（第21図）。C図の上部つまり平板な部分には縦方向剥離が連続的に横に並んでいる。下部の筒状部分でも縦方向の剥離を行った痕跡があるので、この接合資料は全体として縦長剥片を一貫して製作したことが分かる。平板な部分は打面の再生のために剥ぎ取られた部分であろう。これらは第11図の接合関係図に示すように1B区の南東部の1.8m×0.9mの範囲に分布する。

第16図1（1B649）は長さ7.0cm・幅8.2cm・厚さ2.5cm・重さ99.4g。

第16図2（1B582）は長さ11.8cm・幅3.5cm・厚さ3.0cm・重さ75.3g。

第20図1（1B636）は長さ8.8cm・幅8.2cm・厚さ1.2cm・重さ68.4g。

第20図2（1B691）は長さ5.1cm・幅4.6cm・厚さ1.4cm・重さ32.6g。

第20図3（1B396）は長さ7.0cm・幅4.5cm・厚さ1.7cm・重さ46.6g。

第20図4（1B582）は長さ9.2cm・幅3.6cm・厚さ4.6cm・重さ105.0g。

第21図1（1B716）は長さ6.1cm・幅7.4cm・厚さ1.4cm・重さ45.3g。

第21図2（1B581）は長さ9.9cm・幅5.6cm・厚さ1.7cm・重さ86.5g。

第21図3（1B572）は長さcm・幅cm・厚さcm・重さg。

第21図4（1B689）は長さ6.1cm・幅4.6cm・厚さ4.1cm・重さ106.7g。

第22図は第23・24図・第42図1・2の資料が接合した状態である。接合関係を図示するように1B区と2A区・2B区に剥片が分布している。各剥片類の採り上げ番号は次の（）のとおりである。（1B501・1B555・1B566・1B579・1B640・1B646・2A301・2B893）

第23図1（1B555）は剥離後に主要剥離面側から側辺の三箇所二次加工が加わる。刃器として使ったらしい。長さ12.7cm・幅7.8cm・厚さ2.1cm・重さ236.1g。

第23図2（2A301）は長さ87.6cm・幅4.3cm・厚さ1.3cm・重さ4g。

第23図3（1B501）は長さ6.5cm・幅6.6cm・厚さ1.9cm・重さ58.0g。

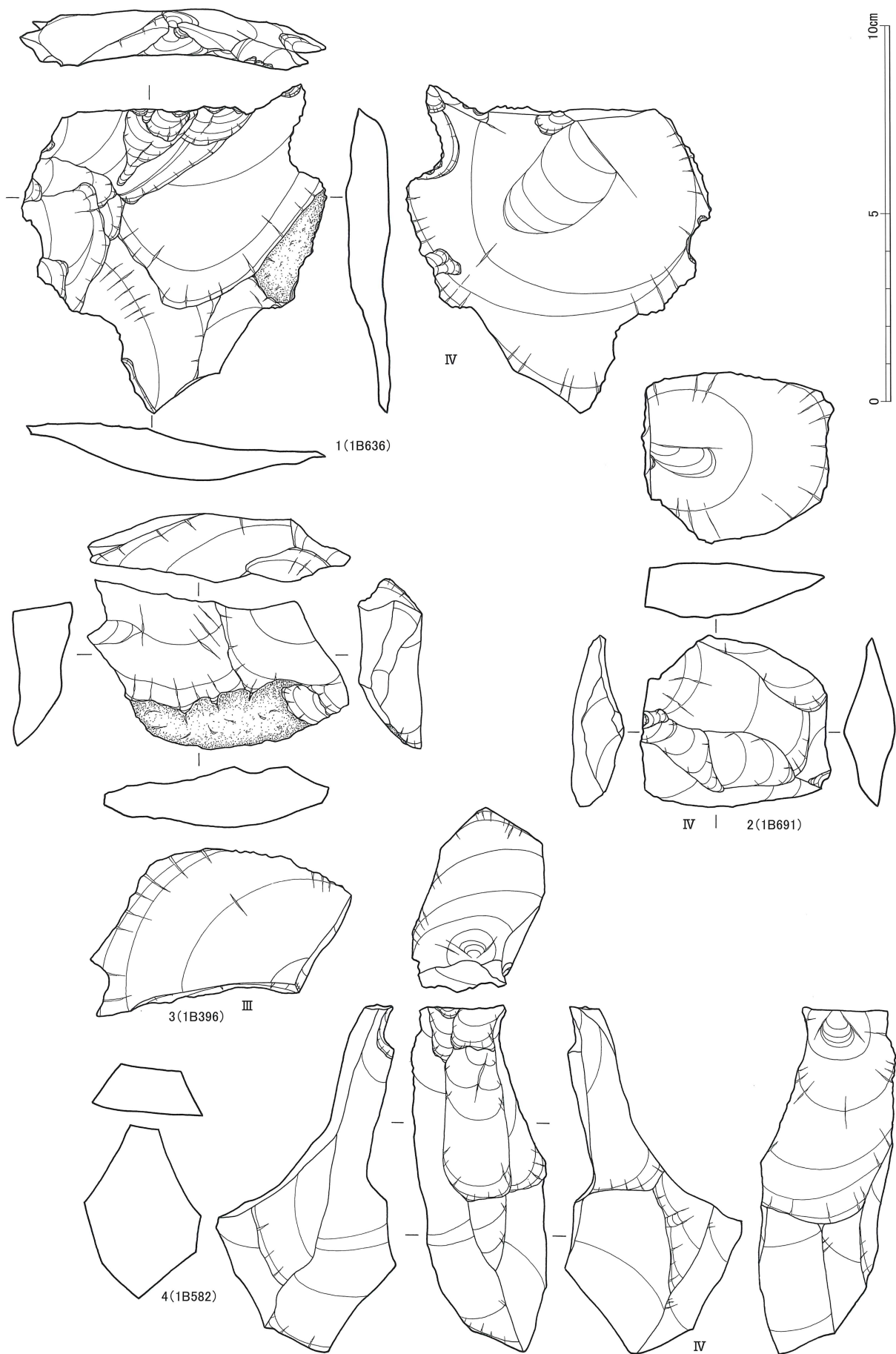
第24図1（1B579）は長さ7.8cm・幅6.4cm・厚さ2.2cm・重さ108.6g。

第24図2（1B566）は長さ4.2cm・幅6.6cm・厚さ1.1cm・重さ25.6g。

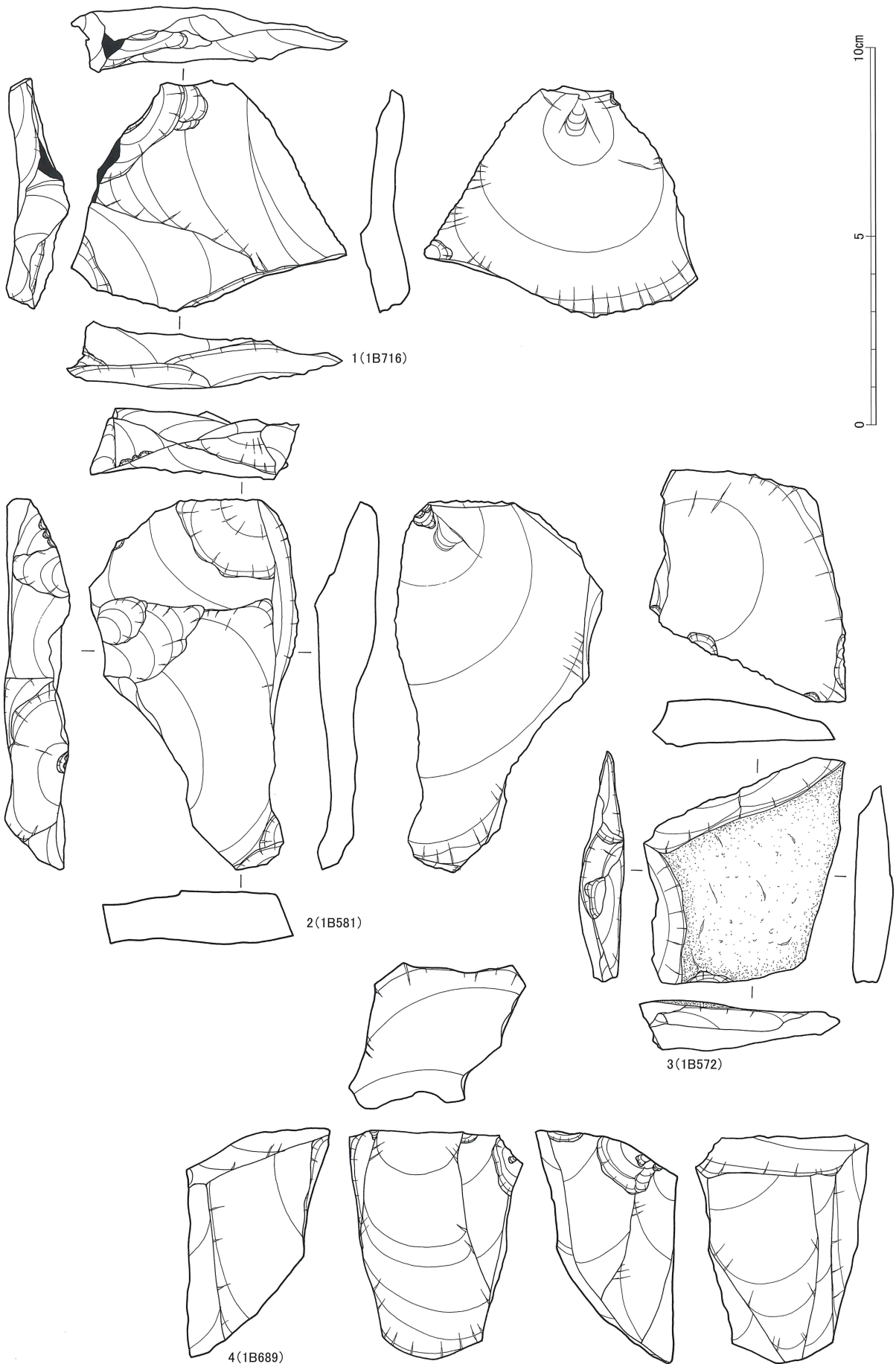
第24図3（2B893）は長さ11.7cm・幅6.0cm・厚さ3.7cm・重さ1534g。

第42図1（1B640）は一側辺に二次加工がある。長さ7.7cm・幅7.4cm・厚さ2.9cm・重さ116.9g。

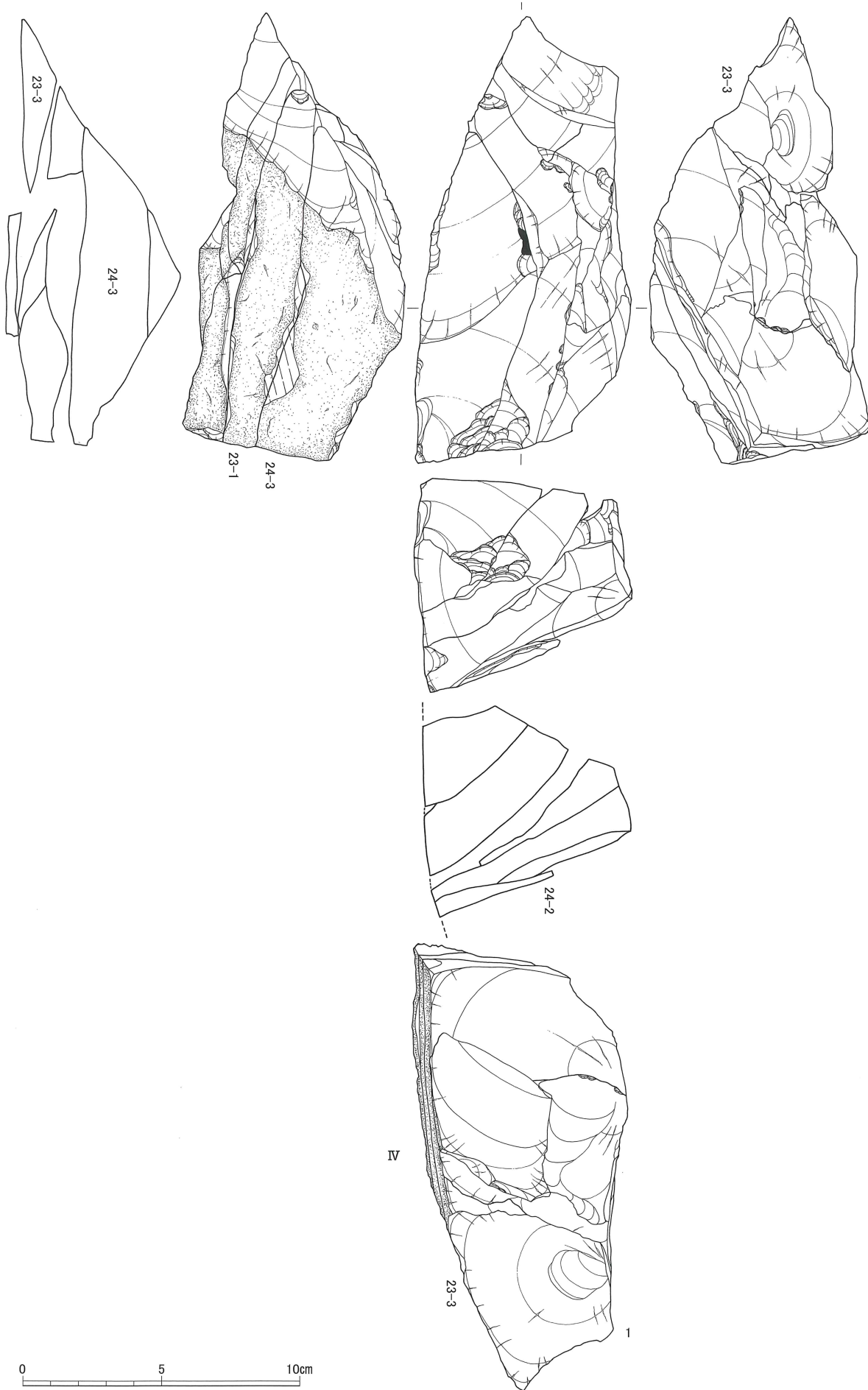
第42図2（1B646）は一側辺に刃こぼれがある。長さ7.2cm・幅5.3cm・厚さ1.1cm・重さ38.1g。



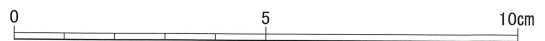
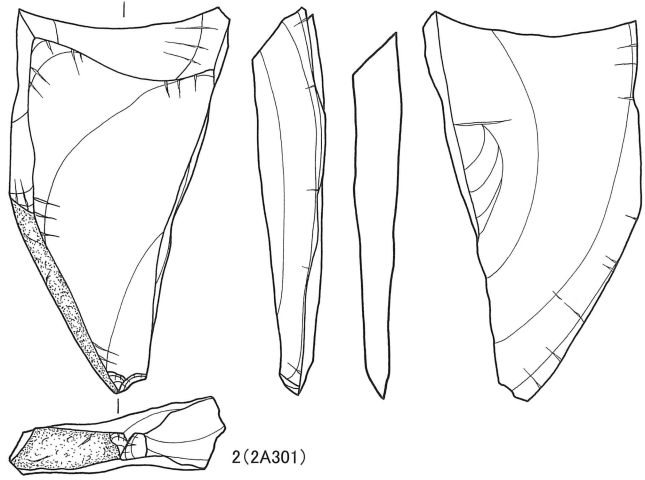
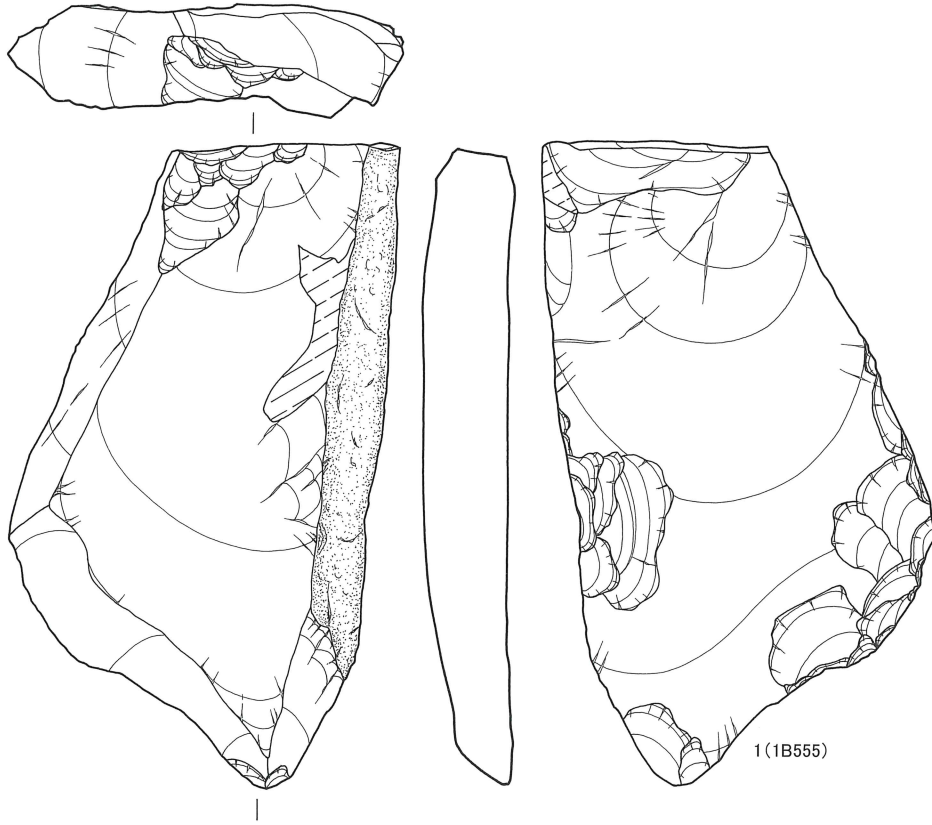
第 20 图 1B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料



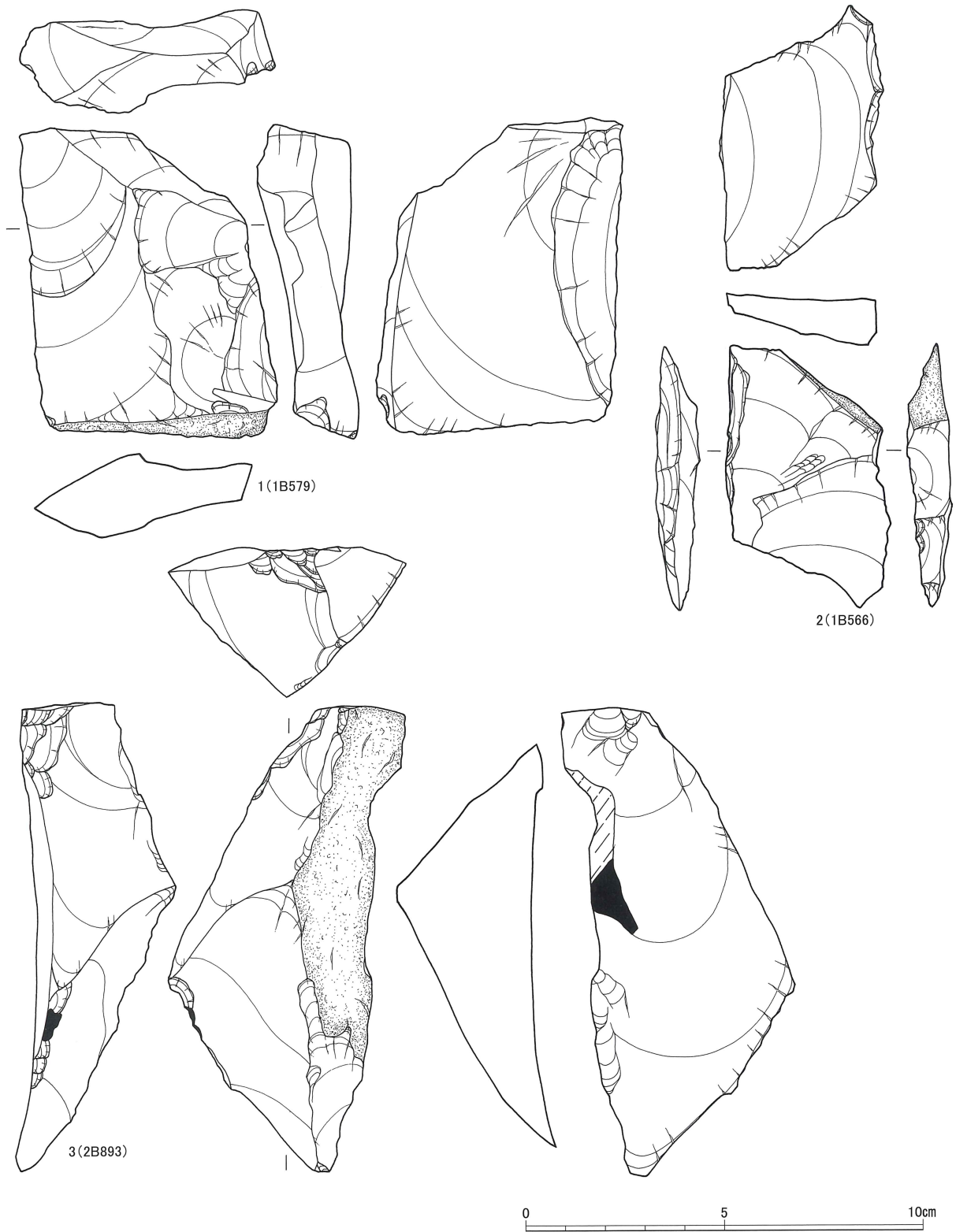
第 21 图 1B区IV層出土接合資料



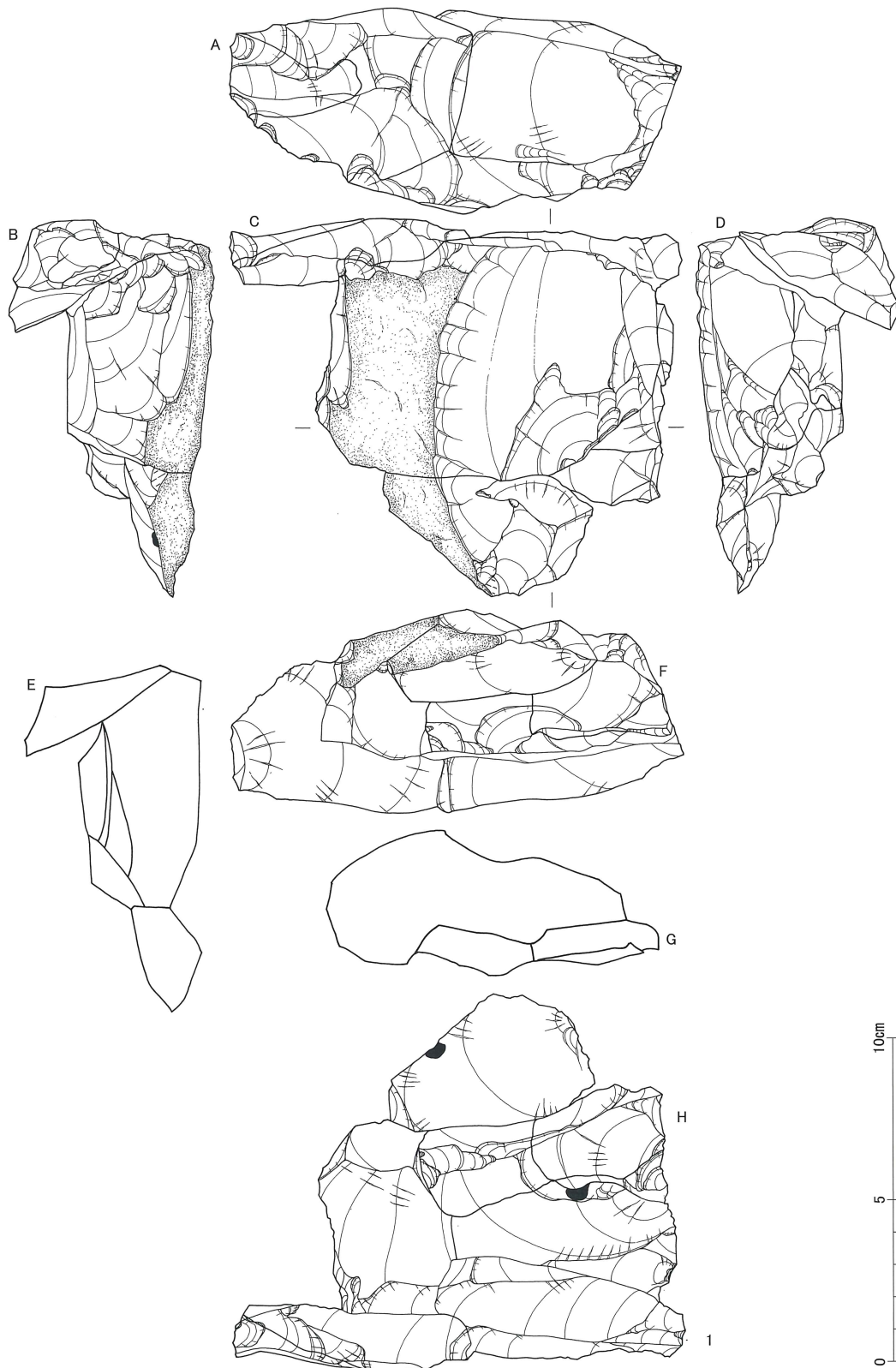
第 22 图 1B·2A·2B区IV層出土石器接合图



第 23 图 1B区他IV層出土接合資料



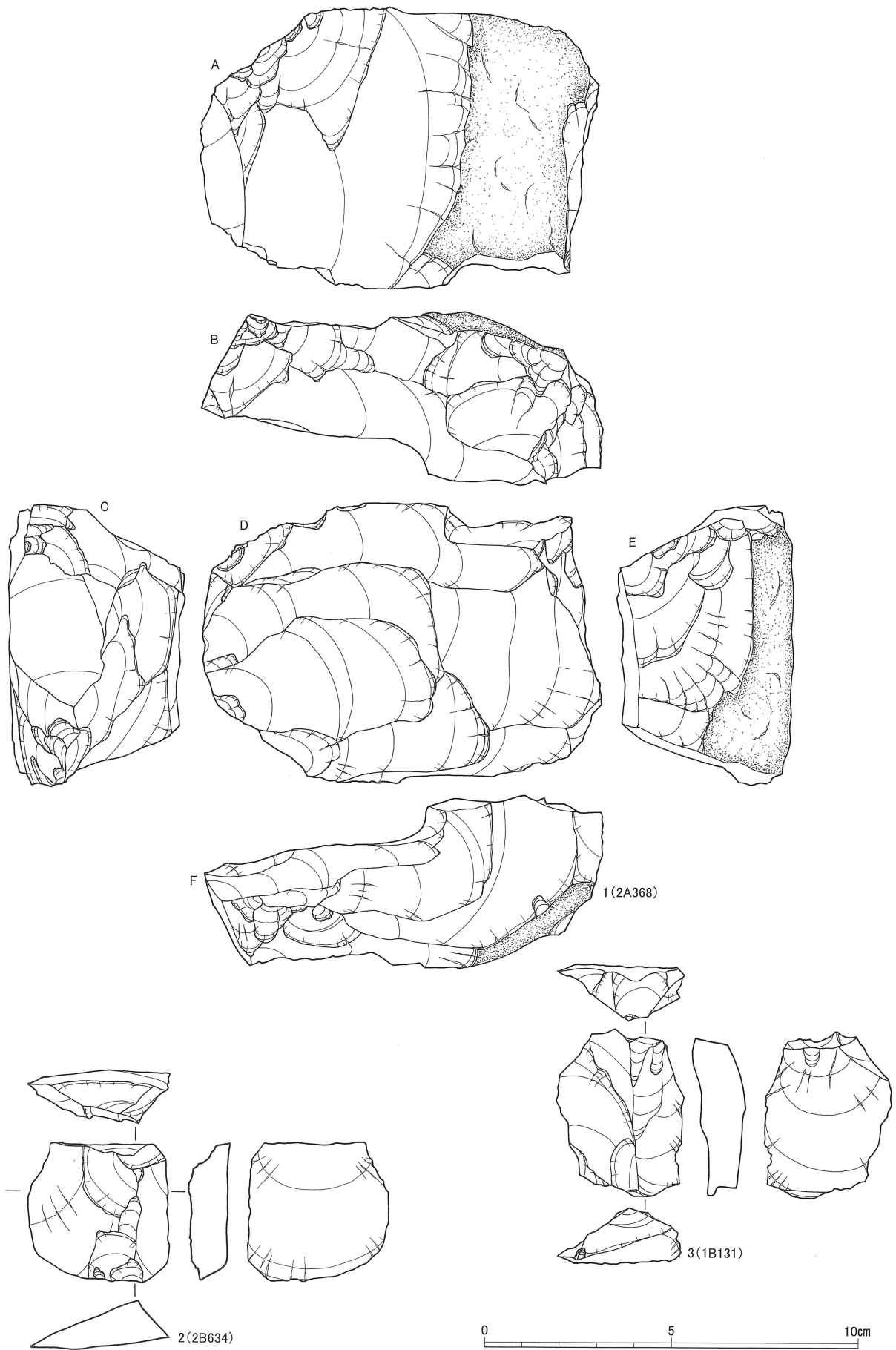
第 24 图 1B区他IV層出土接合資料



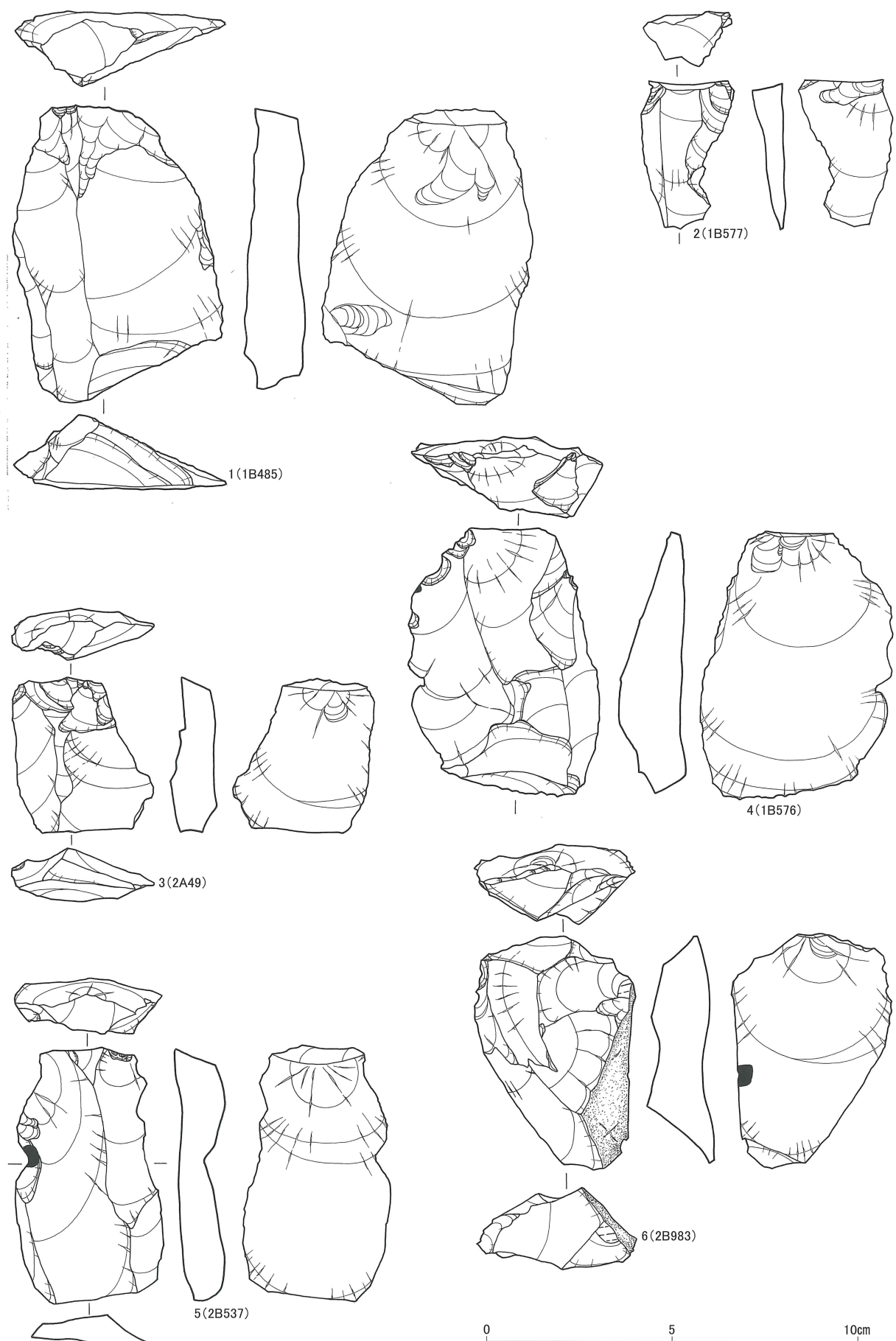
第25図 1B区他IV層出土石器接合図

第25図は第26・27図の破片の接合状態である。これらはIV層から出土した（1B131・1B485・1B576・1B577・2A49・2A368・2B537・2B983）。接合関係図には示していない。主に縦長剥片を生産したことがうかがえる。

第26図1（2A368）は最後に残った石核である。目的の剥片は長軸の片方からの打撃を繰り返して作成して



第 26 图 1B区他出土接合資料



第 27-1 图 1B区他Ⅲ·Ⅳ層出土接合資料

いる。長さ10.7cm・幅7.5cm・厚さ4.7cm・重さ416.2gである。2A区の南東部に出土した。第27-2図に示すのは接合点数が多く、他の図と重ねると分かりづらいので個別図とした。第83図の石器接合例である。2B区の東部を中心に1B区・2A区にも広がりを見せる（一覧表では2B区接合例Aとして表記）。

第71図に示すのは接合点数が多く、他の図と重ねると分かりづらいので個別図とした。第25図の石器接合例である。2B区の東部を中心に1B区・2A区にも広がりを見せる（一覧表では2B区接合例Aとして表記）。

第26図2（2B634）は長さ3.7cm・幅3.8cm・厚さ1.3cm・重さ22.2gである。2B区の南西部で中央付近に出土した。1B区の剥片（1B131）と2A区（2A368）・2B区（2B634）が接合した。これも接合関係を図示していない。

第26図3（1B131）は長さ4.5cm・幅3.4cm・厚さ1.4cm・重さ1.39gである。1B区の南西部に出土した。

第27図1は長さ7.9cm・幅5.7cm・厚さ1.8cm・重さ80.0g。

第27図2は長さ2.3cm・幅4.2cm・厚さ1.3cm・重さ7.4g。

第27図3は長さ4.2cm・幅3.8cm・厚さ1.3cm・重さ18.9g。

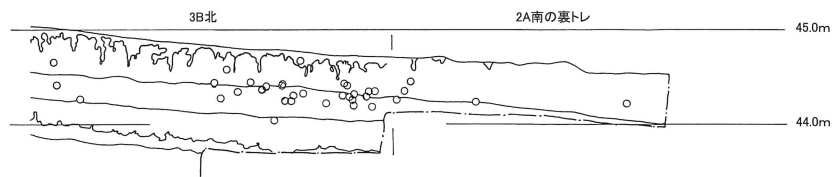
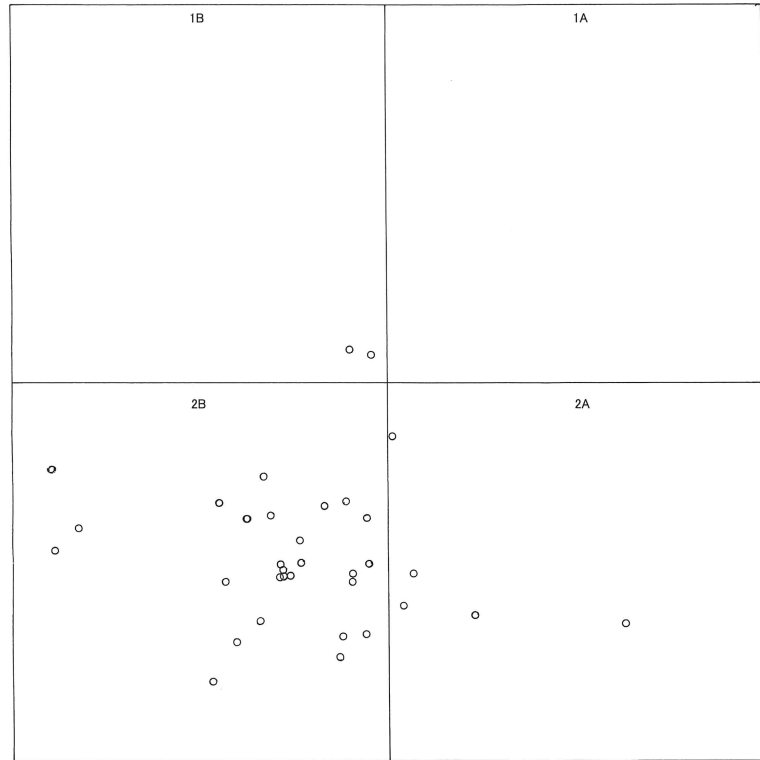
第27図4は長さ7.2cm・幅5.2cm・厚さ1.7cm・重さ70.3g。

第27図5は長さ6.9cm・幅4.0cm・厚さ1.3cm・重さ38.3g。

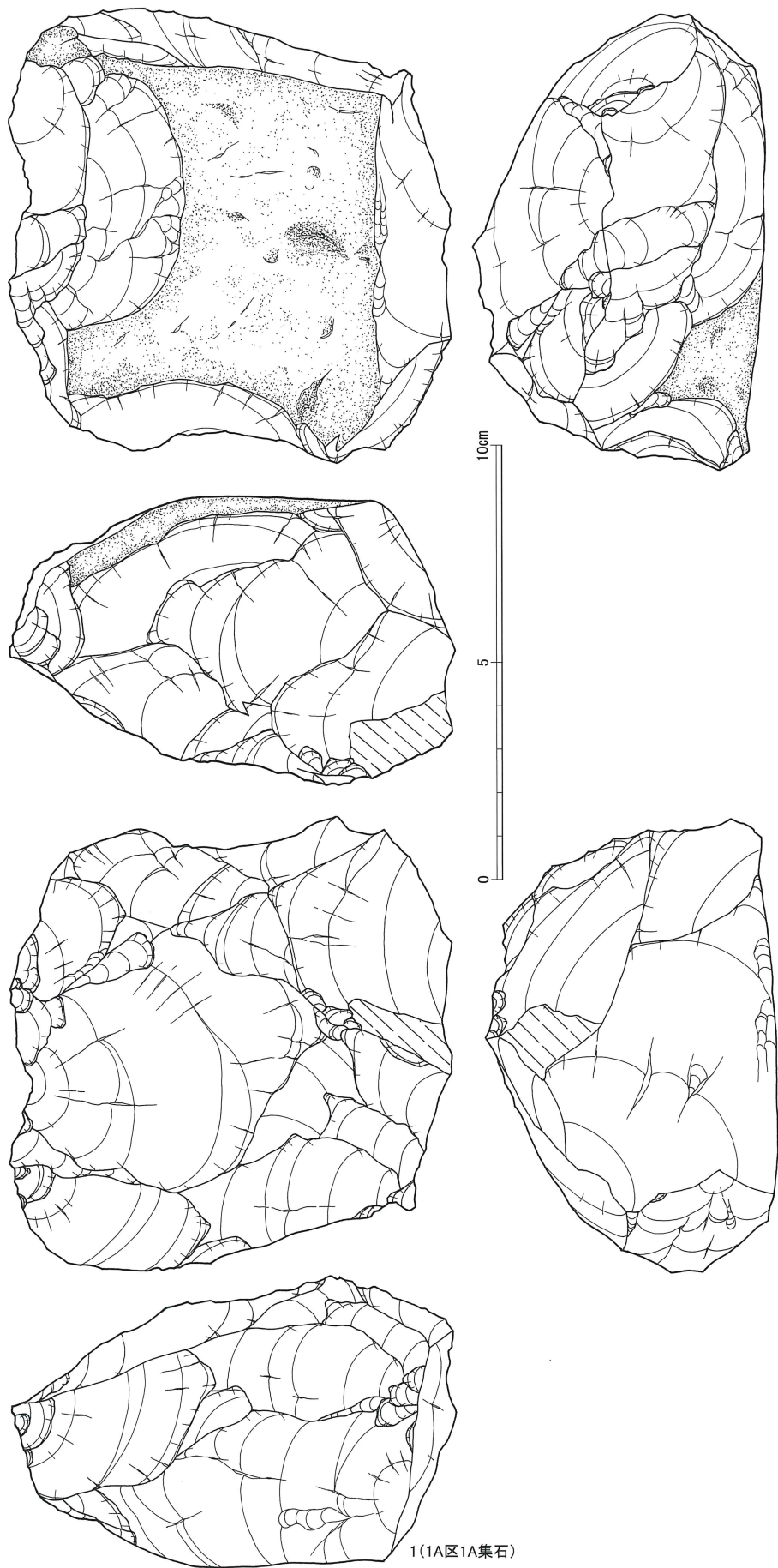
第27図6は長さ6.3cm・幅4.3cm・厚さ1.9cm・重さ51.0g。

第28図1は1区のA・B区にかけて出土した礫群の中に含まれていた石核である。礫群の記述と重複するが説明する。

1は片側に自然面を大きく残し、主要剥離面にその剥離方向が分からないほど剥片剥離を繰り返している。図中の斜線部は節理面である。長さ10.3cm・幅10.5cm・厚さ6.6cm・重さ898.7gである。



第27-2図 第25図の石器分布図

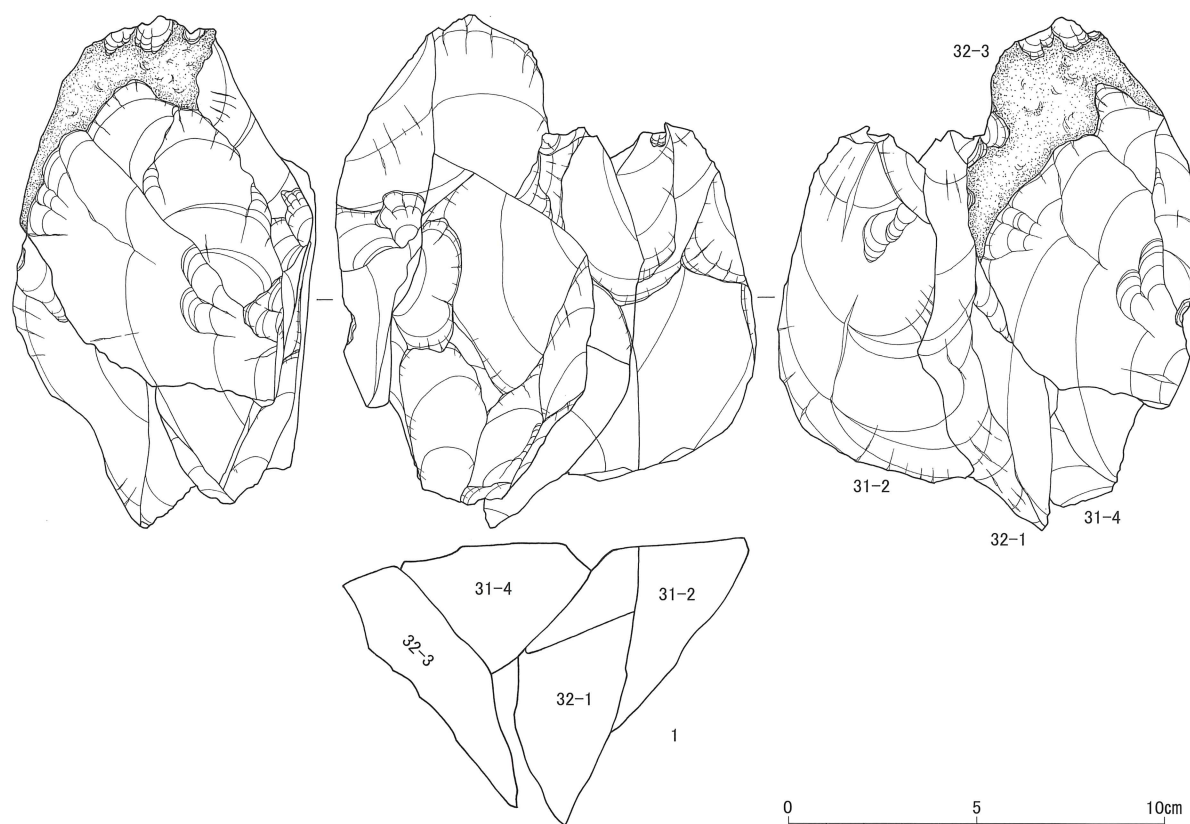


第 28 图 1A区IV層出土石器

次に第25図の剥離過程について説明したい。この接合群には打面調整のための直交する剥片剥離は接合していないで、上下方向から剥離された剥片だけが残っている。この一群で最初に剥離されたのはH図左下に突き出した部分(1B576)である。左方向からの打撃で剥離している。次に剥がされたのは先の剥片と重複する第27-1図1で、反対側から打撃されている。以後、同じ面を打面に剥離が繰り返し行われ、打面調整後に2B983が剥離される。石核である第26図1には打面調整の剥離があり(E)、さらに剥離を行おうとしたらしいが、これで終わっている。

第28図1は1区のA・B区にかけて出土した礫群の中に含まれていた石核である。礫群の記述と重複するが説明する。

1は片側に自然面を大きく残し、主要剥離面にその剥離方向が分からないほど剥片剥離を繰り返している。あるいは幅の狭い側面が主要剥離面の可能性もある。この石核で行われた剥離工程は長軸に平行に上下方向からの剥離が主要なもので、これらに直交する剥離はみられない。図中の斜線部は節理面である。長さ10.3cm・幅10.5cm・厚さ6.6cm・重さ898.7gである。



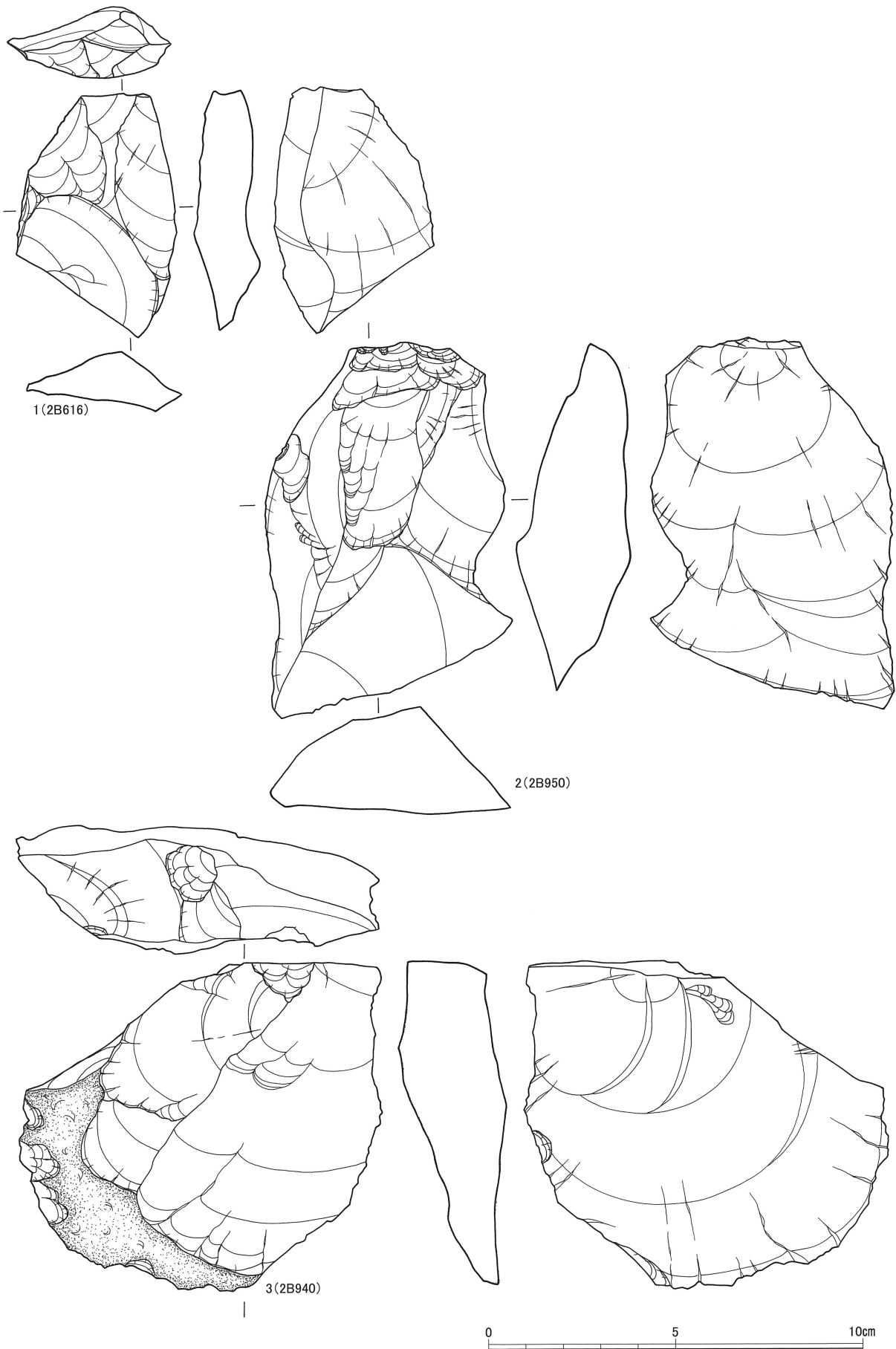
第30図 2B・C区Ⅲ・Ⅳ層石器接合図

第30図はⅣ層から出土した第31図1・2、第32図1～3の接合状態である。2B区の北西部周辺に分布していた。石材は水平方向に縞模様が重なる特徴がある。

個別資料番号は2B616・2B822・2B940・2B950・2C75である。第30図に個別剥片の図番号を入れ、説明する。残った剥片の剥離順序は第32図3(2B940)→第31図1(2C75)→第32図1(2B616)→第32図2(2B950)→第31図2(2B822)である。第32図1を剥離した後、第31図1は左図側を主要剥離面として剥離されるが、剥片上半部を欠損する。次に剥離された第32図1はその後剥離された二つの剥片と同じ剥離面を打面とした可能性が強いが、これらは最初の第32図3の剥離でできた平坦面の末端よりも内側を打面としており、この間に直交する剥離が行われたことになる。



第 31 图 2B区IV層出土接合資料



第 32 图 2B区Ⅲ·Ⅳ層出土接合資料

第33図 1は1B区のⅢ層から出土したナイフ形石器で、素材は横長の剥片である。厚い側の側辺と反対側の辺の一部とが二次加工されている。剥片打面は残らない。刃部は素材の鋭利な縁辺をそのまま利用。長さ5.1cm・幅2.2cm・厚さ0.7cm・重さ8.1g。

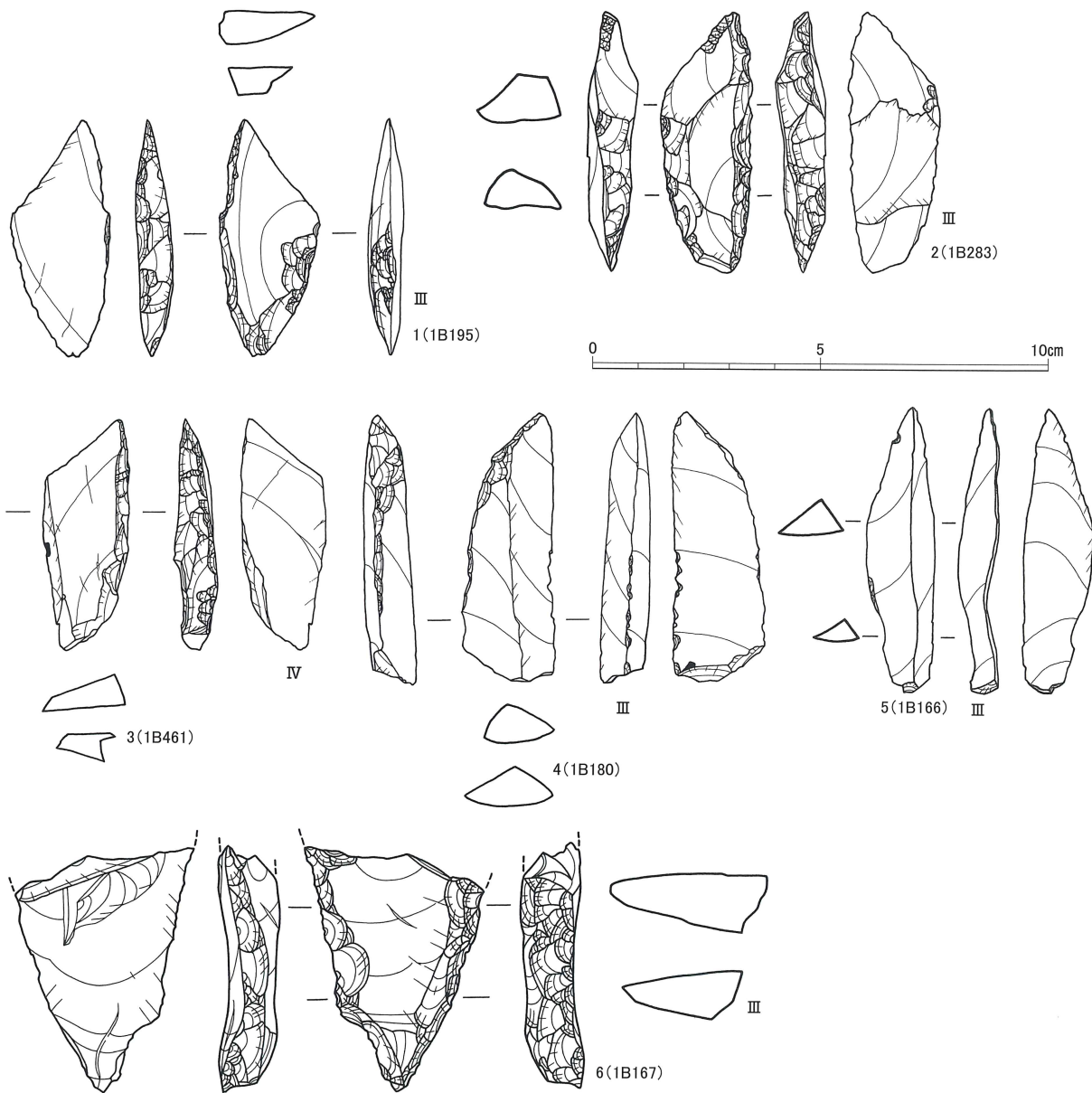
第33図 2は剥片の打点側の辺から先端、反対側の辺から基部に及ぶ二次加工がなされている。長さ5.6cm・幅2.0cm・厚さ1.1cm・重さ11.7g。

第33図 3は厚い側の側辺だけに二次加工されている。長さ5.0cm・幅1.9cm・厚さ1.0cm・重さ7.6g。

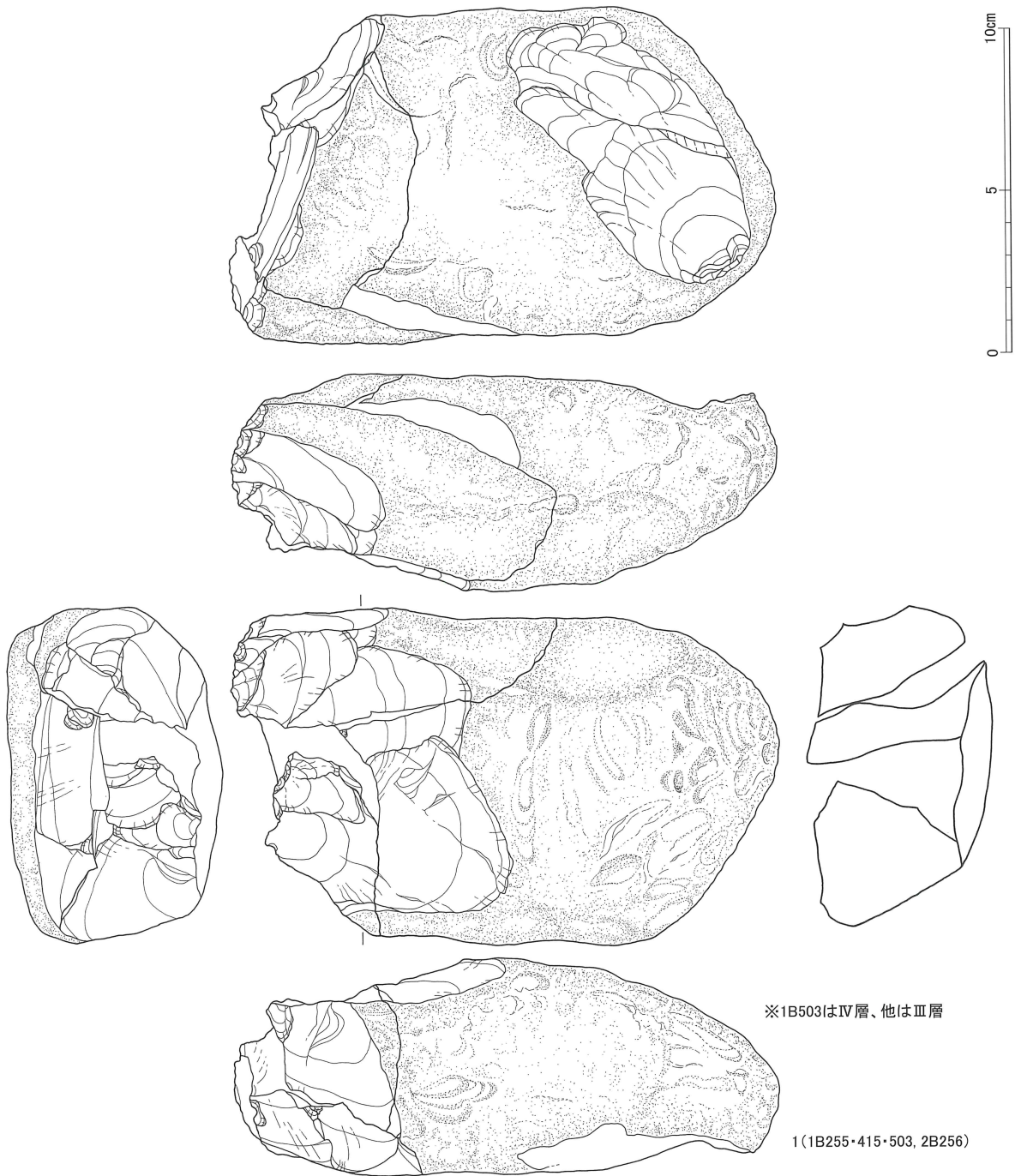
第33図 4は剥片の打点側が折れている。整形の二次加工は剥片末端から一側辺にあり、反対側の縁辺には刃こぼれがある。長さ5.9cm・幅2.0cm・厚さ1.0cm・重さ10.8g。

第33図 5はナイフ形石器大でよく似た剥片である。二次的な加工はない。長さ6.2cm・幅1.5cm・厚さ0.9cm・重さ6.3g。

第33図 6は1B区のⅢ層から出土した剥片尖頭器の欠損したものである。素材となる剥片は両側辺に二次加工されており、幅広い部分で折断している。長さ4.3cm・幅3.9cm・厚さ1.4cm・重さ25.8gである。



第33図 1B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器



第 34 図 1B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器接合図

第34図は接合状態だけを示した接合資料である。関係する剥片類（1B225・1B415・1B503・2B256）は1B区の石器集中部の外縁南西部に分布した。接合関係を第11図に図示している。

接合状態での計測値は、長さ16.9cm・幅10.1cm・厚さ6.6cm・重さ1,600gである。円礫の長軸の一端から直交する剥離を繰り返した状態がうかがえる。

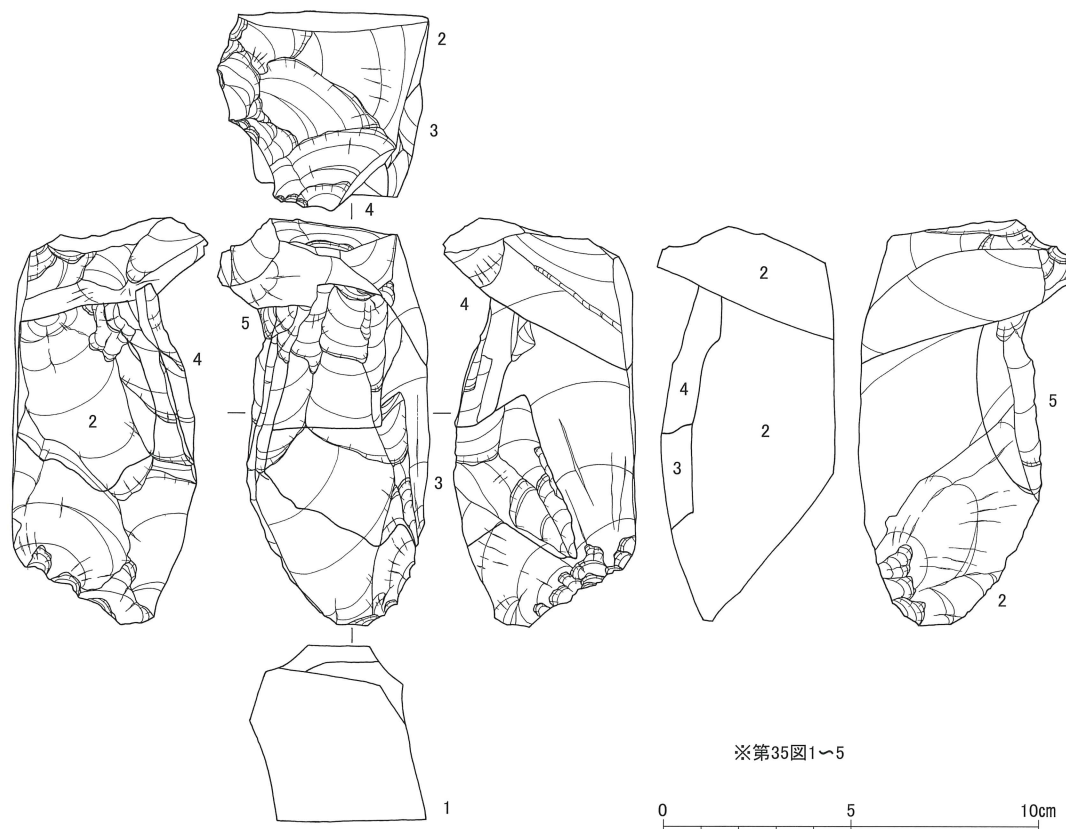
第35図1は第36図1～5の接合状態である。接合資料は1B552・1B553・1B554・2A182・2B699である。2A（2A182）・2B（2B699）区との接合があるが分布図では示していない。ある段階の剥片を剥いだ後の面を打面とし、そこからあるいは側面から新たに剥離を繰り返している。各破片を説明する。第36図1は2B区Ⅳ層出土で長さ4.6cm・幅4.2cm・厚さ2.4cm・重さ22.9gである。

第36図2は最後に残った中心部で、長さ8.5cm・幅5.7cm・厚さ4.1cm・重さ209.6gである。

第36図3は最初に剥離された部分で、長さ6.4cm・幅5.9cm・厚さ2.3cm・重さ82.3gである。自然面は残らないことから大きな礫を用いたものである。

第36図4は長さ4.2cm・幅2.9cm・厚さ0.9cm・重さ14.3gである。

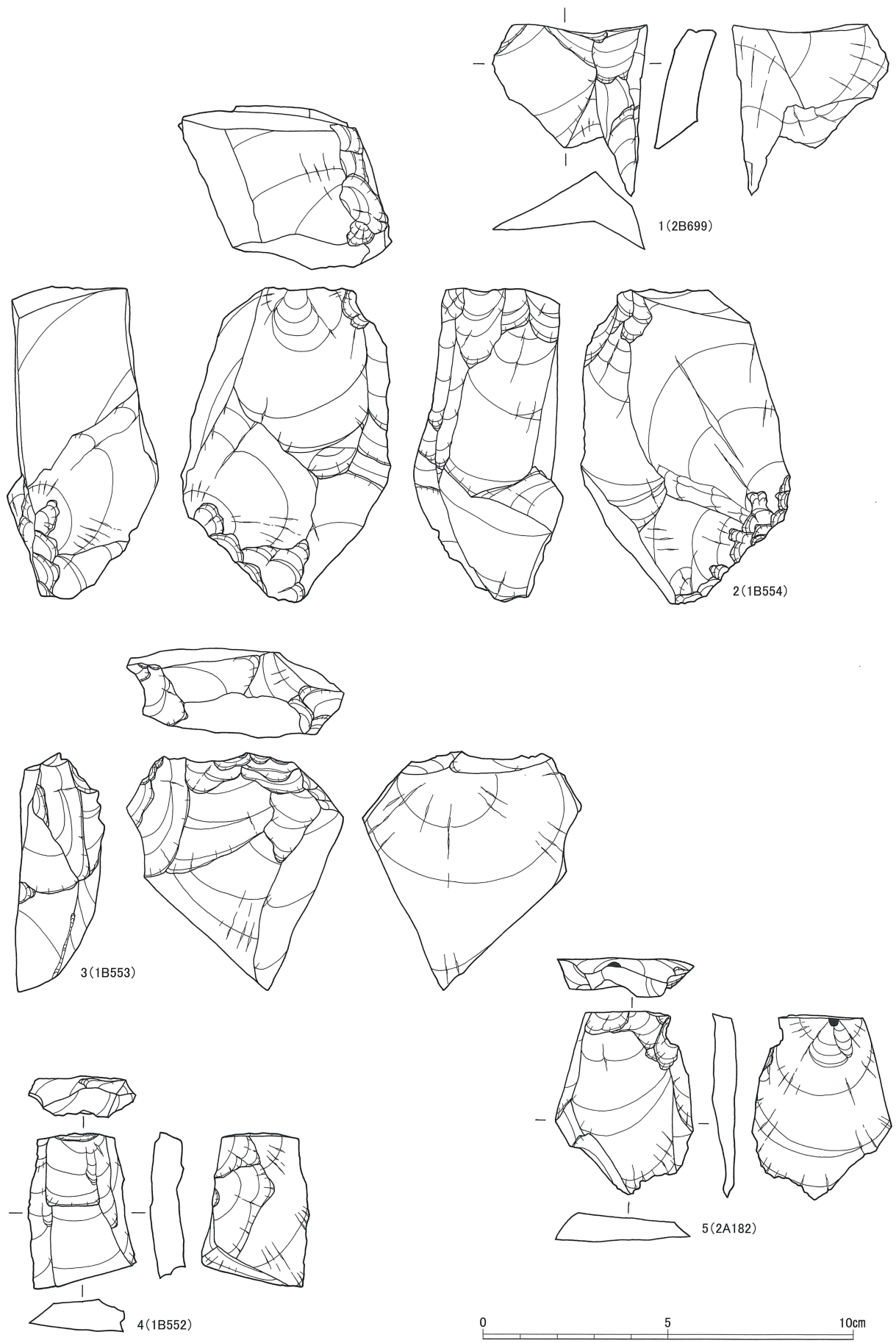
第36図5は長さ5.9cm・幅3.7cm・厚さ0.9cm・重さ17.1gである。



第35図 1B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器

第37図は主にⅣ層出土の第38図・第39図・第40図1・2が接合した状態である(1B357・1B493・1B558・1B561・1B634・1B635・1B637・1B645・1B682・1B717・1B725・3C124)。これらは遺跡の中では1B区の南東部でもその东北部に集中していた。第38図1は長さ8.9cm・幅5.7cm・厚さ1.8cm・重さ77.0g。第38図2は長さ6.0cm・幅7.0cm・厚さ1.1cm・重さ33.7g。第38図3は長さ13.5cm・幅3.5cm・厚さ2.1cm・重さ82.8g。第38図4は長さ6.2cm・幅5.7cm・厚さ2.8cm・重さ72.6g。第39図1は長さ10.6cm・幅3.9cm・厚さ1.9cm・重さ94.2g。1は第40図1と同時に剥離した縦長剥片が二つに折れたものである。第39図2は厚さ1.4cm・重さ29.6g。第39図3は長さ11.4cm・幅4.2cm・厚さ1.5cm・重さ69.2g。第39図4は長さ7.9cm・幅9.1cm・厚さ1.8cm・重さ65.6g。第40図1は長さ6.2cm・幅5.7cm・厚さ2.8cm・重さ72.6g。

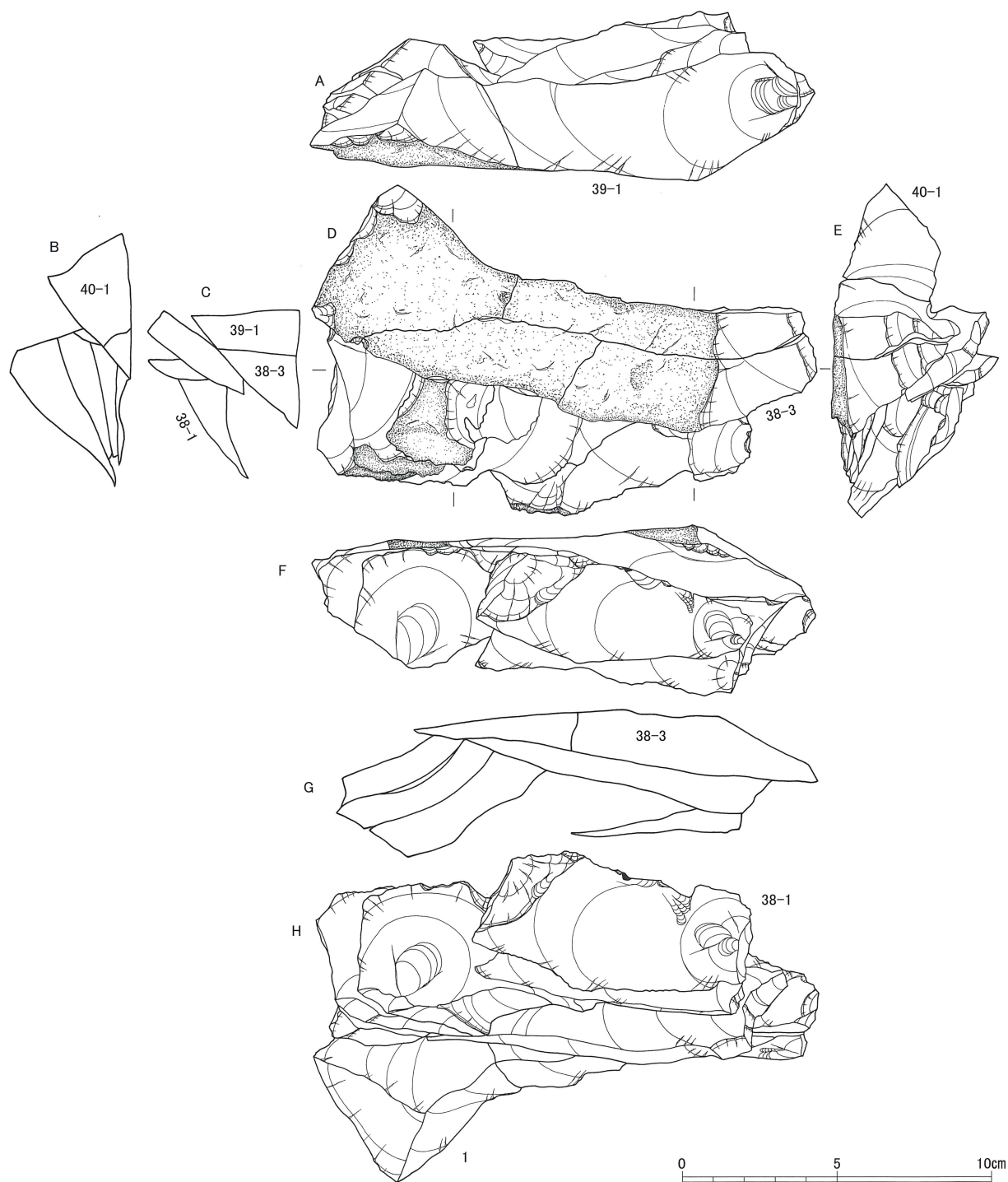
全体的な剥離過程を第37図で説明したい。この接合例はふたつの部分からなる。一つはD図の上部2点の自然面をもつ剥片。この二つ(第38図3・第39図1+第40図1)は初めはもっと幅広い剥片であり、他の剥片群に接する面は同じ剥離面である。これと剥片群とが分離した後に、残りの部分が初めはH図の中央部の上から三番目の剥片(第39図3)が図の右の方から打撃され、次にF図の左部分にあるように長軸に対して直交する剥離が4回行われ(第38図4→第40図2→第38図2→第39図4)、再び第39図3と共通の剥離面を打面とする剥離が4回行われたことが分かる(□→第39図2→□→第38図2)。



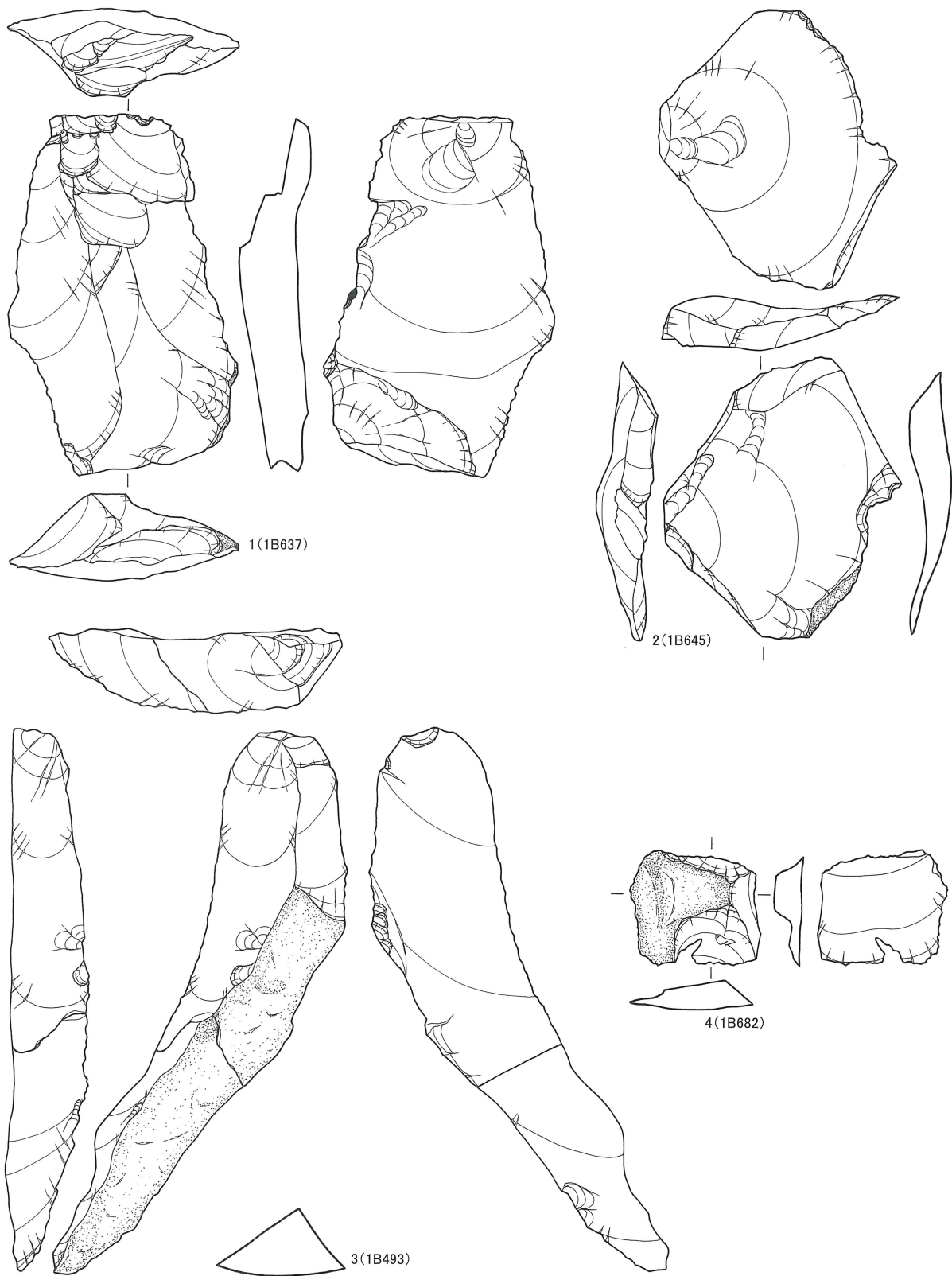
第 36 图 1B区出土接合資料

第41図 1 (1B651) と 2 (1B709) は 1 B区南東部に分布し、北西-南東方向に接合した。IV層上部出土で接合する剥片である。その接合状態を第43図 1 に示した。第41図 1 は長さ8.7cm・幅6.5cm・厚さ2.4cm・重さ64.1gである。1の剥離後、打面を再生し新たな面から次の第41図 2 が剥ぎ取られている。2 は長さ7.7cm・幅5.0cm・厚さ1.6cmである。

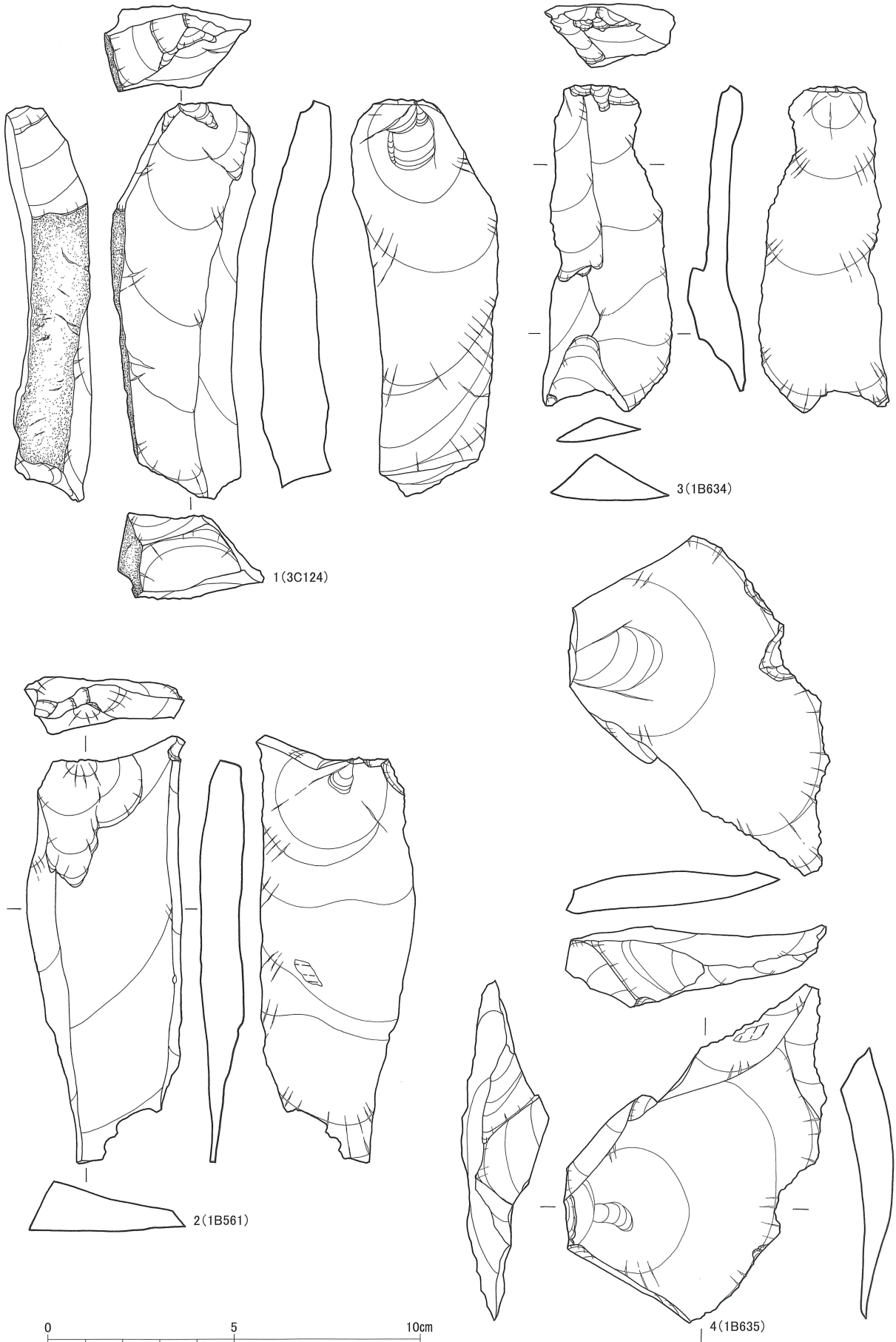
第41図 3 は 2 A区のⅢ層から (2A105)、4 は 1 B区のⅢ層から出土し (1B384)、接合する剥片である。分布状態図には示していない。4の南東方向に3.3m離れた位置に3が出土している。第43図 2 にその接合状態を示す。



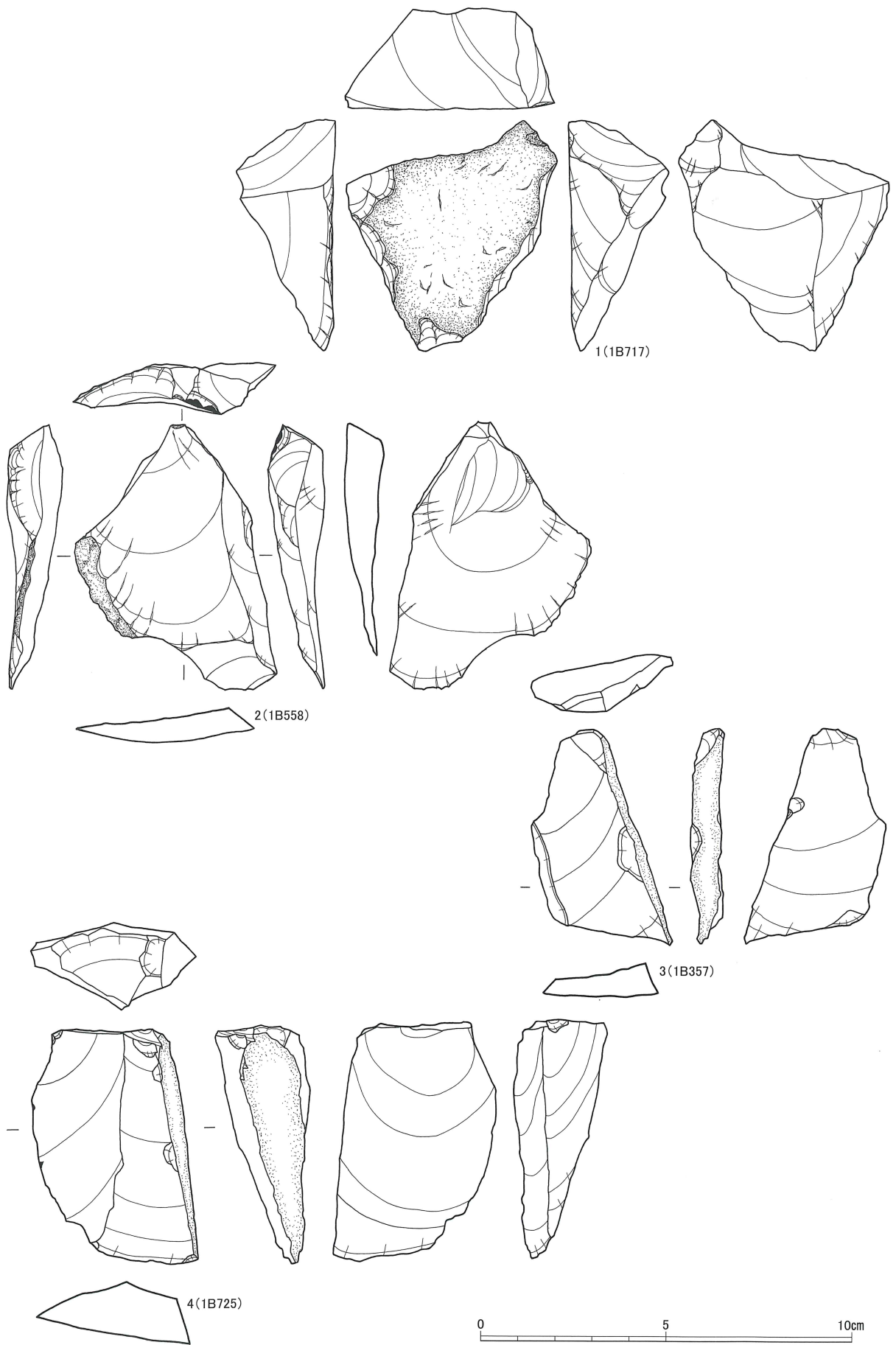
第 37 図 1B・3C区IV層出土石器



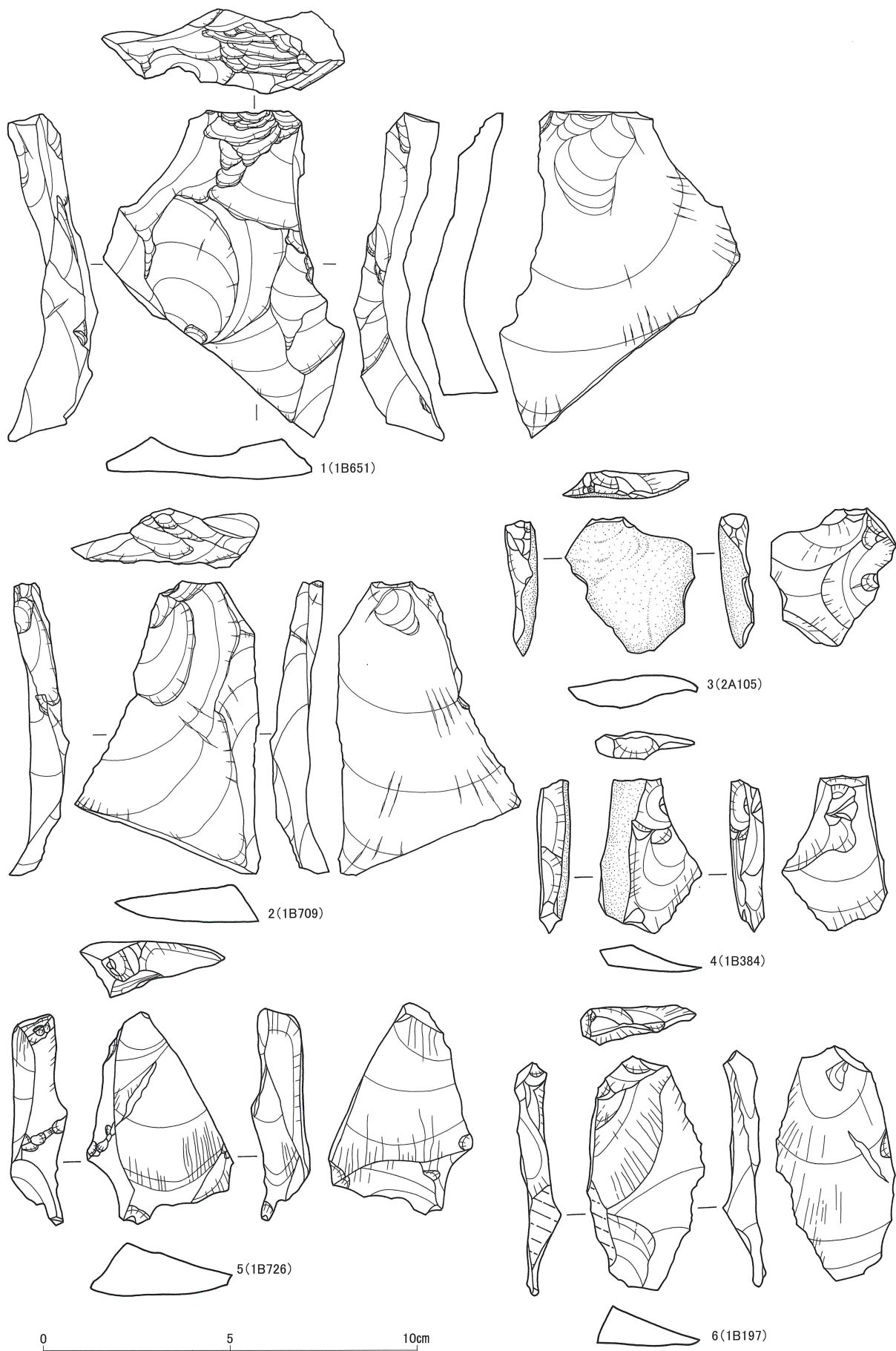
第 38 图 1B区IV層出土接合資料



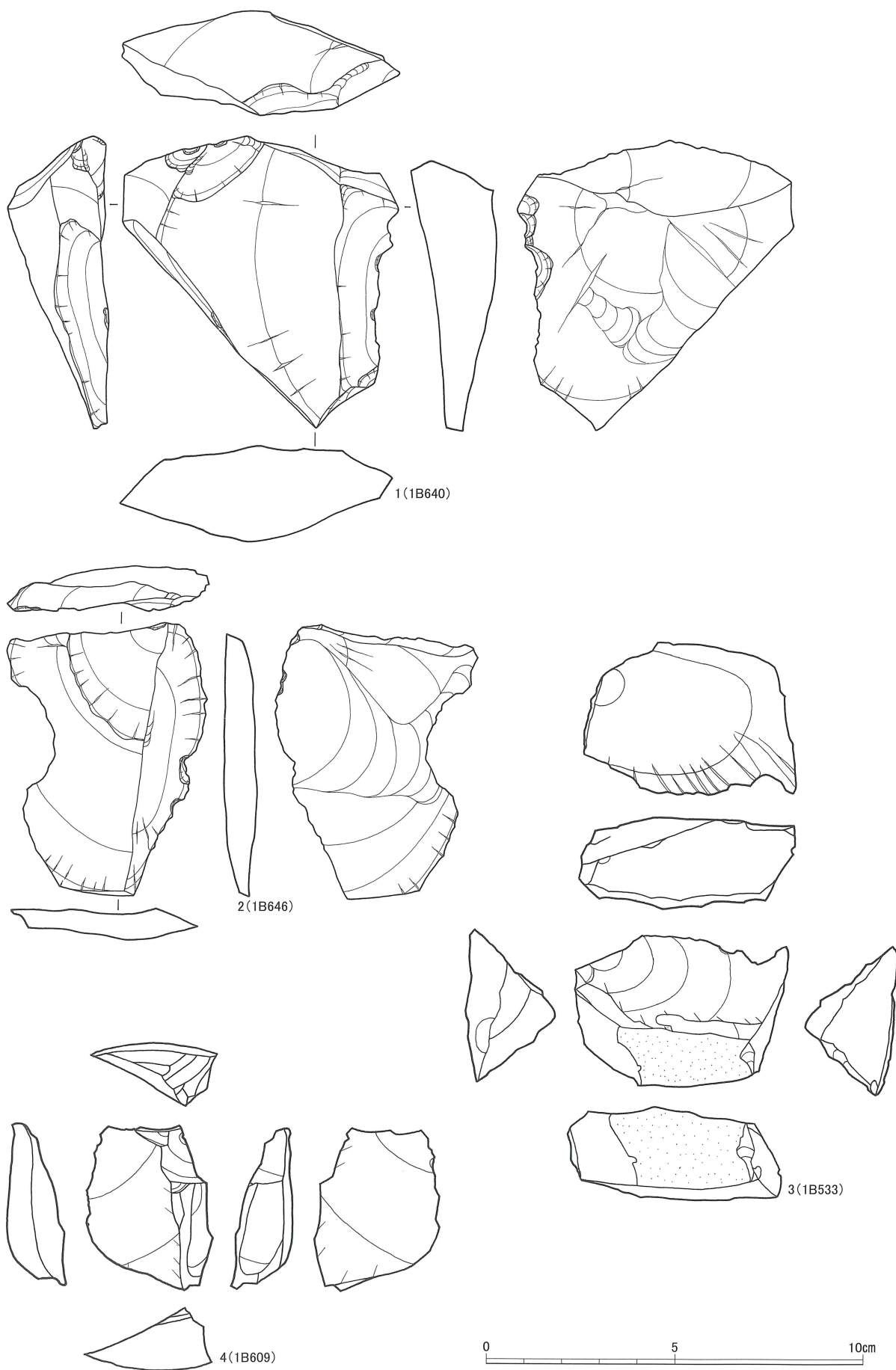
第 39 图 1B区IV層出土接合資料



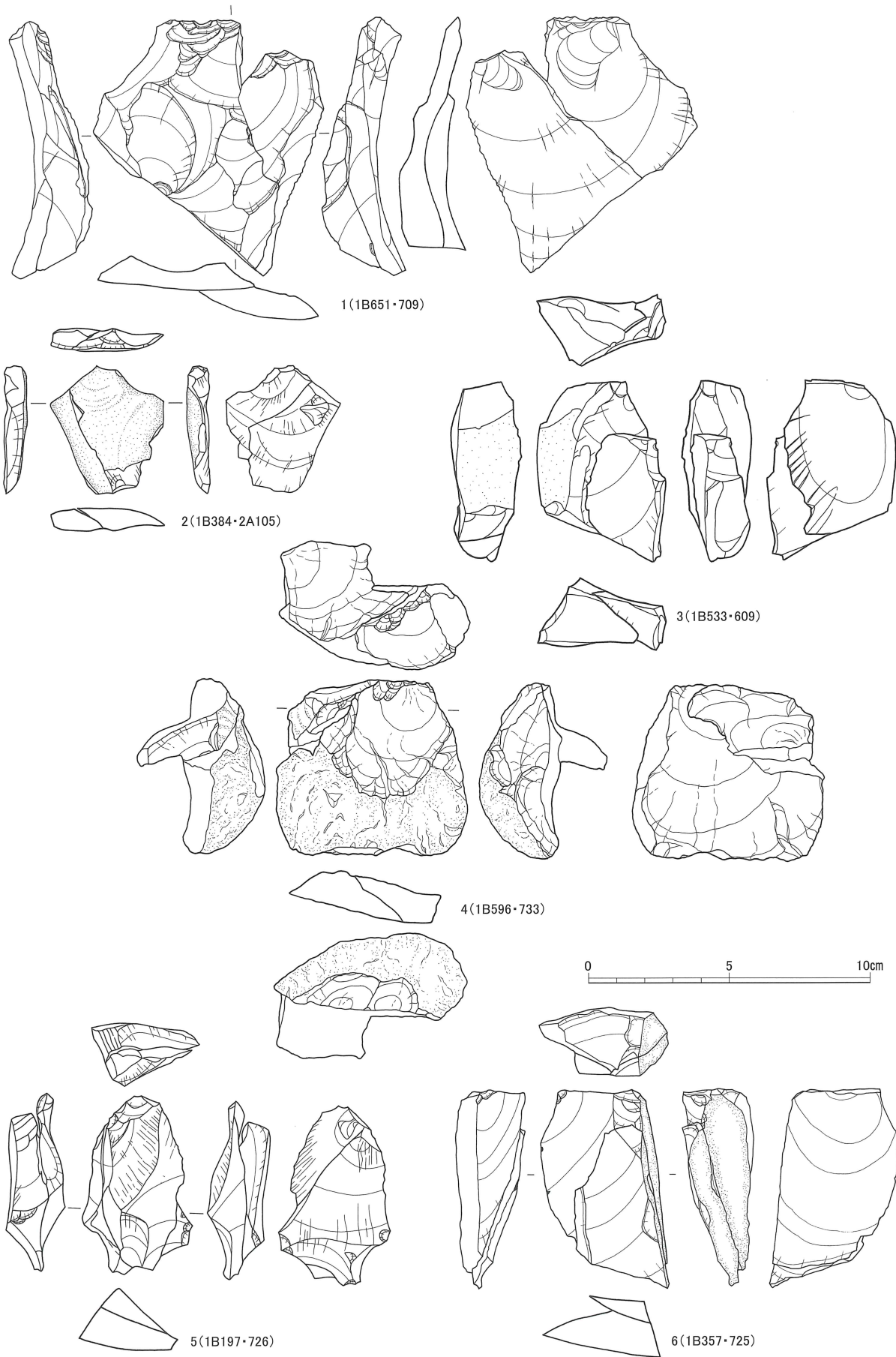
第 40 图 1B区Ⅲ·Ⅳ層出土接合資料



第 41 图 1B区Ⅲ·Ⅳ層出土接合資料



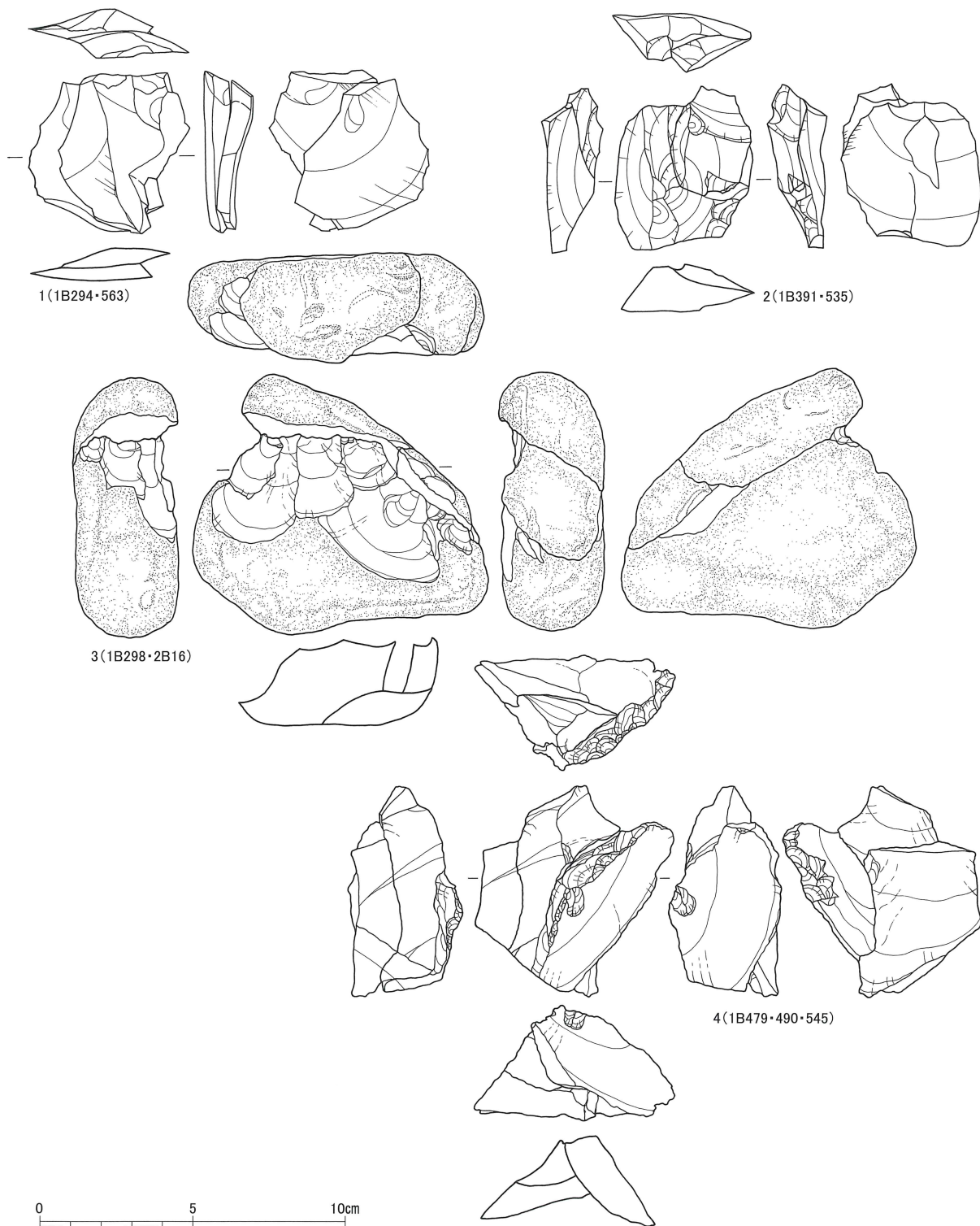
第 42 图 1B区IV層出土接合資料



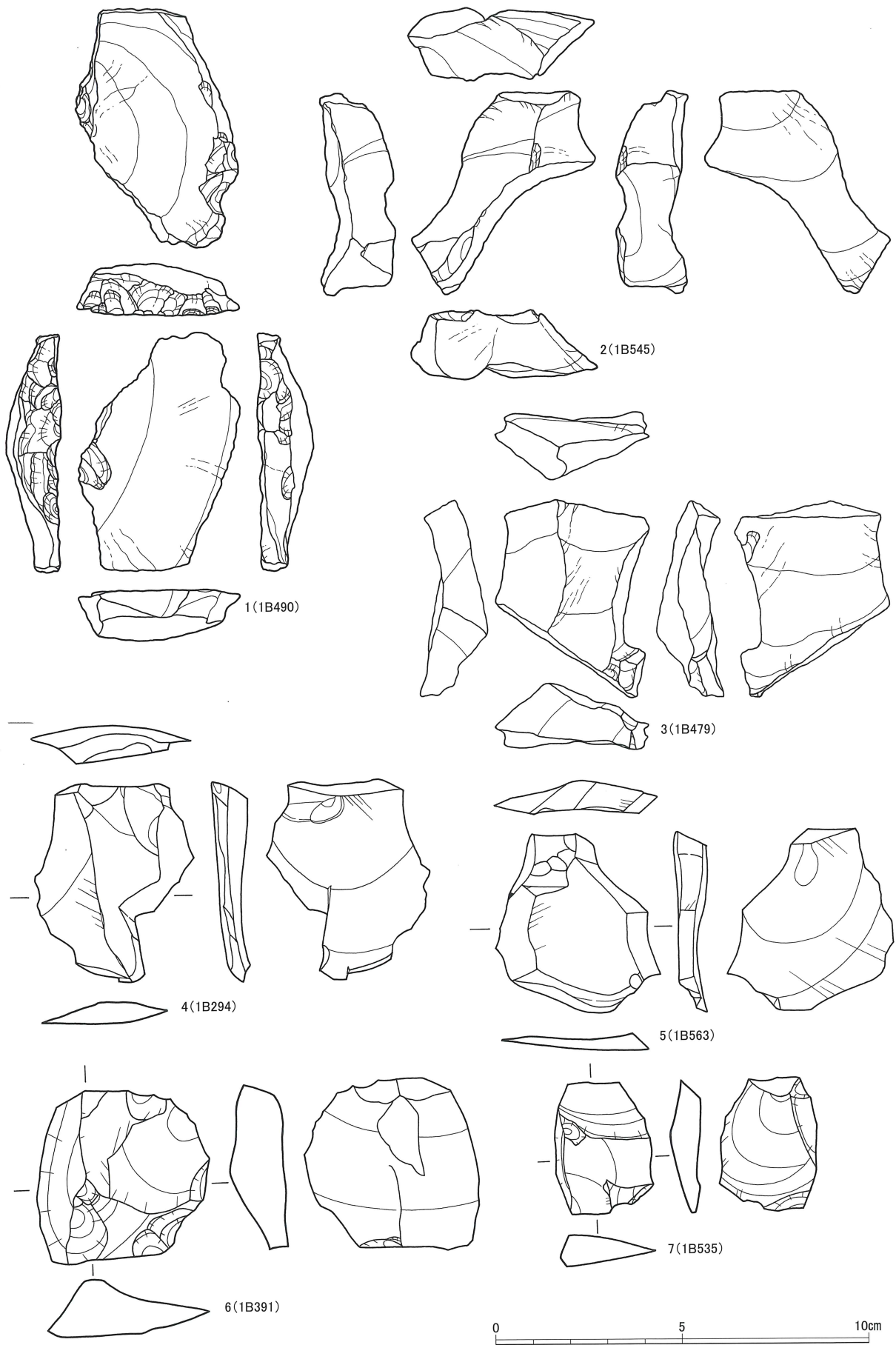
第 43 图 1B区IV層出土石器接合图

第41図5 (1B726)・6 (1B197) は1B区のⅢ・Ⅳ層から出土し、接合する剥片である。第43図5にその接合状態を示す。これらは1B区の南東部に分布した。

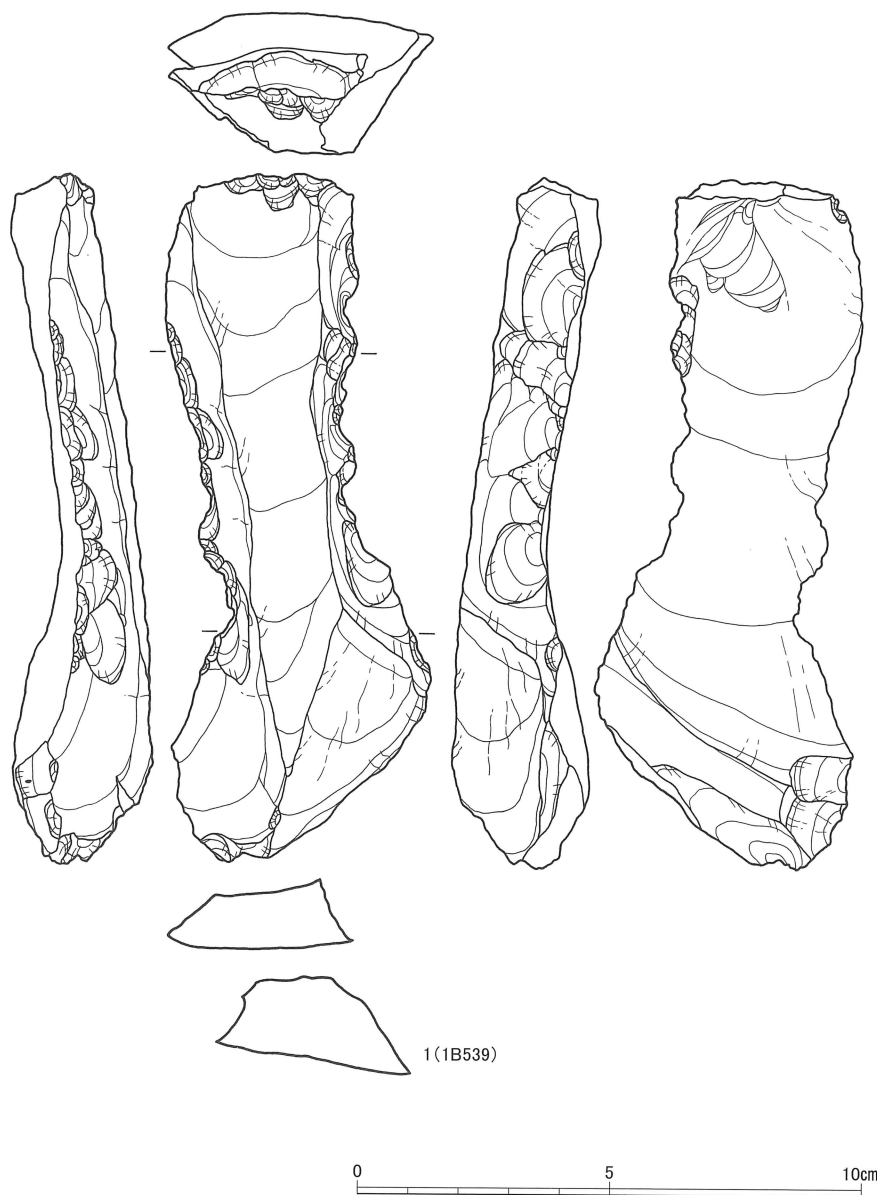
第42図3 (2A105)・4 (1B384) は1B区北東部のⅣ層と2A区北西部から出土した接合剥片である。第43図3に示すように両者の打面は同じ高さにあったはずである。



第44図 1B区出土石器接合図



第 45 图 1B区IV層出土接合資料



第46図 1B区IV層出土石器

3.2m離れた2B区東部に1点である。1(1B298)を最初に打ち剥ぎ、次に2(2B16)を剥離している。以上の作業で目的の剥片を得る事前準備は終わり、できた平坦面を利用して3(1B404)からおそらく6枚の剥片を剥離している。全体は長さ8.5cm・幅9.7cm・厚さ3.5cm・重さ33gである。

第44図4はIV層上部付近で出土した第45図1(1B490)・2(1B545)・3(1B479)が接合した状態である。1B区南東部で0.45m~0.7m離れて出土した。接合線の方向は北西-南東である。これらの剥離順は第45図1→第45図2→第45図3である。1は長さ4.3cm・幅6.3cm・厚さ1.4cm・重さ37.0g。この剥片は打点から一側辺に二次加工を重ねており、ナイフ形石器の未成品とみられる。2は長さ5.4cm・幅5.0cm・厚さ2.0cm・重さ23.8g。3は長さ5.2cm・幅4.1cm・厚さ1.7cm・重さ25.7g。

第43図4はIV層出土の破片(1B596・733)が接合したものである。接合した小さい方の剥片(第15図4)が剥がされたのち、二段階の作業を経て大きい方が元の塊から打ち剥がされている。

第15図5は長さ5.0cm・幅4.1cm・厚さ1.8cm・重さ20.9g。1B596は長さ6.2cm・幅6.7cm・厚さ2.9cm・重さ128.3g。

第44図1は1B区南東部で平面的に0.3m離れて接合した。打面を共有(同じ剥離面のどこか)する剥片(1B294・1B563)である。

第44図2(1B391・1B535)は1B区南東部で1.1m離れて接合した。

第44図3(1B298・1B404・2B16)はIV層上部から出土した3点が接合した状態である。これら各々の個別図は示さない。出土した場所は1B区の南東部に2点、

第46図1は第45図3のそばから出土した二次加工のある縦長の剥片である。石核から剥がされたあと、両側面と先端部が加工されている。長さ13.6 cm・幅5.3cm・厚さ2.8cm・重さ129.4 g。

この他、遺物実測図を示さない接合例がある。大半は2 B区のIV層から出土した1 B330・2 B32・2 B501・2 B587・2 B646、および1 B538・1 B592・1 B595・1 B642・1 B644・1 B706・2 B864・2 B865・2 B868・2 B877の主にIV層出土遺物である。

1 区の石器について

1 区から出土した定形的な石器にはナイフ形石器（第33図1～4：3はIV層。他はⅢ層）・剥片尖頭器？（第33図6：Ⅲ層）がある。ナイフ形石器は縦長剥片の打面側を基部にし、打面を消すもの（第33図3・4）と横長剥片を素材にして長辺の両側に背つぶし加工するもの（第33図1・2）がある。

2 区の調査

2 区はA・B・Cとあるが、4 m四方があるのはB区だけで、A区は約3 m強×4 m、C区は三角形の狭い範囲である。

石器の分布状態

第47図に2区から出土した石器の分布図を示す。水平方向の見とおし図は南から北を向いて見た状態図である。調査区の層序は図の左、すなわち西側が高く、右側、つまり東側に向かって徐々に低下している。図中、小さい点はⅡ層・Ⅲ層上半部から出土した石器であり、白丸はⅢ層下部からIV層出土の石器である。遺物出土状態の水平方向見通し図を作成したところ、全体をとおして上下の二つに分かれて存在するように見えるため、このように区分した。遺物一覧表では機械的に出土層をⅢあるいはⅣと区別せざるを得なかったが、実際は同じ人々が残した多数の遺物が自然作用で上下に浮き沈みしたものであろう。

分布図を見て気づくのは2 B区の中央部分に接合資料が多いことである。B区と3 C区で接合する例もあるように、B区が分布の中心になっている。1 B区との間で接合する例がいくつか存在する。また、A区では西部に石器が比較的が多く、東部に移るにつれ分布が希薄になっている。2 A区でW字状の接合関係を示す石器は遺物実測図を作成していない（2A88・2A97・2A103・2A163・2A187・2A219・2A377・2A447・2A536・2A629・2A852）。

1 区の部分で触れたようにⅢ層とIV層の境界付近に分布する1区・2区の石器群は、平面的な分布状態・石器の接合状態・包含層の位置からひとつのまとまりに属すとみられる。

なお、いくつかの石器はIV層よりも下に投影されるが、自然作用による上下移動の結果であろう。

礫の分布状態

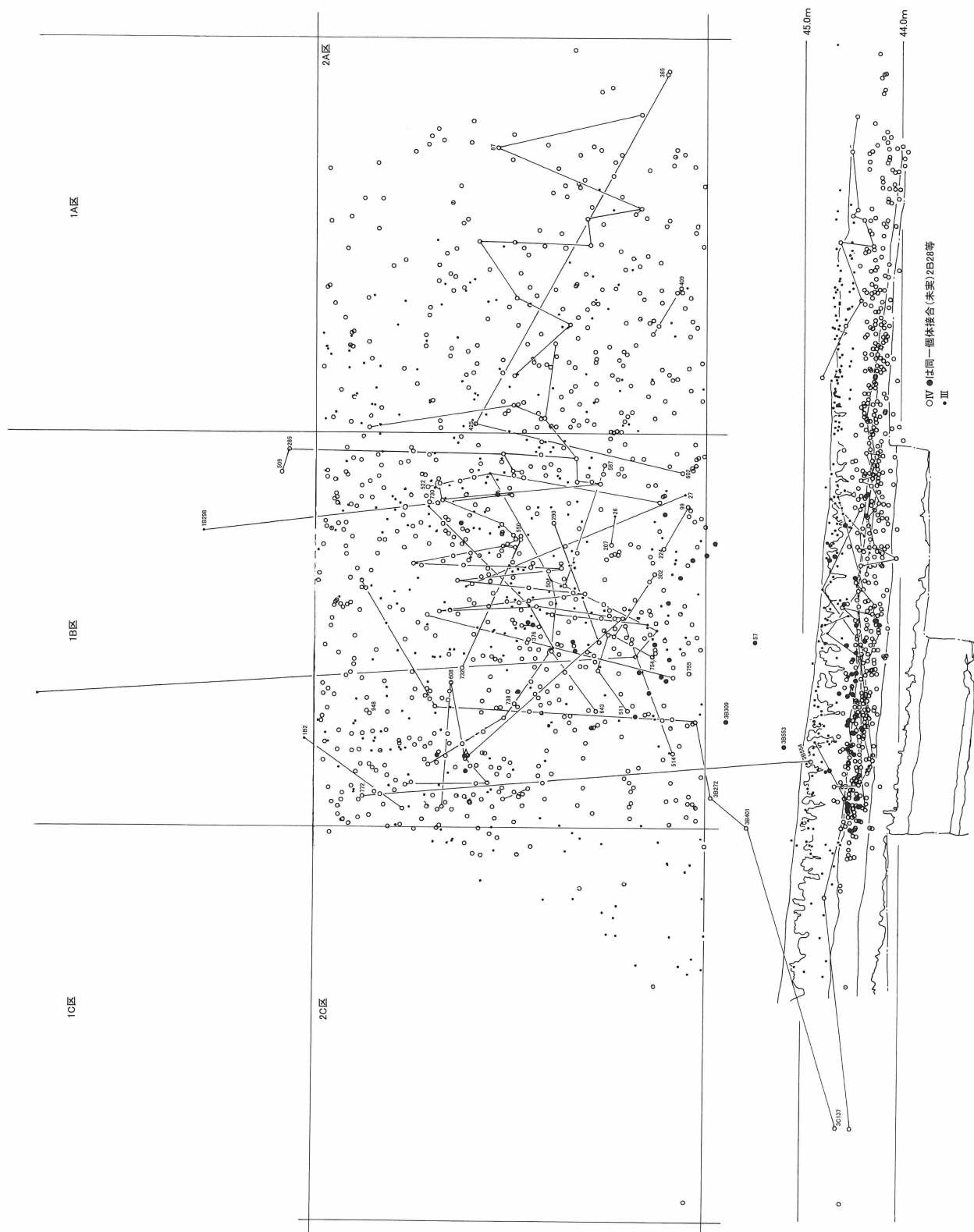
2区から出土した礫の分布状態を第48図に示す。石器の場合と同じく、図中の小さい点はⅡ層・Ⅲ層上半部から出土した礫であり、白丸はⅢ層下部からIV層出土の礫である。

礫の分布状態は石器ほど多くはない。破損した礫の接合関係を線で結んで示すが、それほど多くはない。それでも2 B区の南東部から2 A区南西部付近に中心があるように見える。

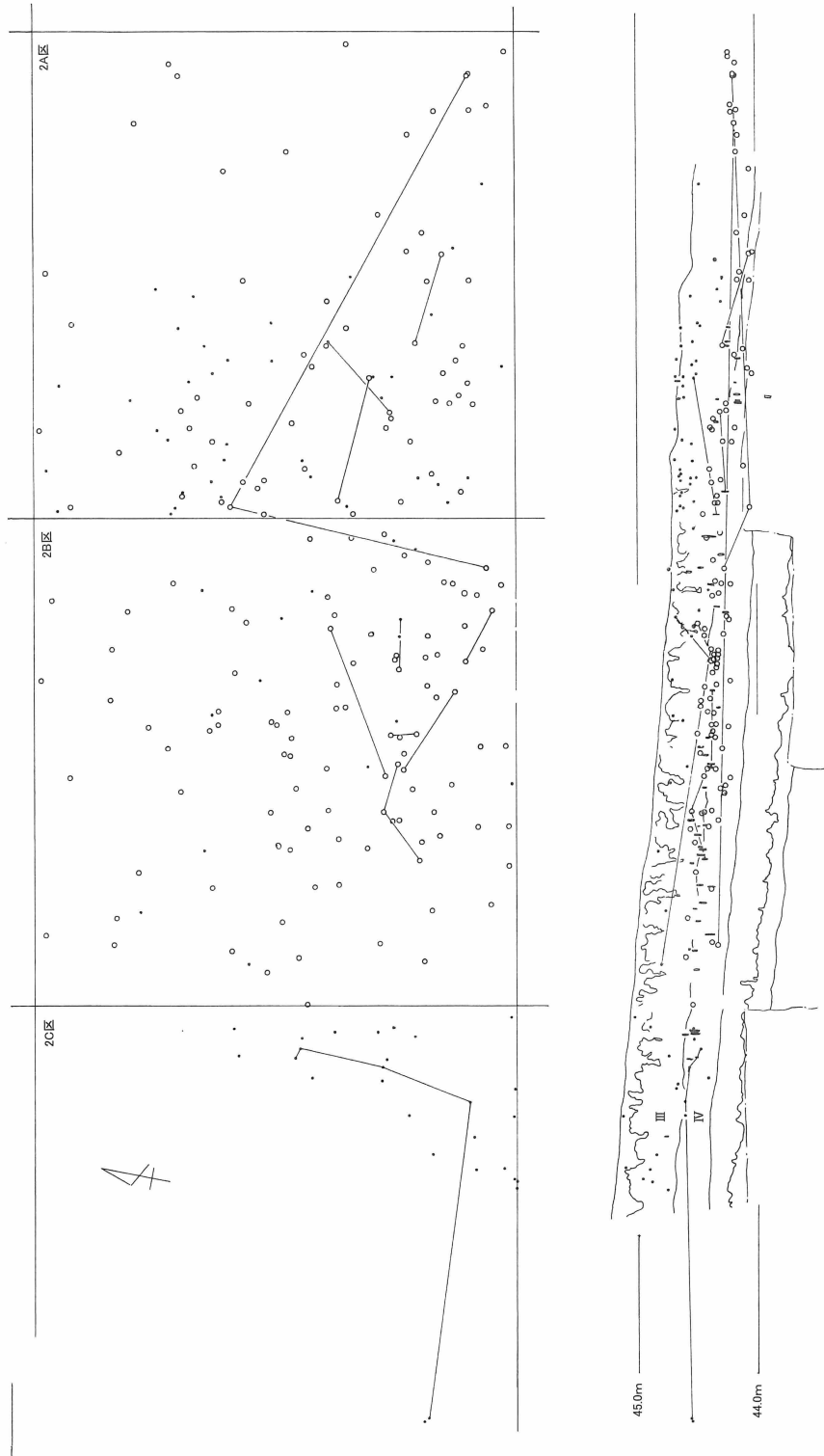
出土層のあり方は石器の場合と類似している。

2A区の集石

第49図は2A区の南西部において礫が5個まとまって出土したので、集石とした。出土層位はIV層中に対応するように見える(第49図は1/10図である)。これらの礫は上下の変動はなく、水平に並んでいる。どれも大きさは10cm前後の円礫である



第 47 図 2 区出土石器分布図



第 48 図 2 区出土礫分布図

2 区出土石器

2 区から出土した石器も全点を図示できなかった。接合関係は文中で説明するが全てを分布図上で結んではいないことを明かにしておきたい。

第50図 1 は接合した状態だけを図示する。個別剥片の実測図はない。この接合資料群は次の番の遺物である。